齊哈爾附近に集中して張軍の北上を阻止せんとし、且つ密に蘇軍と連絡して武器彈藥の供給を受け、其の支援を仰ぐべく畫策する所があつた。

十月中旬となると張軍は洮昂線により北進を開始し、其の主力を五廟子（泰來北方）に集結し、其の一部は江橋附近に進出したが、嫩江北岸にある砲を有する黑軍先遣部隊のため拒止せられ、且つ嫩江の鐵道橋が十月十五、十六日黑軍のため燒却破壞せられたので張軍は當分前進の見込なき狀況となり、其の主力は洮南附近に引退するの止むなきに至つた。

抑々洮昂線は滿鐵が奉天政府と契約を結び建設工事を請負ひ、大正十四年三月工事を開始し、十五年十二月引渡を完了し、昭和二年三月より營業を開始した。滿鐵が投下した工事費は約一千五百萬圓、車輛其他約百餘萬圓合計一千七百萬圓である。之れが返濟其他に關し次の如き契約の公文を取交はしたのである。

一、鐵道引渡後、奉天政府は直ちに工事費其他一切を仕拂ふこと

二、若し右費用を鐵道引渡を受けたる後六ケ月に至るも仕拂ふこと能はざる時は直に借款契約を締結すると共に年九分の利子を仕拂ふこと

然るに奉天政府は無法にも總て此等の契約を履行せず、昭和六年六月迄に未拂元利合計約二千六

百萬圓に達して居る。

此の如く舊奉天政府は滿鐵より鐵道の引渡を受け、現に營業を繼續して居りながら工事費其他元利一錢も仕拂はず、契約上の義務を毫も履行せず、從つて滿鐵は債權に對する擔保として同鐵道を保護保安をしつゝあつたもので、支那軍が其內爭のため之を破壞する如きは固より許容し難き所である。恰も當時の十月は北滿物產の出廻り期に際し、其の特產物たる大豆約六十萬噸（運賃約四百萬圓）は鐵道破壞のため輸送不可能に陷ゐり、洮昂線及び之が接續線たる滿鐵側の蒙る損害は甚だ大なるのみならず沿線地方住民の經濟生活並に交通に脅威を與ふること亦莫大なるものがあつた。

是に於て洮昂鐵路局及び滿鐵は速に嫩江橋梁を修理し、其運行を回復せんことを企圖し、在齊々哈爾林駐在武官、淸水領事を通じ、幾度か彼に修理を促したが、彼は言を左右に托し荏苒日時を空費するのみであつたが我强硬なる數次の接捗により、十月三十日を期し修理に着手すべきを言明した。然るに其の期日に至るも着手せざるのみか、彼の馬占山は「我には蘇軍五萬の後援あり」等の威赫的言辭をさへ弄し非禮極まるものがあつた。

此の如くして支那側には同橋梁を修理する意志の全然なきことを確認したるにより、止むなく洮昂鐵路局及び滿鐵は十一月四日より自ら之を修理するに決し、其作業掩護を關東軍に依賴した。蓋

し修理作業に際しては同地附近に相對峙する張、黑兩軍特に黑軍從來の態度と當時橫行しつゝあつた匪賊の狀況とに鑑み、兵力を以て掩護するにあらざれば、作業の遂行期し難く又此際作業を完成するにあらざれば、嫩江は凍結して作業（杭打）不可能となるに至るの切迫した狀況にあつたからである。

依て關東軍は十一月二日一部の兵力を嫩江河畔に進め、其作業を掩護せしむるに決し、張、黑兩軍に對し左の要旨の警告を發した。

一、我軍は兩軍の內爭に關し嚴正中立の態度を取る
二、不虞の事態發生を豫防する爲め兩軍は各橋梁を隔てたる十粁以外の地點に後退すべきこと
三、當分該橋梁を戰術的目的の爲め使用を禁ず
四、我軍の行動を妨害し又は對敵行動に出づる場合は其の何軍たるを問はず必要且つ有効なる自衞手段を講ず

嫩江は廣大なる河床（濕地）を形成し、此河床約八粁の間に五個の橋梁が掛けられ、其內南岸に近き三個が破壞せられた。而して南岸には江橋、北岸には大興（依布氣東方）の驛がある、即ち我軍は大興を占領せざれば橋梁の修理を掩護する能はざるは言を要しない。而して黑軍は北岸依布氣附近を占領して居るから、我軍は依布氣より十粁以北に撤退すべく要求したのである。

戰鬪の經過

而して關東軍は嫩江橋梁修理を掩護せしむる爲め、濱本大佐の指揮する步兵三個中隊、砲兵二個中隊及工兵中隊を以て嫩江支隊となし十一月二日其の輸送を開始した。

一方、張軍は軍の警告により十一月四日までに五廟子以南に後退したが、黑軍は四日に至るも撤退の模樣なく、戰備を整へ益々挑戰的態度を示すに至つた。即ち二日夜嫩江支隊は橋梁破壞點の偵察の爲め斥候を派遣したが、同斥候は第二橋梁附近まで前進せるに盛んに黑軍の射擊を被り、又三日午前同樣偵察を行はんとしたが、黑軍は第三橋梁附近を占領し、機關銃を配置して射擊せし爲め、遂に偵察の目的を達するを得なかつた。此くて四日早朝に至り黑軍は石參謀長を軍使として齊々哈爾より南下せしめ同參謀長は淸水領事、林駐在武官、早崎外務書記生と共に午前九時頃江橋に到着し、我嫩江支隊に對し、黑軍は日本軍に抵抗の意志なきことを通告して歸還した。依て支隊の一部たる第七中隊は大日章旗並に小國旗を揭揚し大興に向ひ前進したるに、午後〇時半頃大興南方千米に達するや、嫩江北岸の陣地にあつた黑軍は突如不法にも猛烈なる砲火を加へ戰鬪を挑み、我兵は不意の騙し打ちに忽ち十五名の死傷者を生じ、一時橋頭に後退するの止むなきに至つた。

茲に於て支隊は斷然黑軍を攻擊するに決し直ちに前進を起し午後二時過ぎ第七中隊の線に進出したが、前面は一帶の濕地で前進困難なるのみならず、我砲兵の射彈は敵陣地に達せず、正面より戰鬪を進むることは至難なるを以て、支隊は第五中隊を增加して敵陣地の左翼に向ひ迂回せしめて、戰況の發展を待つことゝなつた。依て第五中隊は敵砲火の下に困難なる濕地を跋渉して、遂に夜襲を以て大興東北方約三粁の高地を占領した。

之に依り支隊主力は五日未明から行動を起し、午前六時砲擊を開始して七時過ぎ攻擊前進に移つたが、敵は堅固なる陣地に據り頑强なる抵抗を續けたるも八時半頃大興驛東方約一粁半の陣地要點を奪取して十時過ぎ迄に敵の第一線陣地を占領した。然るに敵は其後方約七八百米附近にある陣地に據り更に頑强なる抵抗を繼續し、午後三時頃に至るや、優勢な騎兵を以て我が右側背に攻擊し來り攻守其の處を轉じ支隊は多大の損害を受けて、非常な苦戰に陷つた。

然し乍ら將兵一同は飽くまで必勝の信念を失はず、軍旗を中心として慘烈なる戰鬪に堪へ、饑餓を忍び、克く皇軍の意氣を發揮しつゝ夜に入つた。

關東軍司令官は當時嫩江支隊の狀況に關し大なる關心を抱き、軍參謀石原中佐を派遣せしが四日夜同參謀より「黑軍は毫も撤退の色なく頑强なる抵抗を期し居るものゝ如し」との報告を受け、取り敢へず步兵一個大隊を支隊に增加することゝなし、步兵第二十九聯隊第一大隊を急派せしめられた。

增援隊なる大隊は四日夜半出動の命令を受け直ちに其の警備地鄭家屯を發して北上し、五日午後七時半江橋に着いた。既に戰端は開かれ而も支隊の苦戰を報ぜられ、間の江橋は負傷者で充滿されて居たが、直ちに膝を沒する嫩江を跋踄して戰線に參加した。

北滿の十一月は既に寒氣猛烈にして零下十度內外を上下する日もあつたが、水流及土地の表面は未だ全く凍結するに至らず、我が增援隊は敵前約六七百米附近まで前進して此處に更に攻擊の爲めの據點とすべき散兵壕を構築することが出來た。右第一線に第一中隊、左第一線に第二中隊を展開し、暗黑淒慘を極めたる戰場に支隊本部を搜索した。

支隊は午後より敵の重圍の裡に苦戰を續け、孤軍奮鬪背水の陣を布き、支隊長濱本大佐は敵の重圍に多數の兵士の眼のあたり斃れ行く慘烈さに遂に軍旗に對する處置を講じ、寶刀を拂つて腹一文字に掻き切るの悲壯極まる決意までなしたと云はれて居る。漸く夜明け近くに增援隊と支隊本部と相連絡することが出來たのである。

かくして夜明けから步砲協同の下に攻擊を再起することゝなり、午前九時攻擊前進に移り彈丸雨

注の間を將兵一同勇戰し、遂に敵陣地を奪取して、正午支隊は大興附近に兵力を集結し、爾後橋梁修理掩護の配置に就くことを得た。此の日最後まで猛威を逞しくした敵砲兵の射撃は頗る正確で、支那軍としては珍らしい現象であつた。此の戰鬪に參與せる敵の兵力は約二千で我損害は戰死三十六名、負傷百四十四名で、敵の戰場に遺棄せる死體は約二百にして内蘇國人が二名あつた。

× × ×

此の戰鬪は黑龍江軍が張學良等の命令を受け、蘇國の後援を頼み、我に對し挑戰し來りたるものなることは餘りにも明瞭な事實である。初め我軍は事前に於て彼我の衝突を惹起せしめざる樣、最善の努力を盡したるを以て、彼は之を與し易しとなしたるか、其の軍使を以て我に抵抗の意志なきを通告しつゝ、大日章旗を掲揚せる我軍に對し騙撃的に急襲し、本戰鬪の發端を作つて居る。我が軍が寡兵を以て數倍する敵に對し斷然攻勢に出でたるは、自衞上勿論當然のことゝは云ひ乍ら、其の悲壯なる覺悟に就ては吾れ人共に襟を正さゞるを得ない。實に僅に四百に滿たざる兵力を以て、二千を下らざる敵に對し、朔北の寒野に惡戰苦鬪、精神的團結を發揮せる、皇軍の精華は即ち我大和民族の眞骨頭を發露せるものである。

黑軍の不信不法に依て惹起せられたる本戰鬪の結果として、之を追撃し徹底的に打撃を加ふべきは、理の當然であり。我軍が多大の犠牲を拂ひたるに於ては、殊に然りである。而して戰勝の効果を完からしむるには、戰鬪後に於ける追撃を最も大切なりとする。然るにも拘らず我が軍が追撃を行はざりし所以のものは、一に專ら橋梁掩護の爲めの初目的に鑑み、事態を擴大せざるの誠意に外ならぬものであつて、實に我軍の公正なる終始正義を持して渝らざる態度を知ることが出來よう。

其の後馬占山は我軍が隱忍自重し追撃を行はざるを奇貨措くべしとなし、昂昂溪南方地區我が前面僅々數里の地區に陣地を占め、之を强固にすると共に、該地附近にあらゆる兵力を集中し、他方蘇國の支援と相俟ち、再び挑戰的態度を示し「軍は滿城滿野屍を以て埋むとも日本兵を擊滅し、已むなくば嫩江河畔に護國の鬼と化せん」と豪語するに至りては、寧ろ其の心情大に憐むべくして其の無定見なる我等の想像だにも及ばないものがある。

張學良政權の暴政に久しく苦んだ滿洲三千萬民衆は、此の事實を契機として内外に惡戰苦鬪して以て遂に新國家を建設したのは、此れから約四箇月後のことである。荒凉寂寞極まる朔北の野に陛下萬歲を三唱して、從容死に就いた我が忠勇なる將卒も、此の輝かしき王道新國家の誕生と、其の發展とに對し、定めし會心の笑みを洩して安かに眠らるゝことであらう。

齊齊哈爾神社大祭恭賦（滿洲國承認三周年紀念）

五色國旗交日章。　滿都祥氣太洋洋。
齊哈社畔縱行樂。　已見皇威覃朔疆。

五色の國旗は日章に交はる。滿都の祥氣太だ洋々。齊哈社畔行樂を縱まにす。已に見る皇威の朔疆に覃ぶを。

齊齊哈爾望江樓にて偶ま得

驕虜威空水上泡。　漸看皇化及荒陬。
望江樓上放双眼。　嫩水洋洋入海流。

克山農場にて……盧元善氏の講演後の紀念撮影

齊齊哈爾神社大祭參拜の一行

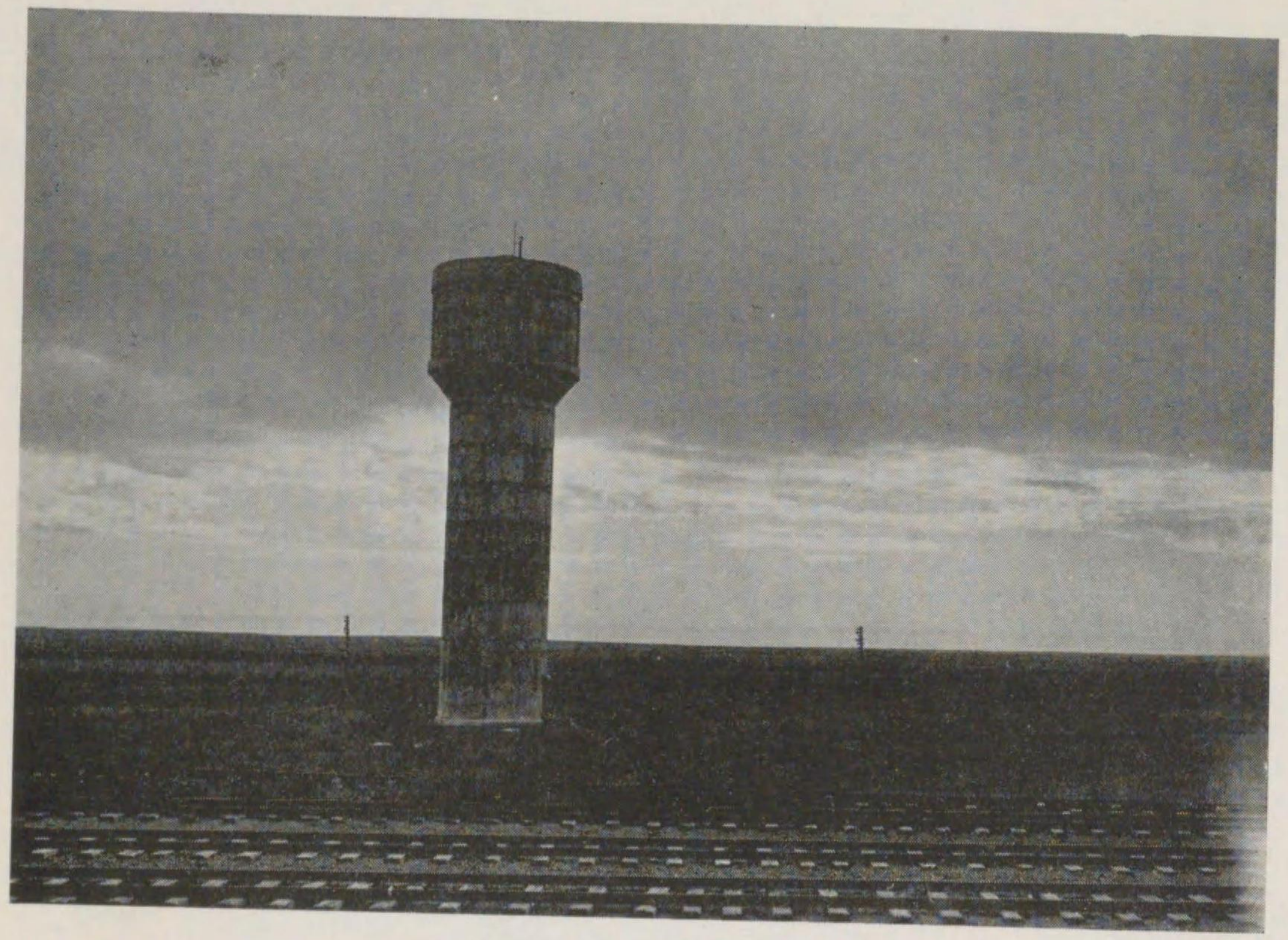
驕虜の威は空し水上の泡。漸く看る皇化の荒陬に及ぶを。望江樓上双眼を放つ。嫩水洋々海に入て流る。

齊齊哈爾は人口七八萬、內日本人三四千人を有し黑龍江省の行政地として殷盛を極めて居る。我一行の訪問せし時は滿洲國承認三周年に當り、其の祝賀の爲め大々的祭典が擧行せられ、齊齊哈爾神社の境內に於て日本式の大祝賀會と共に各種の餘興があつた。藝妓の手踊り、角力、擊劍等皆な日本式ばかりで滿洲式のものがなかつた事を遺憾に思つた。齊齊哈爾神社に一行の旅行をして安全ならしめんが爲めに神官に依賴して御祈禱をして貰つた。

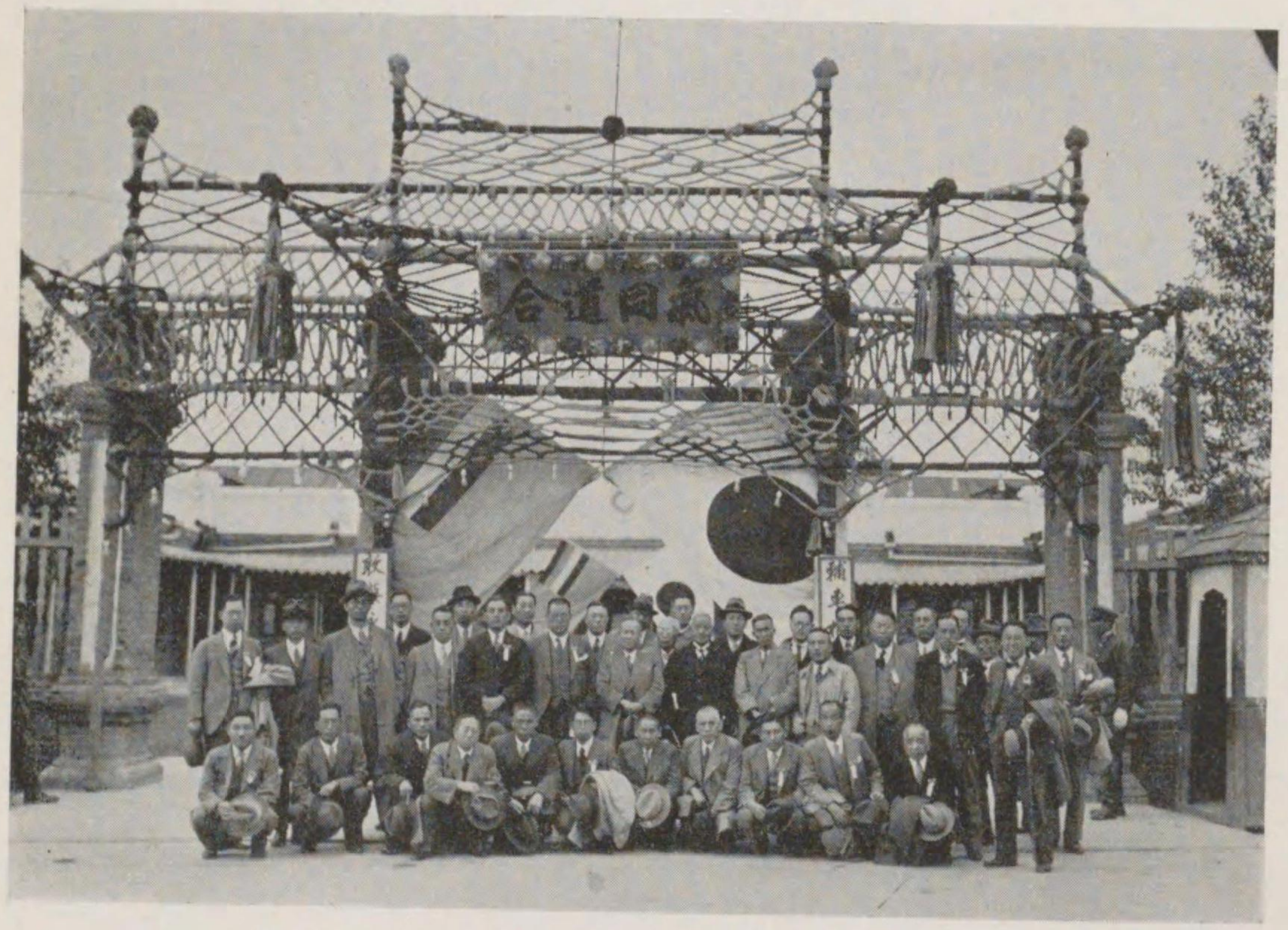
特に愉快に感ぜし事は望江樓の高臺に上つて一望千里嫩江の流域を遠望して皇化の涯(はて)知らぬ邊疆に及べる事を痛感する事であつた。

盧元善大人の高韻を次す

七十餘年一塞翁。　吾曹志業只窮通。
談論坐覺交情切。　謝汝縱横日語工。



北満の廣原……（克山附近にて）



齊齊哈爾省公署訪問の一行……（馬占山の本營とした處）

七十餘年一塞翁。吾曹の志業は只窮通。談論して坐ろに覺ゆ交情の切なるを。謝す汝が縱横日語の工みなる。

註・盧元善氏は龍江省實業廳長で日語を巧みに話され、一行の發するに臨んで、驛頭左の一絶を揮毫して贈られた。

鶴髮童顏矍鑠翁。　古稀塞北試交通。

熱心實業已堪羨。　尙有詩歌字句工。

鶴髮童顏矍鑠翁。古稀塞北交通を試む。熱心實業已に羨むに堪へたり。尙ほ詩歌字句の工みなるあり。

丁鑑修氏が亦次韻されて名刺の裏に書いたまゝ私に示された。それは

人生宜視白頭翁。　何計成敗與窮通。

得過且過隨時樂。　智巧終莫勝天工。

註、白頭翁はあほう鳥のこと。「得過且過（トッカタンカ）」はあほう鳥の鳴く聲のこと。

盧元善氏は前にも述べた通り黑龍江省の廳長である。我々一行が「チ、ハル」に着いた時は歡迎

大いに務められ、特に一夕の招宴を張られた。支那料理としては最も珍らしい饗應に預つた。
翌朝私達が七時出發の際にはわざ／＼驛まで見送られ、其時畫箋紙の半切に認めて贈られたのが鶴髮童顏云々の詩であつた。其日私が北安に宿つて、次韻し、厚意を謝して送つたのが前記の詩である。

其の詩が丁鑑修先生から更に次韻されて「得過且過（トツカタンカ）」の鳥の鳴く聲の詩となつたのである。

丁鑑修氏は現在滿洲國實業部大臣の榮職に居らるゝ人である。我々特産協會の一行三十餘人を新京の旗亭に招待せられた際、メーンテーブルに丁大臣は私と對座せられた。その時餘興の積りで盧元善と私の應酬の詩を清覽に供したら、同大臣は暫くして名刺の紙片に右の一首を書いて私に示されたのであつた。此の詩に依て丁大臣の高雅な人生觀の一部を拜察する事が出來ると思ひ、玆に記載して讀者の一覽に供した。

北安途上

嘉穀穰穰千里連。　民情淳化是登年。

農村點在黃雲裏。　鷄犬聲傳北滿天。

嘉穀穰々千里に連なる。民情の淳化は是れ登年。農村點在す黃雲の裏。鷄犬の聲は傳ふ北滿の天。

又

日出大原沒大原。　車窓極目僅看村。
無邊沃野有終美。　正是皇民稼穡園。

日は大原より出でて大原に沒す。車窓極目僅かに村を看る。無邊の沃野有終の美。正に是れ皇民稼穡の園。

北安軍司令部を訪ふ

儼然臨姦賊。　靄然對良民。

北安北黑ホテル前（中央は著者）

北安民家訪問の一行

天兵威自震。　王道則蒼旻。

儼然として姦賊に臨み。靄然として良民に對す。天兵威自ら震ひ。王道は蒼旻に則とる。

北安に於ては團長として後藤氏と共に軍司令部、縣知事等を訪問し、特産協會と滿洲農産物との關係を説明し、司令部に對しては滿洲の治安の大任を果されつゝあるを感謝し、又匪賊討伐の實狀を聽いた。軍と云ひ、縣當局と云ひ、此の奥地に於て邦家の爲め一身を犧牲に供し、奉仕生活に盡瘁せらるゝを見ては誠に敬虔の念に堪へざるものがある。

北安に向ふ途中で克山に下車して農事試驗場を見た。此處では各種の農作物の試作が研究せられ、同所長村越氏はハルビン迄汽車に同乘せられ、滿洲農作物の試作の狀況を詳細に説明せられ、特に小麥作奬勵に付て品種の改良によつて凶作を豫防せんと苦心中との事であつた。事實此の膨大なる滿洲農國でありながら年々貳千萬袋に近い麥粉を輸入して居る現狀に鑑み滿洲國として大いに研究す可き事柄である。併し内地の製粉會社側としては此の小麥粉の自給自足が内地からの輸出小麥粉を防壓する結果となるから喜ぶ可き事ではない。併し滿洲國民の食料安定の基礎對策として滿洲の國策上止むを得ざる事である。

海北より海倫に至る

車窓日日對茫茫。　無水無山獨倚床。
北滿曠原含夕照。　沿途初見稻田黃。

車窓日日茫々に對す。水なく山なく獨り床に倚る。北滿の曠原夕照を含む。沿途初めて見る稻田の黃なるを。

香塘曰。寫大陸茫漠之景逼眞。筆頗有精彩。

滿洲を見るには夜行列車に乘つては駄目だと云ふ建前から晝行列車でばかり旅行した。併し每日茫々漠々たる光景には殆んど堪へらるゝものではなかつた。數日間同一風景に弱つて居る時であるから何んでもない。稻田を見て玆にも日本人が居るかと思ひ一寸睡む氣を醒まして一首を得た。

哈爾賓志士の碑

烈烈朔風捲雪吹。　挺身敵地將有爲。
天機僅逸身被縛。　臨死從容何所悲。
一片丹心排萬難。　百折不撓唯果斷。
壯烈如此少匹儔。　千秋史表光芒燦。
如今妖雲壓疆邊。　豈無胡馬蹴塵煙。
志士碑臨淞江水。　英靈呵護東亞天。

烈々たる朔風雪を捲いて吹く。身を敵地に挺して將に爲すあらんとす。天機僅かに逸して身は縛せらる。死に臨みて從容何の悲む所ぞ。一片の丹心萬難を排す。百折撓まず唯だ果斷。壯烈此の如きは匹儔少れなり。千秋の史表光芒燦たり。如今妖雲疆邊を壓す。豈に胡馬の塵煙を蹴るなからんや。志士の碑は臨

む淞江の水。英靈呵して護らん東亞の天。

畫禪云。志士之靈得之。將嫣然地下。僕思作者吟斷此一篇了。或恐熱涙一下。

香塘曰。志士忠勇鬼神亦感。此篇以雄勁峭拔之筆。善寫志士面目。悽慘悲壯。言言迸血。結末以時事收束。殊見波瀾變化之妙。

其　二

丈。夫。心。事。太。堂。堂。　節。義。高。明。迫。太。陽。
碑。面。長。留。金。石。字。　併。將。正。氣。拂。秋。霜。

丈夫の心事太だ堂々。節義高明太陽に迫る。碑面長く留む金石の字。正氣を併せ將て秋霜を拂ふ。

横川沖兩志士に就いて

ハルビンに於て第一に敬意を拂はんとするものは殉難志士六烈士の碑である。碑は賓綏線に沿うた病院街の近く一望千里の平原中に儼然と聳えてゐる。新市街から舊市街に通ずる並木の大街道の

沖・横川二烈士銃殺の刹那

風蕭々兮易水寒壯士一去不復還……（齊齊哈爾班の六烈士）

中央から遙か西南方に當つてゐる。此の志士の碑は横川、沖兩氏を初め脇、中山、田村、松崎六烈士の英靈を祀つてあるのだ。日露戰爭當時露軍の輸送の路を斷たんが爲め嫩江爆破の重大な使命を帶びた六烈士は身を喇嘛僧に變へ內蒙古を經て富拉爾基附近まで潛入したが、事露見して遂に成らず、横川、沖兩氏は捕へられて哈爾賓に護送され、軍事探偵として此處で銃殺された。他の四氏は遁れて西に走り更に鐵道破壞と敵狀視察との使命を果さんとしたが、途中土匪に襲撃され憤死した。此等護國の鬼と化した六烈士の碑は、哈爾賓日本居留民の義捐と、我が駐屯軍の勞力奉仕によつて建立せられ、毎年春秋二季に盛大な招魂祭が擧行され、我が帝國興隆の尊き犧牲として哈爾賓の有する歷史的光彩である。

是から一寸横川、沖二烈士の悲慘壯烈の銃殺を受けた狀況を記してみたいと思ふ。

明治三十七年二月十一日、露國膺懲の宣戰の大詔が渙發せられた。北京公使內田康哉氏と公使館附武官大佐青木宣純氏は大本營の指令を仰ぎ特別任務班なるものを組織した。所がその志願者は續々と出で其の中から嚴選して先づ四十七人を得た。先頭の第一班は伊藤少佐を長とし皆な軍籍に在る者で、他の一班は横川氏を長とし、非軍人のみを以て組織した。そして是等の人々は皆な腰に爆彈を帶び、雪の曠野を衝き深く露軍の背後に潛入し、鐵橋の破壞、電線の切斷等を目的に暗躍し露

軍の南下を阻止せんと全力を傾倒したのであつた。二月二十日の夜、敵の間諜の目を忍び、北京守備隊の一室に集つた決死の四十七人は各自頭髮と生爪とを白紙に包んで、一隅に設けられた祭壇に捧げ、公使館員及青木大佐等の催した送別會に武運長久重大任務の成功を祈つて訣別の盃を擧げたのである。室内は一種悲壯悽慘の氣が漲ぎり溢れた。明くる二十一日は先頭第一に大興安嶺のトンネル破壞の出發命令を受けた。第一班（伊藤、横川班）の十二名は萬感胸に迫つて出發したが、彼等は誰が見ても喇嘛僧か支那商人としか見えぬまでに變裝して居つた。

四時を經て入蒙した一行十二人は、豫定の如く北京で伊藤班、横川班の二隊に別れ、一班は海拉爾(ハイラル)、一班は齊々哈爾(チヽハル)に向ひ、興安嶺を挾んで東西兩地で鐵橋破壞を果す事に決した。横川班に屬したのは横川を始めとして沖禎介、松崎保一、脇光三、中山直熊、田村一三の六人であつた。

かくて六烈士は素より生還を期せず決死の覺悟で目的地に向つて突進した。四月十一日未明に起き出でた松崎、脇、中山、田村の四人は、爆破地點の偵察に出かけ、横川、沖の兩人は天幕内に殘つて種々と實行作戰に耽つて居た。然るに武運拙くも敵の司令官メヂヤーク大佐に屬する騎兵第二十六中隊のシフムネバツフ中尉は部下の哥薩克グヂン軍曹以下の部下を從へ偵察に出發して横川氏等の天幕を發見したのであつた。近づく馬蹄の音を聽いた兩人は思はず「アツしまつた」と叫んで、急いで地圖や鉛筆其の他を隱し平然として居つた。天幕の入口に立つた敵兵は劍を突きつけ銃を擬して荒々しく推問した。が、兩人はニヤ〳〵と笑ひながら端坐して居るのみであつた。然し天なる哉、命なる哉、一人の敵兵は天幕内に在つた瀨戶引の湯呑を發見し隊長に報告した結果、遂に同行を求められた兩人は抵抗もせず同行を諾した。

始めラマ僧だと思つて居た兩人を同行して司令部へ歸つた敵軍は天幕の内外を仔細に搜索した結果、隱匿して居つた多量の爆藥、導火線、拳銃等を發見したので嚴重に訊問を開始した。兩人は到底免がれないものと決心し、横川氏は大日本陸軍參謀大佐横川省三と名乘り沖氏は同じく參謀大尉と告げた。而して鐵橋破壞線路の爆破、電信電話切斷の重大任務を帶びて來た旨を述べた。此の如き重大任務を帶びた大日本軍人である事を知つた露軍は遂に四月十五日兩人を汽車に乘せて哈爾賓に護送した。十六日早朝着いた兩人は護路軍總司令參謀長バクダノウキツテ大佐に引渡され、別々に監禁されたが、兩人は平然悠々たる態度で、敵軍に捕はれた人の如き恐怖や憂欝の色がないのみならず、總ての態度が實に紳士的であつたので、其の沈勇剛膽に驚かぬものはなかつた。かくて兩人は軍法會議に附せられた結果、死刑の宣告を受けたのであつた。

當時露國の陸軍刑法では銃殺は戰時現役將校のみに行ふ事になつて居つたが、兩人はラマ僧の姿をして居た爲め、裁判長アファナシエフ少將（現在中將ハルビンに生存）から絞殺の宣告を受け、兩人は我々は日本帝國軍人である、何卒軍人に對する禮を以て銃殺の刑に處して貰ひたいと要請した。裁判長は長時間協議した後、當時遼陽に居つた總司令官クロパトキン將軍に電請其の許可を得た。愈々四月二十一日哈爾賓郊外で銃殺されることになつたので、其の前日護衞士官から何か遺言があるならば書面に認めよ、必ず遺族に屆けて遣ると懇ろに言はれたが爲め、横川氏は其の好意を謝して左の遺言狀を認めて其の送達方を賴んだ。

父は　天皇陛下の命に依り露國に來り、四月十一日露兵の爲に捕へられ、今彼等の手に依て銃殺せらる。是れ天なり命なり、汝等身を壯健にし尙は國家の爲に盡す所あれ、我れ死に臨んで別に言ふ所なし、母上は勿論宜しく汝等より傳ふ可し、富彌にも宜しく傳ふ所あれ。

明治三十七年四月二十日　　滿洲哈爾賓　横川省三

横川律子殿

横川勇子殿

此手紙と共に支那北京の支那銀行手形にて五百兩を送る、井上敬次郎、山口熊野等の諸君と相談の上金員に換ふるの工夫を爲すべし。

と認めた後何を感じたか、直ぐ再び筆を執つて此手紙と共に以下の文句を抹削し、此手紙と共に五百兩を送らんと欲したれども、總て露國の赤十字社に寄附したり。

（筆者曰く、横川氏の父は岩手縣盛岡市舊藩士南部氏の末流東野勝衞といふ人で慶應元年四月其の次男生れ後横川といふ田舍儒者の養子となり同家の娘佳哉子と結婚して律子、勇子の二女を擧げ律子は融三と呼ぶ養子を迎へて郷里で横川家を繼ぎ、勇子は戶川家に嫁して現に東京に住居せらる）

と書き改め遺書の傳達と寄附金の取扱方を依賴した。護衞士官は横川氏に對し遺書は慥かに屆く樣取計ふが、赤十字への寄附は卿等故國に遺族のあること故此れを彼等に送つたならば生計の一助ともなり慰むる所あるべき故、取消しては如何と諭したところ、横川氏は昂然として御親切は感謝するも、我が大日本　天皇陛下は戰死軍人の遺族を御優遇され、決して御見捨てたまふ事なく、國民も亦之を遇するに國士の禮を以てするのであるから、遺族の事は顧慮する必要は無いと喝破したのであつた。

此の遺書は後果して遺族に屆けられた。昭和九年秩父宮殿下御渡滿の際畏くも台覧に供せられ、

今は奉天の大義寺に横川氏の神靈として祭られてある。

翌二十一日遂に兩人は一臺の馬車に乘せられ銃劍嚴めしい三十名の護衞兵と共に刑場に向つた。沿道はいつの間に聞き傳へたか見物の群集で滿たされて居つたが、從容自若たる兩人の態度を見て水を打つた樣に靜まり、一同敬虔の態度で見送つて居た。其の時の士官の話によると實に神人的英雄の俤があつたとの事である。

曠野の中の刑場は既に白木で作つた二本の柱が建てられてあつたが、護衞の士官は兩人を車上から下して銃殺する旨を告げた。覺悟をして居る兩人は泰然たる態度で、悠々と柱の前に進んだが、見れば柱の前に二つの穴が掘つてあつた。此れは兩人の死骸を埋める爲めであつた。兩人は互に顏を見合せて最後の握手を堅く交したが、心の中は千萬無量の想ひであつたことが想像される。

やがて露兵は近づいて麻繩を以て兩人を柱に縛り附けやうとすると、兩人は之れを見て苦々しく思ひ、士官に向つて「我々は武人である何卒繩目の辱しめは御赦し願ひたい」と拒んだ。士官も道理と思つて首肯した。そうして更に士官は白布を取出して目隱しをする樣勸めた。すると兩人は「我々にはそんな必要はない、目隱し所かこの盛大な儀式的刑の執行振りを眺めて歡んで昇天したい」と之れを斷つた。すると士官は此れは決して汝等が臆するからといふためではない、神が汝等の最後を憐んで賜るのであると諭した。沖氏は不動の姿勢のまゝ飽まで之を拒んだが、横川氏は靜に一禮して其れを受取り、自ら之を以て目を掩ふと「サア射てッ」と胸を張り、兩手を擴げて叫んだ。士官は前方に整列した、二十四人の射手に「狙へッ」と號令した。夕日は射手の劍に反射して息のつまるやうな光景で、天も地も人も物も皆靜寂であつた。此の時兩人は突如兩手を高く擧げて、天皇陛下萬歲、皇后陛下萬歲と東に向つて萬歲を唱へた。其の聲の終らぬ中「射てッ」。かくて千古不滅の勇士は北滿原頭の露と消えたのであつた。

聖上陛下は深く兩士の忠勇を嘉賞せられ、特に勳五等に叙し、双光旭日章と金千五百圓を賜はつた。尚ほ松崎以下四人のものは後に勳六等に叙し、單光旭日章と金千圓を賜はり、六士とともに靖國神社に合祀せられた。

横川氏の三周忌に當り、內田公使から金壹千貳百圓と感謝狀とを母堂に宛て贈られた。其れには內田公使を助けて終始一貫國家の爲め活躍されたことが能く表はされて居る。

「風蕭々兮易水寒。壯士一去不㆓復還㆒」と朗吟しつゝ荊軻が秦に入る時の如き悲壯な氣慨を以て夜に乘じて北京を脫出した六烈士は赫々たる名譽を永久に遺して昇天した。噫。

此記事を草するに當り、志士横川氏が井上敬次郎、山口能野の兩氏に關係のありし事を知り、

一層の興味を感じた事である。井上氏は岡鹿門先生の門下生で、私と同窓者であると共に實業界に於て常に親交を續けて居る事と、山口氏とは私等が弱冠に達せざる時代に於て少年學生として幼な友達たると共に同氏が其の少年時代に於て强き青雲の志を抱き、憂國の士でありし事を思ひ出し、特に横川氏の義擧に同情を表した次第であつた。

哈爾賓新聞記事の一節

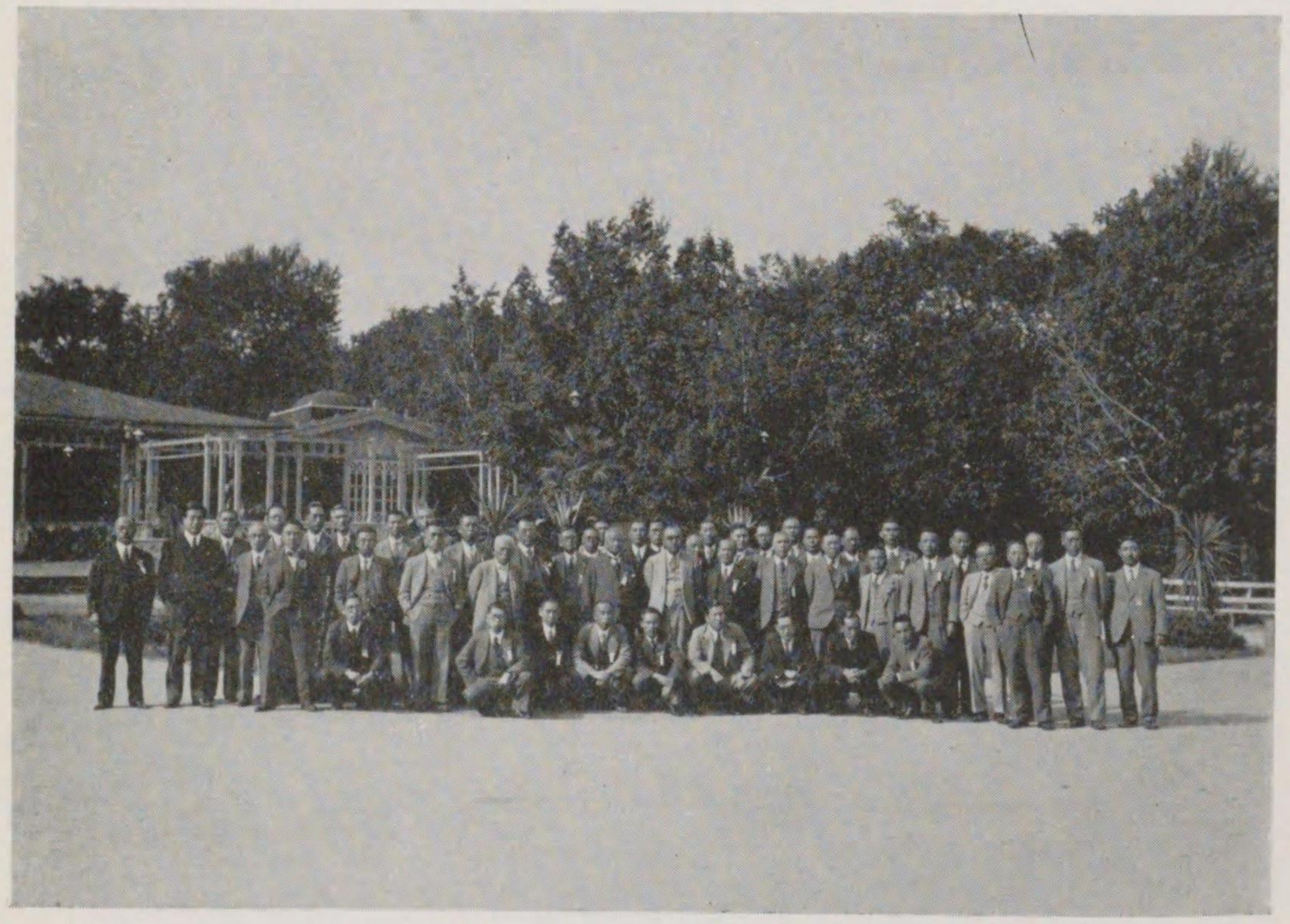
ハルビンに於てプログラムによる觀光の外に私は事業關係で日滿製粉工場も見た。此の工場は學良政權の遺物であつたものを内地の各製粉業者と、東拓、滿鐵等の出資で買收せる工場の一部であつて、當時松本眞平氏が社長であつた。

大滿忽布ビール會社も見た。此の會社は滿洲景氣に浮かされて出來上つた壹千萬圓の會社であつたが、種々の難問題が起つて、整理する事となり私が一時社長に選任されたが、一期で辭職した。今は渡邊氏が專務取締役で、丹澤善利氏が常任監査役として整理の任に當り、着々業績を盛り返し新會社として氣を吐く樣になつた事を茲に記述するの光榮を保有する。

ハルビン松花江

ハルビン特產協會總會場の光景

特產協會の紀念撮影……(於ハルビン總商會)



ハルビン鐵路クラブ招待會の招宴

次に新會社としてハルビンセメント會社がある。創立時代は北林氏、角田正喬氏、大阪の上田源三郎氏、名古屋の高橋正彦氏等の活動によつて出來上つた會社であるが、今は三井物產を通じて小野田セメント系の會社として發展しつゝある。國境問題の紛糾せる中心地に在つて有望視されて居る會社である。併し時間の都合で見なかつたのは遺憾であつた。

特產協會の總會はハルビン市の商務總會に於て開かれた。閉會後某陸軍大佐によつて國境問題の講演を聞いた。大佐は諸君の聞きたいと思ふ事は話す譯にいかぬし、話してよい事は聞いても面白くないし、本官の此の講演はつまらぬ話だと云つたがなか〳〵我々に取つては有益のものであつた。

「ゴルフ」にも案內された。宴會には度々招待された。

別項の記事は歸京後丹澤氏が社用の爲め哈爾賓へ旅行の時に「コンナ」記事があるぞと云つて切り拔きを見せて吳れたものである。

東南西北

過般の特產協會の總會はなにがさて近代バクチの親方連の物見遊山だけに、頗る威勢のいゝところを連發したものだが、なかにも水際だつた親分ぶりをみせたのが團長格の岩崎清七老

總會當日『滿洲國の王道樂土は農業から』と手前味噌ながら筋の通つたところを一席やつて滿堂を嬉しがらせたばかりか………

×　×　×　×　×

武藏野の歡迎宴では七十三才の老軀をピンとはつてアメリカ仕込みのダンス一席これには流石にこの道で鳴らす若手連もスツカリ度肝をぬかれ、『片山潛の友達だけあるね』は變な感心の仕樣もあつたもの。

飛行機にて哈爾賓より新京に向ふ

指點虛無縹渺間。野田分色整爲班。
飛行身化羽人去。下視曠原追鳥還。

指點す虛無縹渺の間。野田は色を分て整として班をなす。飛行の身は羽人に化し去る。曠原を下視して鳥を追うて還る。

ハルビン驛頭の一行（伊藤公遭難の所）

汽車中の一行

香塘曰。描寫精到、使人有飛行上天感。

新京旅行團體解散に際し所感を書す

行盡茫茫北滿疆。　舟車萬里共觀光。
新京今日空分手。　離緒長於行路長。

行き盡す茫々たる北滿の疆。舟車萬里觀光を共にす。新京今日空しく手を分つ。離緒は行路の長きよりも長し。

畫禪曰。唐賢遺調。吟誦不厭。僕甚愛此種之詩。擬之國風乎。若讀柿本人麿之歌。幽遠高雅、不淫不妖。使人低徊於風懷之別天地矣。

香塘曰。風神縹紗。一讀動人。

九月四日に神戸乘船以來約三週間、南北滿洲の樂しき旅行を終り玆に解團式を擧げたが、一行中一人の落伍者も見ずして嬉々として旅行の目的を達成せしを喜ぶと共に、今日玆に手を分かつて解

新京國都建設局屋上にて局員に説明を聞く一行

散する事は云ふに云はれぬ感を覺え、更に幽愁を覺えざるを得なかつた。

新　京

大道縱橫拓ニ楚荊一。高樓大厦聳峥嶸。
遲レ看天子皇居壯。威勢堂堂新帝城。

大道縱橫楚荊を拓く。高樓大厦聳えて峥嶸たり。看るを遲つ天子皇居の壯んなるを。威勢堂々の新帝城。

晝禪曰。聊想ニ新京現狀一有レ餘。

香塘曰。此篇辭嚴義正。頗亦意氣堂堂。不レ滅ニ新帝城之威勢一。可レ稱ニ傑作一。

新　京

北滿に於ける特產物の中心地たる「チ、ハル」、洮南、克山、北海、ハルビン等を視察して新京に着いたのは九月二十一日であつた。此處に觀光其他に數日を送つた。同地の滯在者の親友の中に津

下紋太郎、小池寛、北村民也等の諸氏が居つた。

津下氏は滿洲國に石油專賣制を斷行せられた計畫者で、また其專賣局顧問として滿洲國に貢獻して居られる責任者であつた。小池氏は滿洲電業公司の專務取締役で吉田豐彦大將を社長として滿洲電力電燈の首惱者の一人である。電業公司は九千萬圓の資本を擁して發電力約四十萬キロを全滿洲各地に送電してゐる大會社であつて、滿洲國の發展に偉大な貢獻をなして居り、年額の利益九百萬圓を擧げつゝある堂々たる會社である。

小池寛氏に就いて

小池寛氏は餘技として寫生畫を能くする人である。毎日「ポケット」に手頃の畫帖を携へて居る呆けた矢立を持ち、到る所であやしげな畫を描いて友人に見せては困らせ乍ら獨り自ら樂んで居る。先づ罪のない道樂である。今は其畫帖が千冊にもなつて充棟の形だと云ふ事であるから、大變なものだ。それを見せられた人の難儀は憐れなものだと思つた。友人の中にも「ボロクソ」に眞實の評を與へて本人に痛棒を加ふるものもあるが、大抵の人は讚め上げて當人を喜ばしてやる。御當人は大喜びで惡く云ふ奴は畫を知らない奴であるとして念頭に置かないが、賞められた事丈けは好く覺

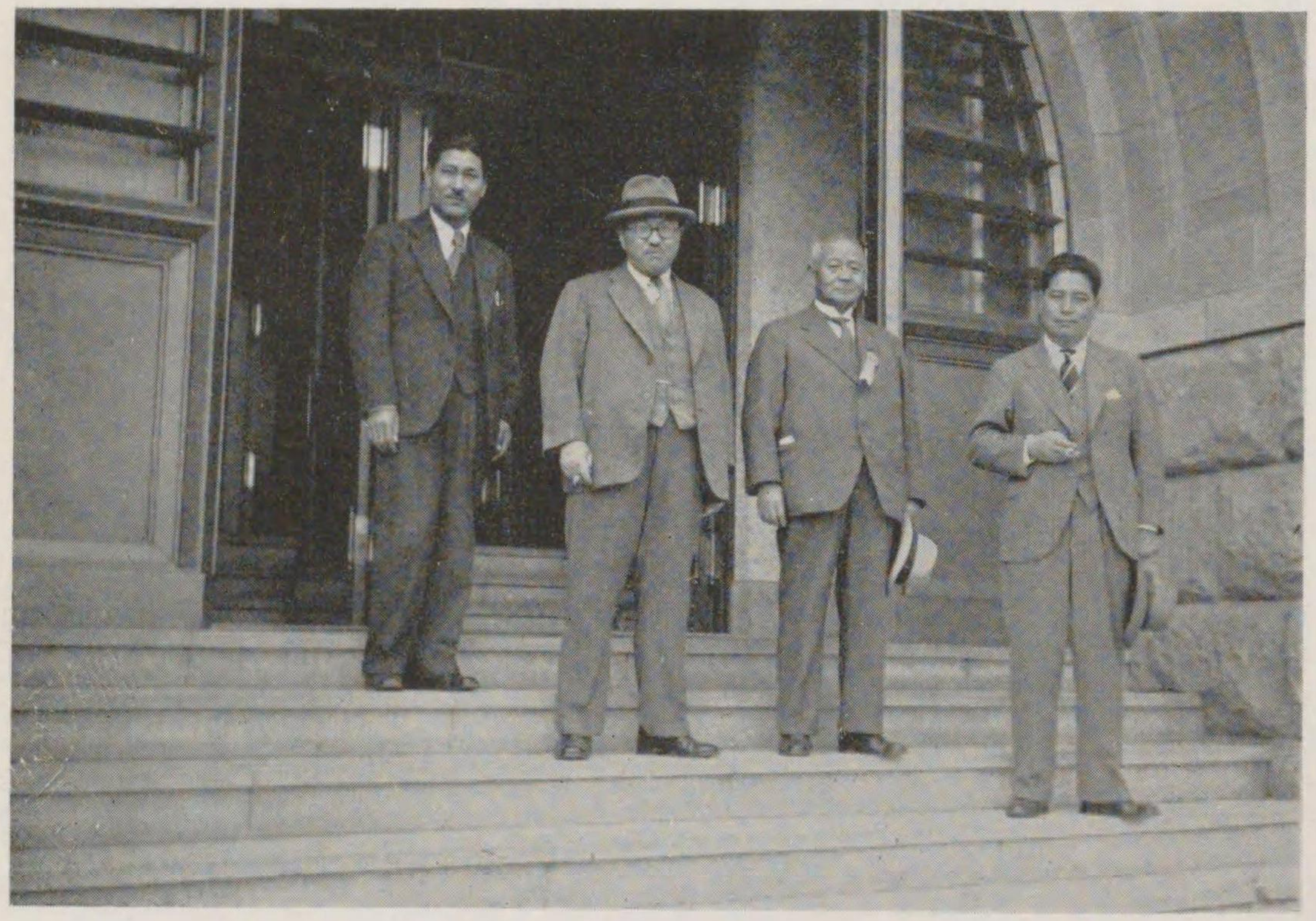
えて居る。益々増上慢の恐れがあるから、私は注意して人に見せるのは止めたらと云つたら、笑つて曰く、君が詩を見せるのを止める時には俺も止めるよとは、ひどい逆襲振りであつた。そこで私も少し恐ろしくなつて、奉天會戰の紀念である沙河の寫生畫を此の本に轉載して小池大畫聖の御機嫌を伺ふ事とした。

北村民也氏は今滿洲採金會社の專務であつて創立の時から其の主任者の一人であつた。滿洲採金會社は資本金壹千貳百萬圓で滿洲國五百萬圓、滿鐵五百萬圓、東拓貳百萬圓の共同出資と云ふ事である。

滿洲國の全採金鑛區を所有し採金事業家に鑛區を賃貸し又は自營によつて成績を擧げつゝあるのである。最近は採金月額百貫即ち百萬圓程度に過ぎないが追々發展して年產幾萬貫にも達せしめやうとするのである。北村氏は元は南洋貿易會社の支配人であり勤勉努力の人であつて、私は氏を信用する事極めて厚かつた爲め大正九年の如きは氏の辣腕の爲め損害は數百萬圓に上つた。夫れが爲め私は一時非常の苦境に陷り社會より影を沒せんとせる最後の斷末魔まで追ひ込まれた事があつたが、幸に土俵ぎはで踏み止まつて其の事なきを得たのは寧ろ僥倖と云はねばならぬ。私が北村の爲めに非常の困難に陷つたと單に記した丈では或は北村が非常に惡い事でも爲したためとでも考へらる

新京電業公館にて

津下紋太郎氏　著者　小池寛氏



新京康徳會館にて……右より大越四郎氏・著者・小池寛氏

る人があるかも知れないので北村氏の爲めに氣の毒であるから其の關係を玆に記述する事とした。

北村と南洋貿易會社

南洋貿易會社は大正八年頃には田中丸善藏と云ふ人が社長で、北村が支配人であつた。共に佐賀縣の人である。此の南洋貿易會社は大戰後委任統治となつた裏南洋の貿易會社で、大戰前より早く南洋の商賣をして居つて最初は資本金十萬圓か十五萬圓で日本最初の南洋の會社であつた。委任統治となつてから段々發展して大正七年頃には五拾萬圓に增資し、續いて大正八年に百萬圓に增資し、海軍の補助を受けて居つた有望の會社であつた。北村の友人中村伍作が私の處へ來て、會社の有望性を說くと共に北村氏を紹介せられ、北村に南洋發展の實情を巧妙に聞かされて、食指大いに動いたのであつた。そして考へて見れば日本が大戰參加の報酬として裏南洋の統治權を委任せられた事は國民として喜ぶ可きは勿論であるが、これを開發して國力發展の資に供する事は國民の爲す可き喫緊事であると考へ、種々調査の結果、其株を持つと共に、田中丸を助けて、會社を發展せしめ南洋進出の先驅者たらんことを期したのであつた。そこで田中丸の增資株の或る部分を讓り受け、川崎八右衞門氏にも參同を求めて南洋開發と云ふ國家的見地から援助を乞ふた。是れが川崎財閥が南

洋開發に幾多の苦艱と闘ふ動機で、二十年後の今日に於ては遂に美果を納め着々國家に貢献せられつゝある所以である。

併し是れまでが大變であつた。

會社は海軍の補助を得て、委任各島々の貿易に從事して、大戰後の發展と共に社業は益々隆昌に進展したのであつた。大正八年船價暴騰の際の如きは六千噸級及びそれ以下の船舶數隻を持つてチヤーター料丈でも毎月三十萬圓以上の收益を擧げ、計算に於ては十割近く利益を收むる樣になつた。隨つて事業擴張の爲め資本の必要上增資に次ぐに增資を以てして二年斗りの間に百萬圓から六百萬圓に增大したのであつた。其度毎に反面には川崎銀行の後援を得て、金融上支障なく進展したのであつた。

所が好事魔多しで、力量一杯に帆を揚げて來た會社は大正八年の秋頃から財政窮乏に陷ゐり大正九年の逆風襲來で全く一とたまりもなくへたばつて仕舞つた。田中丸は個人的に失脚して社長を辭する事となり、私が代つて社長となり檀野禮助氏を三井物產會社から招聘して專務となし、愈々整理に入る事となつた。

大正九年の一月株主總會の時と思ふ。日清紡績の宮島氏が遣て來られ、南洋貿易會社の內容に不安があると思ふが注意せよとの注意があつた。其時は已に財界の轉回に內心苦心して居つた時であつたから、宮島氏の友情と親切に心から感謝しつゝ實は心配して居るのであるから、是非援助を賴むと申込んだ。氏はそんな事は迚も出來るものではないと云つたが、強いて賴んで引受けて貰つた。其時會社は六百萬圓の增資がまだ手續中であつた。初めの中は新株の申込みが倍額にも達して居つたが、株式の暴落と共に株主は素より重役でも引受け不可能になつてしまつた。止むを得ず增資新株の棄權株貳萬餘株を川崎と岩崎で引受ける事にして六百萬圓增資を完了したのであつた。川崎氏は葉山に居つたが銀行の松浦甲子郎氏が使になつて事情を傳へて承認して貰つた。其時宮島氏と岡田壯四郎氏が義理で各千株宛の新株を引受けて重役に加はつて貰つた。

宮島氏の整理案

會社の六百萬圓增資は辛ふじて完了したが、滿身瘡痍の實質上正當に計算するときは資產が資本金の半額以下となり、商法の規定によつて解散を申告す可き運命になつて居つたのである。之れを如何に處理す可きかは隨分難問題であつた。そこで最も思ひ切つた整理案は宮島氏の提案であつた。卽ち川崎銀行は債權の中貳百萬圓を切捨て會社は全額拂込の株式に改め、貳百萬圓に減資して

合法的に計算を立て徐々に會社の更生を謀る事としたのであつた。

川崎銀行は無條件に之れを承認した。之れに依つて會社は僅かに解散の危難を免れたが、難行苦行は十ヶ年間も經續して、それからそろ〱順調に向ひ、二十年後の昭和十一年六月株主總會に於て金五百萬圓に增資を決議し、南洋發展の原動力となる可き素地を鞏固にした。それ程今日は優良の會社となつた。私は過去の事情を顧みて誠に感慨に堪へざるものがある。これと同時に川崎氏が能く國家的使命に立脚され百難不撓の決意を以て南洋進出に貢献せられた事を感謝するものである。

岩崎個人としての南洋貿易會社の救濟計畫

之れで南洋貿易會社の記事は終つたが是れから私が北村の爲め非常な苦境に陷つた事の眞相に就て記述せんとするのである。

前述のやうに南洋貿易會社は私が川崎八右衞門氏へ紹介した關係上私は川崎氏へ對して相濟まざる迷惑を懸けた譯であつた。若しも川崎氏が痩腕の人であつたら、それが爲め倒れたかも知れなかつた。夫れを思ふ毎に私は晏如として會社の悲運を見て居ることが出來なかつた。何んとかして會社に利益を提供して川崎氏の心配を輕減させたいものと考へたのであつた。

其當時大正八年頃から私は大戰中財界好況の餘波を受けて資力は相當に充實し、百萬圓や貳百萬圓の損害負擔は何んでもなく堪へ得る自信を持つて居つた際であつたから、獨力自營で會社以外の計算に於て仕事の上に依つて會社を救濟しようと考へた。此の考へが抑々の大失敗の素因となつたのである。跡から見れば現金で百萬圓も會社へ寄附した方が遙かによかつたのであつた。

北村民也氏は南洋貿易會社在社中隨分働いたが、餘り遣り過ぎる危險があるからとて會社の整理により依願退職となり、其後彼は自力で神奈川の埋立地に小さな油房を賃借りして落花生油の製造を開始して居つた。併し微力の悲しさに原料の輸入に信用狀を出すことが出來ないので困つた揚句私の處へ賴んで來たのであつた。始めのうちは二百噸か三百噸の信用狀に過ぎなかつたのと又値段も百斤十二圓前後の安値であり製油も採算が非常に好かつたから、本人を助けてやる積りで援助を惜まなかつた。

然るに落花生油は米國輸出として大阪、神戸地方でも盛んに製造せられて居り、北村が買付けた落花生は青島から荷物が着する迄には百斤に付一圓も二圓も値上りを見る狀況で中々儲かる樣になつて來たのみならず、米國からは落花生の注文さへ來るやうになり、一方南洋貿易會社の分身である、東京搾油會社に於ても器械は來年（大正九年）一二月には一ヶ月一、二千噸位の製油に取掛る段

取りになつて居り、段々昇騰の模様にある落花生を準備して置く必要もあり、製油事業を續つて私は落花生に其關心を持つ様になつて來た。米國へは値段さへ少しく讓歩すれば如何に大量でも賣れると云ふ實情にあり、內地でも消費高は段々製油原料として增大せられ、商品としては相當賣場の廣き好き商品となつたのであつた。爲めに少々の手持は心配ないものと考へたのであつた。

事實大阪、神戶の各輸出入商は勿論橫濱增田屋を始めとして淺野物產會社、湯淺商會其他個人商店等で隨分盛んに落花生の現物先物等の市場取引が行はれて居つて、轉賣買戾し等は自由であつた。

そこで私は此の商賣で南洋貿易會社を救濟するのは實によい一方法と考へた。それを北村に相談したら勿論異議ある可き筈がない、北村は渾身の努力を以て任務を果す事を誓つた。事實其頃は岩崎の信用を以てすれば相當大きな仕事も出來ると云ふ狀態であつた。

一方から見れば義理の爲め始めた此の事業が出發點から誤りであつたのだ。併し落花生の商賣の見込は適中して百斤十二三圓のものが昇騰して十五圓となり二十圓となり、遂には三十二圓と云ふ突飛の値段まで飛び上ると云ふ勢であつたから、忽ちの間に五七十萬圓の利益を見る樣になり、取組高は段々增大して來た。此處でやめれば上成績であつたが、凡人の悲しさに北村は勝に乘じて私の承認など考へもせずに進軍ラッパを吹出し、私が警告を加へて收穫時機に入らしめんとした時は、大勢轉換に傾いた時であつた。それから米國の市場の行悶となり、支那產地は素より內地市場も混亂狀態に陷り、賣付先きへ荷渡しを申込む、品質不良とか、賣先きが取らぬとか、苦情を口實に受渡しに應ぜぬ事となり、又米國よりの注文は取消を申込まれ、買付荷物は遠慮なく着荷して來るので、玆に荷爲替受拂ひの爲め手形を發行する事となり、段々行詰りに陷つたのであつた。勿論其中には私の知らざる大量荷物も背負込む事となり、品物を抱へて進退兩難に陷り、結局幾百萬圓の損失を見るの止むなき狀況に迄追ひ込まれたのであつた。

斯の如き有樣であつたから債鬼は群をなして店頭に攻め來たり、自分の體は十あつても足らぬ位であつた。其中難問題の大嫌ひの北村は病氣となつて精神病院に入院して面會謝絕の張紙を出して一切の苦難から離脫してしまつた。併し私は最後迄奮鬪を續けた。其時は土俵際の嶮ケ峰迄壓付けられて弓の樣にそり身になつて居つた時、茂木、川崎、宮島等の支柱棒（ツッカイボー）に依つて危く黑星を免れたのであつた。

此の時自分の知らない北村の仕事を否認するとすれば、私の損害は大半救はれたかも知れぬが、夫れでは將來のある北村を殺す事になるし、又自分も有利のものは承認して損になるものは否認したと云ふ非人格的の誘りは免れぬ事になる。そこで考へたのは「身を捨てて義を取る」の古諺を實

新京忠靈塔參拜の一行

行する事に決心し、未練がましい行動は全然止めたのであつた。此時は三百年の名家も之れが爲めに倒れるかと思つた。

事實數字の上からは助かる可き道はなかつたのであつた。併し禪語の「波間路なく路縱橫」と云ふ事もあり、難局を乘り切る決心の出來た時は、神靈が夫れ丈けの力量を與へて呉れると共に救ひの手を延ばして呉れる時であるとの信念を以て難局に當つたのであつた。併し相手のある事であるから寸前暗黑の幾年間を送つた事は隨分辛らいと思つた。

南嶺戰死者倉本少佐以下數十基の墓に奠す

衆寡相爭須制機。　兵銜南嶺疾於飛。
卅六砲門無所用。　胡軍一掃燦光輝。

衆寡相爭ふ須からく機を制すべし。兵は南嶺を銜いて飛ぶよりも疾し。卅六の砲門用ゆるに所なし。胡軍一掃して光輝燦たり。

南嶺の戰蹟を弔ふ

任思泰山重　身比鴻毛輕
南嶺戰死墓　弔來涙縱横

任は思ふ泰山の重きを。身は比す鴻毛の輕きに。南嶺戰死の墓。弔ひ來りて涙縱横。

香塘曰。是所謂古詩調五言絶句也。言レ情悽惋。

南嶺戰歿諸士の墓前に詣で、當時皇軍の奮戰苦闘した狀況を聽き、滿洲事變勃發の當時を回想し私は實に感慨に堪へざるものがあつた。聊か蕪詩を奠し倉本少佐以下の英靈を弔ふた。

滿洲事變は昭和六年九月十八日の夜半、突如として奉天文官屯間の柳條溝で張學良軍が我滿鐵線路を爆破したるに端を發したのである。我軍が辛苦幾年忍び忍んだ熱血は遂に迸り出で、疾風迅雷的の勢を以て彼等を膺懲し遂に我生命線を死守し得たことは、國を擧げて皆な滿腔の感謝を表する所である。今玆に地下に眠る英靈を弔ひ、更に感激を新たにせんとするものである。

友邦滿洲國成つて既に四歳、國礎愈々固く吾國と堅く手を握つて東洋平和の一大勢力を形成しつつあることを思へば、在天の英靈も亦以て瞑することを得るであらう。

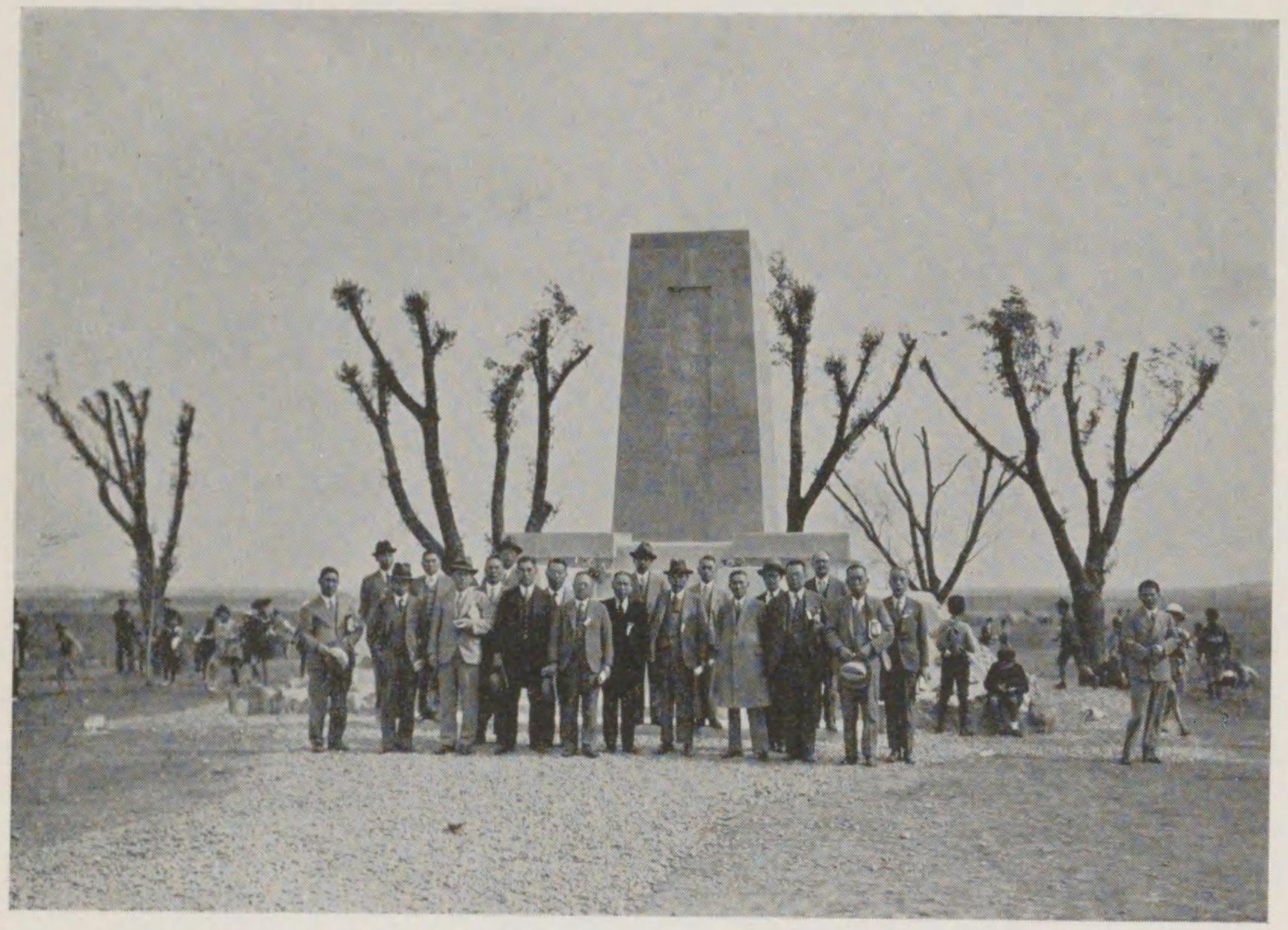
南嶺及寬城子に於て戰つた概況を左に述べ當時の情況を髣髴たらしめよう。

南嶺戰鬪の概要

昭和六年九月十九日、午前零時三十分、長春鐵道事務所から電話で「奉天附近に於て日支兵衝突目下交戰中」との通報があつた。時を移さず各部隊の非常招集が行はれ、午前二時二十分出動命令が下さるゝ迄、凡ゆる準備が完了した。

長春の守備は其の任務が實に重大で、萬一敵に機先を制せられなば奉天以北の運命既に決すとも謂はるべきもので、當時の長谷部第三旅團麾下の大島第四聯隊と小河原中佐の率ゐる獨立守備隊の苦心は想察するに餘りがある。

平生周密な計畫と行き屆ける訓練とは神速な行動となつて顯はれ、命令一下黎明曉の空を衝いて僅か三百餘人の一隊は二つに分れ、一は南嶺寬城子に向ひ、一は南奉天に進んだ。しかもかゝる寡兵を以て幾十倍の敵兵に對し勇躍突進を敢行したのであつた。



新京南嶺戰跡紀念碑參拜の一行

南嶺戰鬪の犠牲者倉本少佐外數十人の墓……一行參拜中の秋色

長春の南五キロの地點に在つた南嶺兵營には、舊東北軍中の精鋭、邊防軍砲兵第十九團があり、同砲兵營の南方五百米突の地點には步兵聯隊邊防軍步兵第六百七十一團があつて堅固なる建築物を構築し、內に野砲三十六門の外に迫擊砲步兵砲を備へ、兵員は步兵三ヶ大隊三千人、機關銃隊迫擊砲隊を合せ計四千五百人餘があり、常に其砲口を附屬地に向け、事ある場合直ちに發砲し得る樣準備し、「若し一朝日支に事ある場合三十六門の此砲の火蓋を切れば附屬地の如きは一瞬の裡に焦土と化し去ることが出來る」と豪語し、而も事實その狀態に在つたのである。加之北方二キロの寬城子には是亦堅固なる兵營に邊防軍步兵第百六十三團第二營があり、約六百五十名の步兵があつて、機を覗つて居つた。而も當時此外に約五千の支那兵が長春に在り、殆んど我軍隊は三方より包圍され、敵に有利にして味方に不利なる狀態に置かれた。吾大島第四聯隊と小河原獨立守備隊の苦心は幾何であつたか知れない。

然し今や其の時が來た。電令一閃各部隊の進擊は開始された。

先づ長谷部第三旅團長は其の主力を南奉天に送り、一部を寬城子に、殘餘の第四聯隊の內第二大隊長黑石少佐をして中隊長江口、井上の各大尉の率ゐる第五第七中隊に小隊長佐々木少尉の機關銃一小隊を配し、危險極りなき南嶺砲兵營の襲擊を命じた。時に午前三時十分、此一隊は疾くも屯營

を發し將校以下意氣衝天の勢を以て進發した。

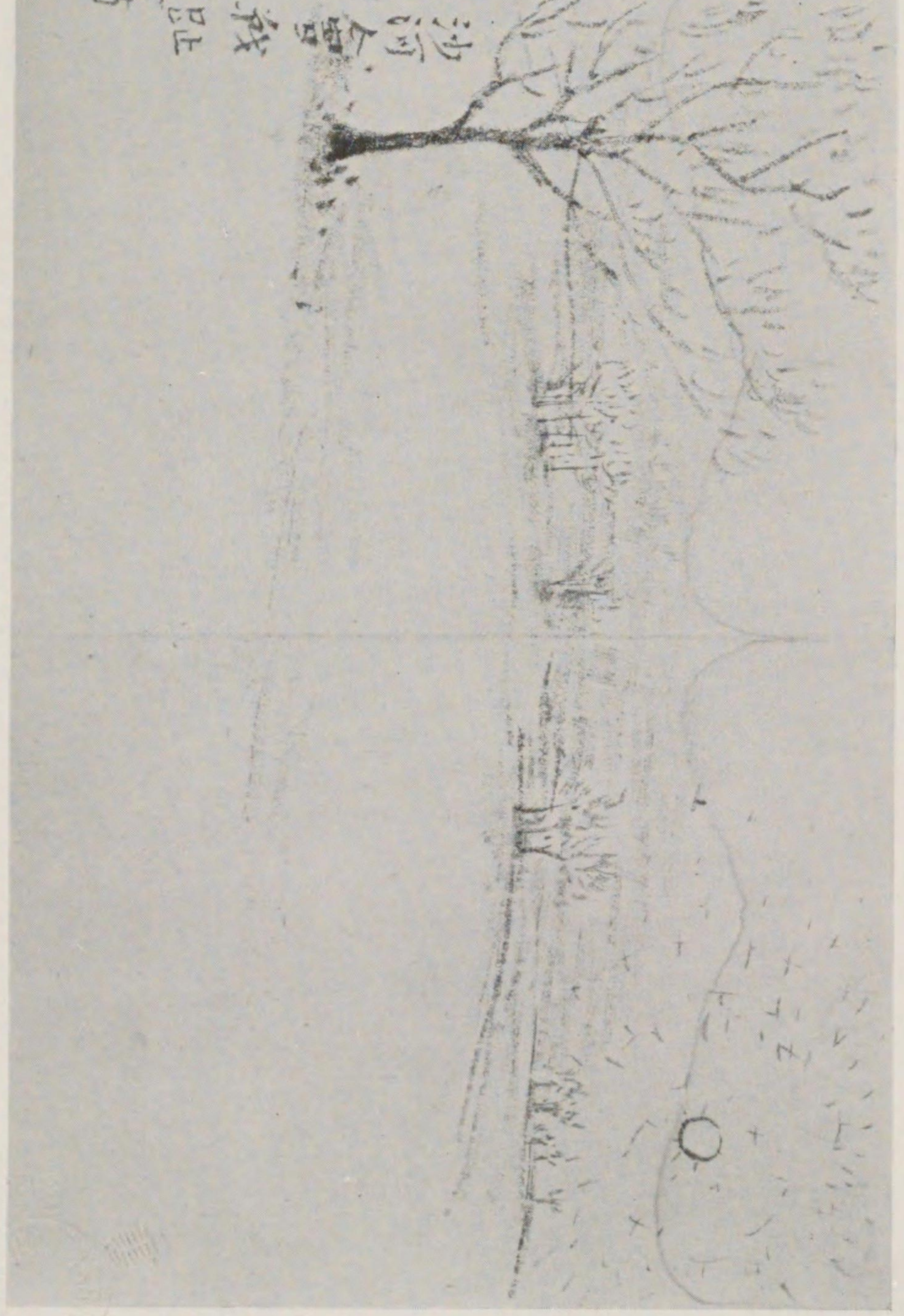
屯營より目指す南嶺兵營まで道程僅か五六キロの距離ではあつたが、宵の月は早く沒した。舊八月八日の暗黑、おまけに道となく畑となく急進又急進、目的地南營に達したのは午前五時頃であつた。隊伍を整へる暇もなく直ちに突擊に移り一齊に火蓋は切つて落された。

大隊長黑石少佐の「進め！」の聲に續き第五中隊江口大尉は北側の左門から第七中隊井上大尉は西側の右小門から機關銃小隊佐々木少尉は西側の門附近に、第七中隊平塚小隊は敵步兵營の方向から一齊に兵營に突入した。

中隊の先鋒を承つた菊田、畑山各小隊長は勇敢にも挺身し鶴嘴を振つて瞬く間に門を叩き破り突擊の聲諸共に全員怒濤の如き勢を以て兵營に雪崩れ入つた。

かく突如として闖入した我軍の不意打ちに狼狽した敵軍は、右往左往に逃げ出た。當るを幸ひ切りまくり／＼突き進んだ。

一方豫て我軍憂慮の的であつた三十六門の大砲も機敏な我將卒に依て忽ち打ち摧かれた。此の間僅かに十四五分であつた。此の一事を見ても如何に當時の突擊が神速に且つ猛烈であつたかが想像せらるゝ。かくて奮戰一時間餘、敵は多數の屍體を遺棄して四方に潰走し、敵兵營を全く占領して



小池寛氏の繪日記より

つたのは午前六時四十分であつた。此の戰鬪に名譽の戰死を遂げられたのは三浦右近上等兵であつた。

占領と同時に各營に在つた殘餘の大砲を破壞し了り、當時長春在住の同胞一萬餘の生命財產を累卵の危きより救ふ許りでなく、奉天以北の形勢をして全く我軍に有利に展開せしめ得た事は、國民の夢寐にだも忘るべからざる一事である。

戰鬪は玆に終つたのではなく未だ此の南方に兵員三千を有する步兵營がある。此の步兵の大部隊と鬪ふには敵の不意を襲ふより外はない。そこで右砲兵營を屠つた第四聯隊黑石大隊は一旦袁家窩棚に引揚げ、此處で公主嶺から急援に來た小河原中佐の率ゐた獨立步兵第一大隊百何人と合して愈よ前記三千を有する步兵營の總攻擊を開始することゝなつた。依て當日午前十時を期し、井上大尉の率ゐた第七中隊を右翼第一線に兵營の南側から北へ黑石大隊は左翼第一線として西側から東へ吉田大尉の率ゐる第二中隊及び栗崎大尉の率ゐる機關銃小隊は敵の機關銃隊及び火藥庫を襲擊することゝなつた。

我軍の意氣は軒昂たるものがあつたが、敵は我軍に十數倍するの兵員を有し、而も附近の地物と建築物の要壁を有する兵營の中に在るに對して、我軍は據るべき地物として何物もなく全く白菜畑

の中に曝されてあるのみだから、愈よ戰鬪開始となるや、敵兵の集中砲火に遭ひ、實に我軍の苦鬪惡戰は知る可きである。勇猛果敢の我將士の突撃又突撃に敵兵も必死となつて抵抗し、戰鬪の白熱化に伴ひ、我軍の死傷も相續ぎ彈藥も漸次盡きはて遂には死傷者の彈藥を集めて射撃を續けたのであつた。此激戰も約五時間に亘り我軍の死傷も中隊長倉本少佐以下戰死者三十七名重傷者三十八名を算するに至つたが、午後三時さしも頑强であつた敵營も遂に我が手に依つて占領する所となつた。戰勝の前には必ず悲慘なる犧牲者があるのは止むを得ざる事である。噫。

本溪湖より安東に至る途上

峰巒起伏峽流波。在在叢林掛薜蘿。
看取滿洲南北異。黃粱以外稻田多。

峰巒起伏して峽流波たつ。在々の叢林薜蘿を掛く。看取す滿洲南北の異なるを。黃粱以外に稻田多し。

香塘曰。隨意涉筆作此佳品。南北滿洲之差異一目瞭然。老手哉。

鴨綠江を渡る

一江截斷滿鮮間。風俗人情別有天。

私は本旅行の歸途此地を過ぎ、明治四十二年九月輕便線で先輩故茂木七郎右衞門氏と、此地を通過した事を思ひ出さずには居られなかつた。其の當時は輕便鐵道とは云ひ乍ら、丸で土木工事のトラック線と一般で、脫線轉覆隨處に續出し、命が惜しいと思ふ人には迚も乘れたものではなかつた。併し英國のキッチナー元帥も日本皇室に敬意を表する爲め來朝の際、此の線に乘られた。私等は其時草化敦に同じ日に來て野宿同樣の宿に泊つた事を覺えて居る。此の輕便線は三十八年日露戰役が終末になつた頃將來の權利を確保する爲め軍用鐵道として敷設したのであつた。私は遼陽の第一師團計理部長辻村將軍に面會の際其當時の事を聞いて非常に愉快に感じたのであつた。

北滿を旅行して一望千里、丘陵もなく、川は稀に見れど、一本の樹木もない原野に幾日を送つた私等に取つては、南滿地方の峽水の流れる傍に美田沃野の連なるのを見ては、單なる風物の耳目を樂しましむるに止まらず、農村の豐かなる狀態を見て喜ばざるを得ないのであつた。

曾是王師征露日。　忽超天塹大軍前。

一江截斷す滿鮮の間。風俗人情別に天あり。曾て是れ王師征露の日。忽ち天塹を超ゆ大軍の前。

香塘曰。前半自地理上。說滿鮮風俗差異。亦妙。

鴨綠江が滿洲朝鮮の兩國を劃斷せるのであるが、其の劃斷せる兩國の民俗が歷史的に異つて居る事も能く知つて居ながらも、斯くも違つて居るかと云ふ事を目のあたり見るに及んで特に稀異の感を抱くのであつた。一方は例の支那服一色染めの衣服であるのに一方は例の白衣である。山河の景色も廣漠たる平原の滿洲に引替へ、朝鮮の風景は山岳丘陵を隔てゝ美田沃野を連る如きが之である。造物者の技巧は到底人間には解るものではないと思つた。

日露戰爭の當時此の國境の大河を如何にして敵前渡涉せしかを考へ、皇軍の苦難を思ふと肌に粟を生ずるを覺えざるを得なかつた。

俗謠鴨綠江節

偲ばるゝ成吉汗のをもかげ追てつきぬ沙漠を眺めつゝ駒を止めて丈夫(マスラヲ)が胸に描くや新日本

改作

欲築邊疆新帝國。　茫茫敢問白砂寒。
請看日本男兒膽。　不劣英雄成吉汗。

此の民謠鴨綠江節は大正十三年第一回特產協會の旅行團一行が滿洲各地を旅行中盛に謠はれた歌であつた。當時日本人の滿洲に於ける勢力は失墜して日露戰役に發展せし權勢は全く地を拂ひ到る處張作霖の壓迫を甘受せざるを得ざる有樣であつた。政治的は無論の事、實業界に於ても强固の基礎を有する三井、三菱以外の商業、工業家は皆孰れも枕を幷べて倒れ盡し視るに忍びざるものがあつた。

然るに昭和の九・一八事件後間もなく滿洲帝國が建設せられ新京の奠都といひ事業の發展といひ全く今昔の感に堪へざるものがあつた。

此の綠鴨江節も痩我慢の付け景氣かと思つたが夫れは深く潛まれて居た一種の潛勢力の表現であつた事が考へられた。此の謠を好く謠ひ好く敎へて吳れた人は國際運輸の小日山直登、平田驥一郎

及び吉村氏等であつた事を記憶して居る。此を漢詩に譯したのも其當時の紀念でもあり亦希望でもあつた。

平壤所見

獨登二乙密一倚二秋晴一。白水青山眼下生。
玄武門前天欲レ夕。大同江繞古王城。

獨り乙密（臺名）に登りて秋晴に倚る。白水青山眼下に生ず。玄武門前天夕べならんと欲す。大同江は繞る古王城。

香塘曰。風調俊邁。語亦清麗。似レ讀二明詩一。

歷史上には幾回か盛衰興亡の跡を留めた箕氏、衞滿、朱蒙の徒があり。秦漢隋唐から明清の近代に至るまで攻戰の衢と化したことは幾回なるか知らぬ程である。しかも我が朝の文祿二年征韓の役には小西行長の如き精鋭の士卒を統率し、奮戰最も力めたが、明の沈惟敬と和を講じ彼の甘言に欺かれ退去するに至つた。そして行長の退去は凄慘たる敗退の口碑を留め、京城に着いた時は兵數は半數に過ぎなかつたと云はれて居る。此の日本軍の歷史に一大汚點を殘したのは遺憾至極である。

私は朝七時に新京を出發して京城に向ふ途上夜の十時半平壤に着き、一日の勞を休めようと思つて、平壤ホテルに宿つた。翌日はゆる〳〵平壤の觀光を爲さんものと本旅行中始めて九時頃に起き出し。食堂に入らんと應接間を見れば、思はざりき帝大敎授黑板博士の來客と會談して居らるるに邂逅し、歡喜譬へん樣もなかつた。それから平壤見物案內者の選定を依賴した。直ちに博物館に案內せられ、樂浪古墳發掘の實況をも見る事を得た。

平壤には朝鮮の事業地として見逃してならないものが澤山ある。少し離れて鎭南浦には元滿洲製粉會社の分工場が在つて、私も關係者の一人であつた。大日本製糖會社は此地に一大分工場を置いて鮮內砂糖の需用に應じつゝあり、眼界を少し遠く開けば、小野田セメント會社の朝鮮工場等があるが、是れ等は長くなるから省略する事にする。

樂浪城址二首

土城迢遞與レ山連。　漢族覇圖幾百年。
廿萬人家今不レ見。　離離禾黍戰二秋天一。

土城迢遞山と連なる。漢族の覇圖幾百年。廿萬の人家今見えず。離々たる禾黍秋天に戰く。

漢家文物夢茫茫。　城址煙寒樂浪鄕。
發二掘甄陶一知二往昔一。　忍レ看廢冡帶二殘陽一。

漢家の文物夢茫々。城址煙は寒し樂浪鄕。甄陶を發掘して往昔を知る。看るに忍びんや廢冡の殘陽を帶ぶるを。

晝禪曰。懷レ古而盤桓。二首共佳矣。

香塘又曰。樂浪二首咏二出史蹟一。皆有二根據一。而未レ經二人道破一。洵推二完作一。

樂浪の城址は土城（卽ち土手）を以て圍まれ、延長十餘里に及んだと云はれて居る。今は土城の一部分が小邱となつて殘つてゐる。內地でも處々に見る城跡の一部のやうなものである。其の土城の中に漢族士民が都會をなして居たのである。支那の各都市は城壁の中に市街がある如く、支那式の城市を朝鮮に應用したものだと見ればよいのである。

傳ふる所によれば朝鮮の風俗とは全く別に漢族の風俗を守つて、此處に四百年間の歲月を繼けてゐたものと云はれてゐる。今茲に昭和十年十月二十六日東京日日新聞記事の平壤博物館長小泉博士の樂浪の古墳の談話を揭載して說明とする。

今から四千年前檀君といふ神人が天降つて「朝鮮」と稱する國を建て平壤に都したといふ傳說にはじまり、箕子の朝鮮、衞滿朝鮮のいはゆる古朝鮮三代、續いて樂浪高句麗の時代に至る、都城の地として史都平壤の名は余りにも名高い、だがこの史都平壤の名を今や世界的ならしめつゝあるものは最近における樂浪古墳の發掘調査である。

× × ×

朝鮮史を繙く人は今を去る二千年前、前漢武帝の元封三年（西紀前一〇八年）衞氏の朝鮮が亡び、半島の北半が漢の領土となつて四郡に分轄統治された記事を見出すであらう、平壤は卽ち四

郡の中の樂浪郡に屬しその郡治の置かれたところであつたから樂浪郡が西紀四世紀の始め高句麗に亡ぼされるまでの約四百年の間は多數の漢人が來住し當時はなやかに盛へた漢代文化が移植され大同江畔には文化の花が咲き誇つたわけである。

× × ×

現在平壤の對岸柳影を映じて靜かに大同江が迂曲するところに土壘をもつて圍まれた當時の役所の廢墟があり、これを中心とする約二里平方の丘陵田野一帶の地域には當時の墳墓が一面に散在しその數千三百有余といはれてゐる。

樂浪郡が亡んで二千年、古墳の封土もまた幾星霜の風雨にさらされてその姿、形こそ變れその槨室の內容はいささかの變りも無く考古學者の手によつて發掘され漢代盛時の面影を今の世に再現せしめつつある。

× × ×

卽ち地下の寶庫といふべきおびただしい角材で築造された彩篋塚の木槨や各種の文樣を刻した煉瓦で築かれた塼槨古墳の構造は當代の驚く可き建築技工を物語り、その內から發見された各種の遺物、青銅器、漆器、武器、馬具、裝身具、漢代の美術工藝の進步を如實に示してゐるばかりでなく

彩色華麗な各種器が形も色もそのまゝに現はれてをり被葬者の衣服に用ひられた各種の絹織物或は白粉、口紅まで具備した化粧箱の類に至るまで昔の姿のまゝ發掘されてゐる。

× × ×

樂浪古墳の調査研究が本格的に行はれるやうになつたのは大正五年以來のことで、しかも調査を經た古墳の數は僅に十指を屈する程度であつたが、昭和六年以來は平壤博物館內に樂浪研究所が設置されて連年繼續的に古墳及び城址の發掘を行ひ、幾多の輝かしい業績を世界の考古學界に提示しつゝある事はわが學界の誇りといふべきである。

私は偶ま平壤に來合せて居られた黑板博士から小泉先生に紹介せられ、兩氏の厚意に依つて、樂浪古墳を發掘中の處へ案內せられ、其の古墳の如何に大規模でありしかを見た。又二千年前の文化を偲び低徊去り難きものがあつた。

京城途上

瘠土如今化美田。　赭山又見樹含煙。

天恩如海覃槿域。　稼穡穰穰賑庶民。

瘠土如今美田に化す。赭山叉見る樹の煙を含むを。天恩海の如く槿域に覃ぶ。稼穡は穰々として庶民を賑はす。

香塘曰。多少感慨寓句中妙。

咸興途上

八道耕成皇澤昌。　黃雲滿目稻粱香。
車窓有客談農事。　穀價高騰歲亦穰。

八道耕は成りて皇澤昌んなり。黃雲滿目稻粱香ばし。車窓客あり農事を談ず。穀價は高騰し歲も亦穰のる。

畫禪曰。鼓腹之民思天恩。

香塘曰。眞是太平氣象。

永興の採金船視察の途上混合汽車で、鮮人庶民と同乘した。車中で農村の人達が豊作で米高なので、全鮮の地價は高くなり、景氣は大變好くなつたと語つて居つた。

京城

城在南山北漢間。　繁華阡陌幾廻環。
李家百代奠都地。　王氣氤氳滿九寰。

城は南山北漢の間に在り。繁華阡陌幾廻環す。李家百代奠都の地。王氣氤氳として九寰に滿つ。

昌德王宮宮觀幽。　漢江江水向東流。
南山北岳煙雲散。　明月依稀萬古秋。

昌德の王宮宮觀幽なり。漢江の江水東に向つて流る。南山北岳雲煙散じ。明月依稀たり萬古の秋。

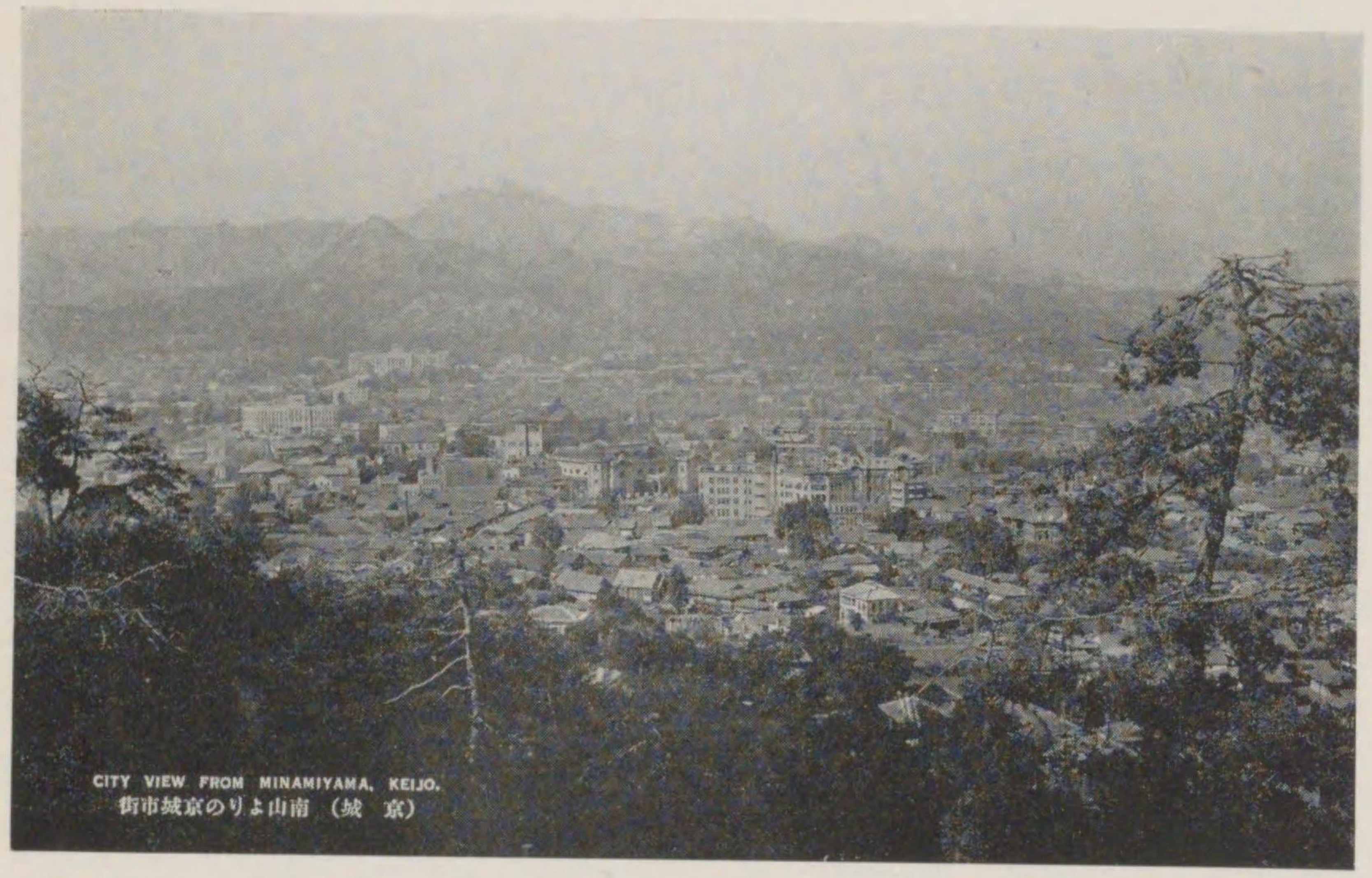
京城の事は今更事新しく記する迄もないが、其の歴史から見れば往古の馬韓の地である。高句麗王朱蒙の二子、溫祚、沸流此處に居城を置いて百濟の治世七百年の基を定め、新羅一統の後漢陽郡と稱し、高麗に至り揚州と改め、高麗滅亡の後、李成桂開城から王都を此地に遷して漢城府と稱し、明治四十三年日韓併合が成つて總督府を置き新政を行ふことゝなつた。名を今の京城に改めた。

春畝山博文寺

春畝山高松滿壑。　欄干之下一眸寬。
捧身君國燦勳業。　長與法燈千古看。

春畝山高くして松は壑に滿つ。欄干の下一眸寬し。身を君國に捧げて勳業燦たり。長く法燈と千古に看る。

私は明治四十二年十月故茂木七郎右衛門氏と滿鮮旅行をした時に伊藤公がハルビンに向つて滿洲



京　城

京城ゴルフ場に於ける著者と林氏

の各驛を通過するに遭遇し、到る處で公とから合ひ旅宿に非常の不便を感じた爲め旅程を變更して、或は先きになり、或は後になりして旅を續けて居た。時に十月二十五日奉天で三井物産會社の厚意で馬車を提供せられ、北陵を見物し、飛雪紛々秋寒已に氷を見るの時に宿に歸れば、物產會社からとして伊藤公凶變のニュースを聞き、失望落膽、ハルビン行を中止し、直ちに大連に引返し、大連で公の遺靈を迎へ、又軍艦にて英靈の歸國を埠頭に市民と一緒に見送りした事を覺えて居る。今博文寺に詣ずるに及んで往事を追懷し一首を賦して敬意を表したのである。

博文寺に於ける公の石碑は伊東伯の撰文で其の中の「銘」丈けを拔萃すれば左の如くである。

嗚呼偉なる哉藤公の德。入ては宰相となり出ては橿域を鎭す。蹇々たる匪躬、世を終るまで息ます。功は周召に侔しく光りは萬國を照らす。一朝玉碎し天人共に惻む。英靈尚ひねがはくば降り長へに社稷を護らんことを。

范浦を過ぎて李朝發祥の往事を懷ふ

（朝鮮ドレッヂ會社所在地）

積翠煙欝横遠天。　澤皐曲曲接耕田。
山河自有金銀氣。　護得李朝六百年。

積翠煙欝遠天に横はる。澤皐曲々として耕田に接す。山河自ら金銀の氣あり。護り得たり李朝の六百年。

香塘曰。後半托諷隱微。

范浦に就て

范浦驛は朝鮮ドレッヂ（浚渫船）會社の所在地である關係上、私は社長として此の滿鮮旅行を機會に永興の范浦を訪問したのであつた。范浦驛は會社の創立によつて此の事業に便する爲め特に新設せられた驛である。

ドレッヂ會社は已に昭和十年八月二十日にドレッヂ船として朝鮮第一を誇る千五百噸の大鐵船を進水して其の機械取付け中であつた。其の機械の一部たる大鐵骨が驛頭に兀立する有様が、朝鮮新聞記事によつて驛頭の化物（はけ）として紹介せられ、又産業奬勵の意味で宇垣總督が湯村咸興縣知事を同伴して巡視せられた事が放送せられ、相當有名な採金船である。

採金船の歷史は別項成勸鑛業會社の項にある通りであるが、此の採金船（ドレッヂ）の積載量は千五百噸であつて、其の甲板の上には洗盤操置運轉動力等を備へ付け、全然機械工場として採掘の土砂を整理するのである。此の會社の公稱資本は三百五十萬圓で、拂込金額は八十七萬五千圓の少資本に過ぎないが、其の鑛區は二百餘萬坪を有し、試錐試驗の推定の結果、埋藏量は百萬坪に對し六七百萬圓又は一千萬圓とも云ふ事である。今は一ケ月採取量は試掘時代で四五貫目位に過ぎないが、試錐豫定地域に達する時は一ケ月十貫目を擧げる事は難事でないと想像するから相當の有利の事業と云つて差支ないと思ふ。

此の會社の常務取締役は田島常三氏で會社の發案者である。

序に此の永興（今は范浦）の砂金地帶は、李王家の寶庫として永年の間發掘禁止區域で、咸興に近く李王家の發祥の地域として目出度い土地である。此の千歳未開の寶庫が、我々の手に依て其門扉が開かれ、今や千萬圓の埋藏金塊が仕事の手始として社會に提供せられ、又幾年の後には幾千萬圓として社會に提供せらるゝとすれば會社の採金報國の趣旨が徹底する事として慶賀に堪へざる次第である。

咸興に遊び、李朝の兵を擧ぐるを憶ふ

峻嶽圍レ城碧水横。　自然形勝控二强兵一。
一朝擧レ事前無レ敵。　成二此千秋社稷榮一。

〔自註。李朝祖。平二定朝敵一。遂即レ位。〕

峻岳城を圍んで碧水横はる。自然の形勝と强兵を控ふ。一朝事を擧ぐれば前に敵なく。此の千秋社稷の榮を成す。

盤龍山に登り定和樓を望む

萬頃稻田連二遠山一。　城川江水碧廻環。

盤龍峰頂放レ眸處。　定和樓幽青嶂間。

萬頃の稻田遠山に連る。城川の江水碧廻環。盤龍峰頂眸を放つ處。定和樓は幽なり青嶂の間。

盤龍山は永興の東方に至つて千尺の高地である。今は一大公園として自動車道路を通し、咸興、永興の連山を一眸に收め城川江は萬頃の田野を貫通し美田沃野と共に風景絶佳の處である。

此地は李朝五百年間王業の基をなした太祖李成桂の發祥の地である。成桂は元の順宗至元元年、高麗の忠肅王の後元四年、本朝の後醍醐天皇の建武二年に此の地の黑石里に生れ、天姿英邁、長じて咸興に移り高麗の末運國勢振はざるの時に乘じ、身を武臣に起し、南征北伐大小の戰役に奇功を奏し高麗朝を亡ぼし、明の洪武二十五年、我が後小松帝明德三年に卽位したのである。定和樓は太祖李成桂の旗上げした歴史的祥域で今猶ほ現存して翠嵐濃かな處坐ろに懷古の情を湧かしめ、山河秀麗の地古より英雄を生むの理果して空しからざるを覺ゆるのである。

長津江貯水池所レ見

峯巒環抱大高原。　遮斷江流碧水屯。
誰識人間工作妙。　化成電力利乾坤。

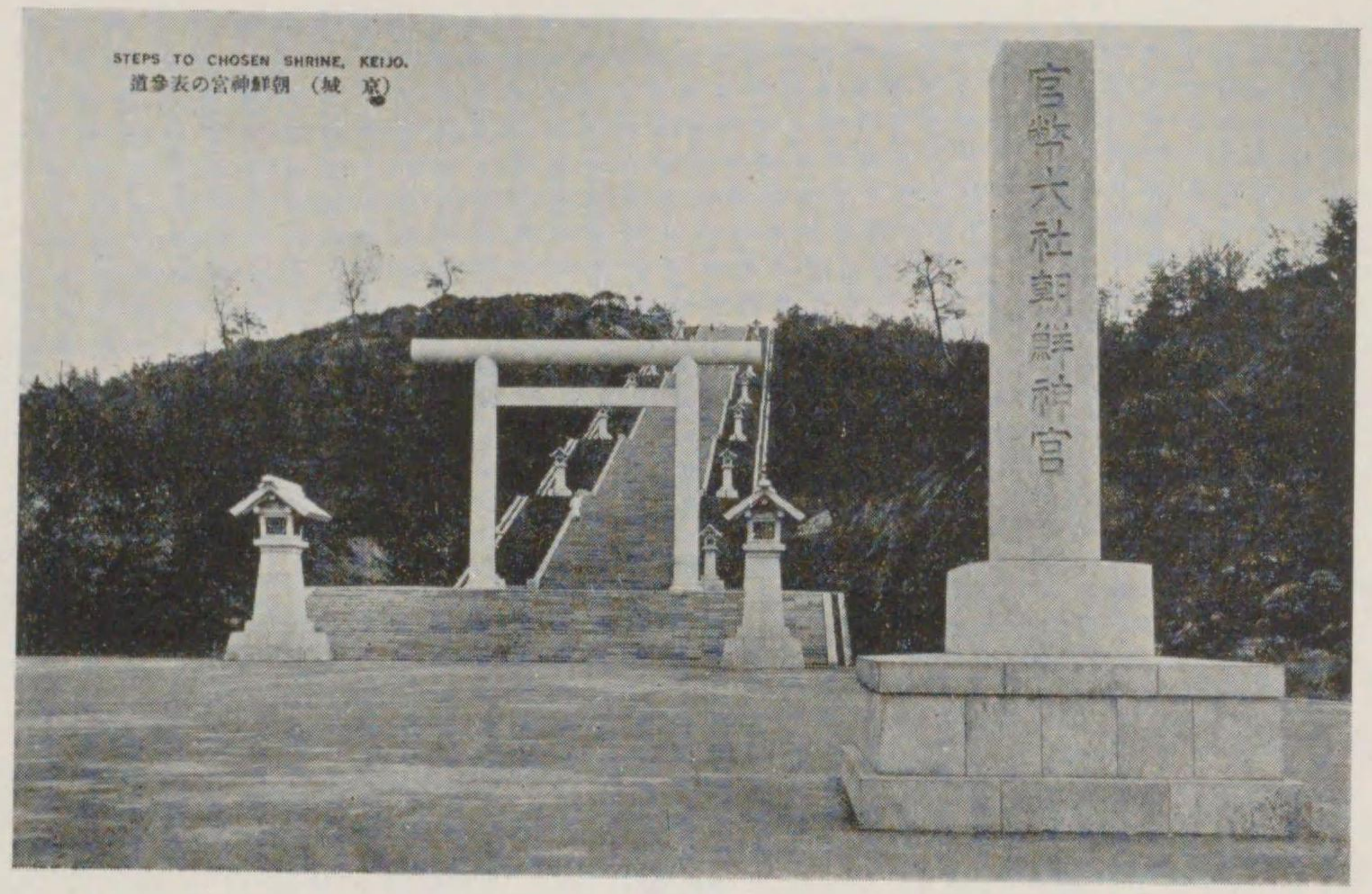
峯巒環抱す大高原。江流を遮斷して碧水屯ろす。誰か識らん人間工作の妙。化して電力と成つて乾坤を利す。

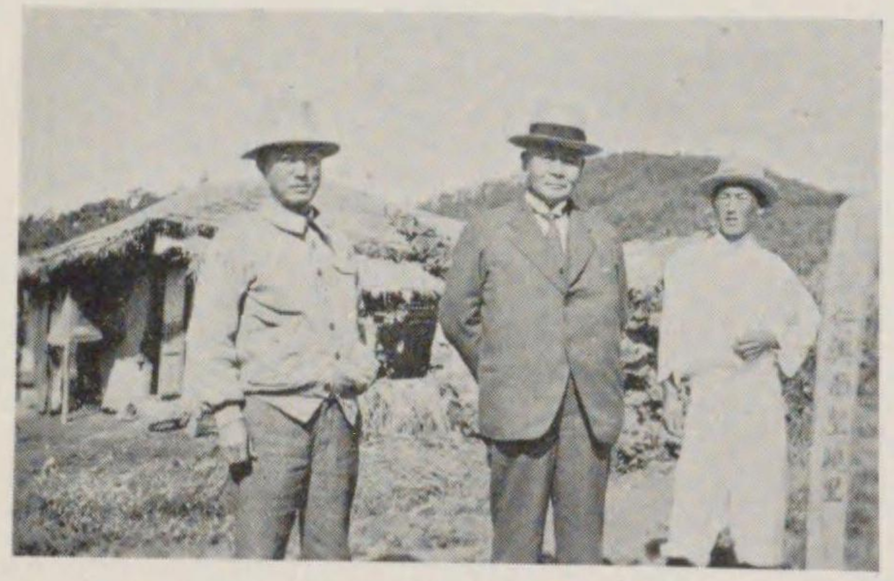
畫禪曰。一二形容能得眞。

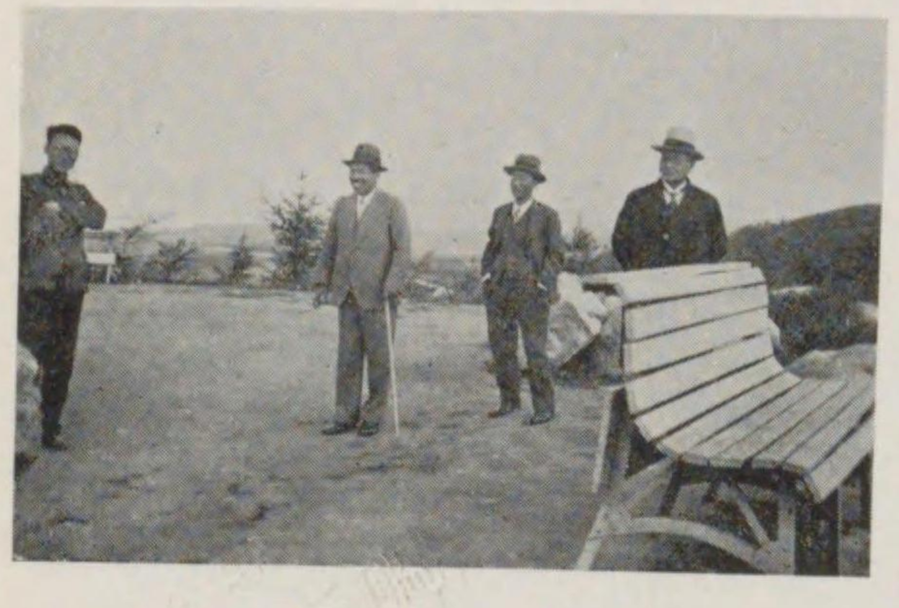
香塘曰。電力事業入詩已奇。大貯水池奇觀亦可想見。

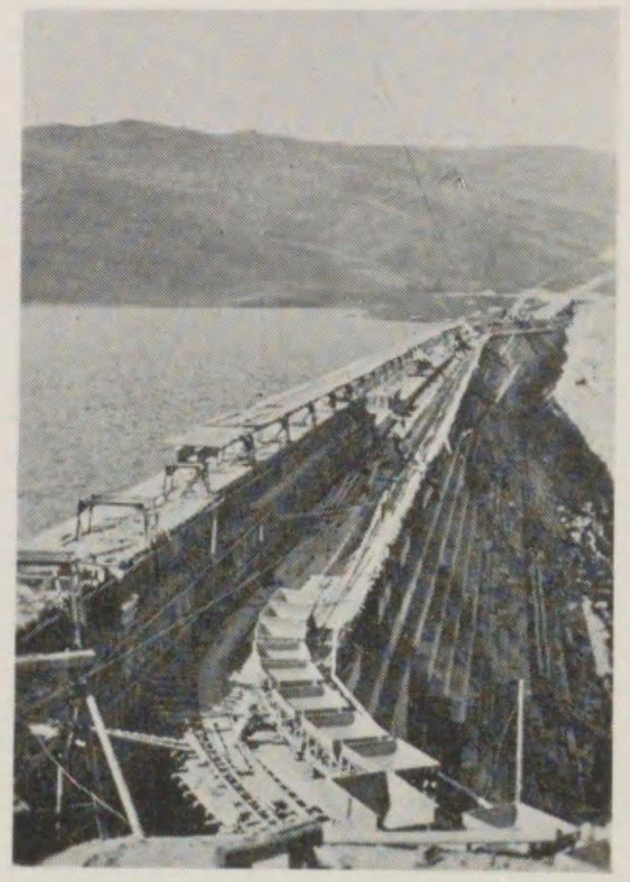
長津江發電所の壯觀

千秋偉業想豐公。　文化而今誰競雄。




朝鮮ドレッヂ視察の著者と田島

咸興磐龍山の遠望



長津江發電所

日本男兒遵野口。　壯圖能欲奪天工。

千秋の偉業は豊公を想ふ。文化而今誰れか雄を競はん。日本男兒遵野口。壯圖能く天工を奪はんと欲す。

香塘曰。筆力豪宕。以破天荒之事業家野口氏比古英雄豐太閤。使人拍案叫快。近時故小野湖山翁獨有此種詩格。今日應讓東海翁獨擅。

長津湖

周圍三百里。　貯水自成湖。
山影浮波際。　沙汀淡欲無。

周圍三百里。水を貯へて自ら湖を成す。山影は波際に浮び。沙汀は淡として無からんと欲す。

香塘曰。瀟灑有致。與前首如出別手。

歴代の總督は素より宇垣總督も朝鮮の開發の基礎は米田の開發と共に南綿北羊と稱して居つて、なんと云つても土地利用の外に出なかつた。

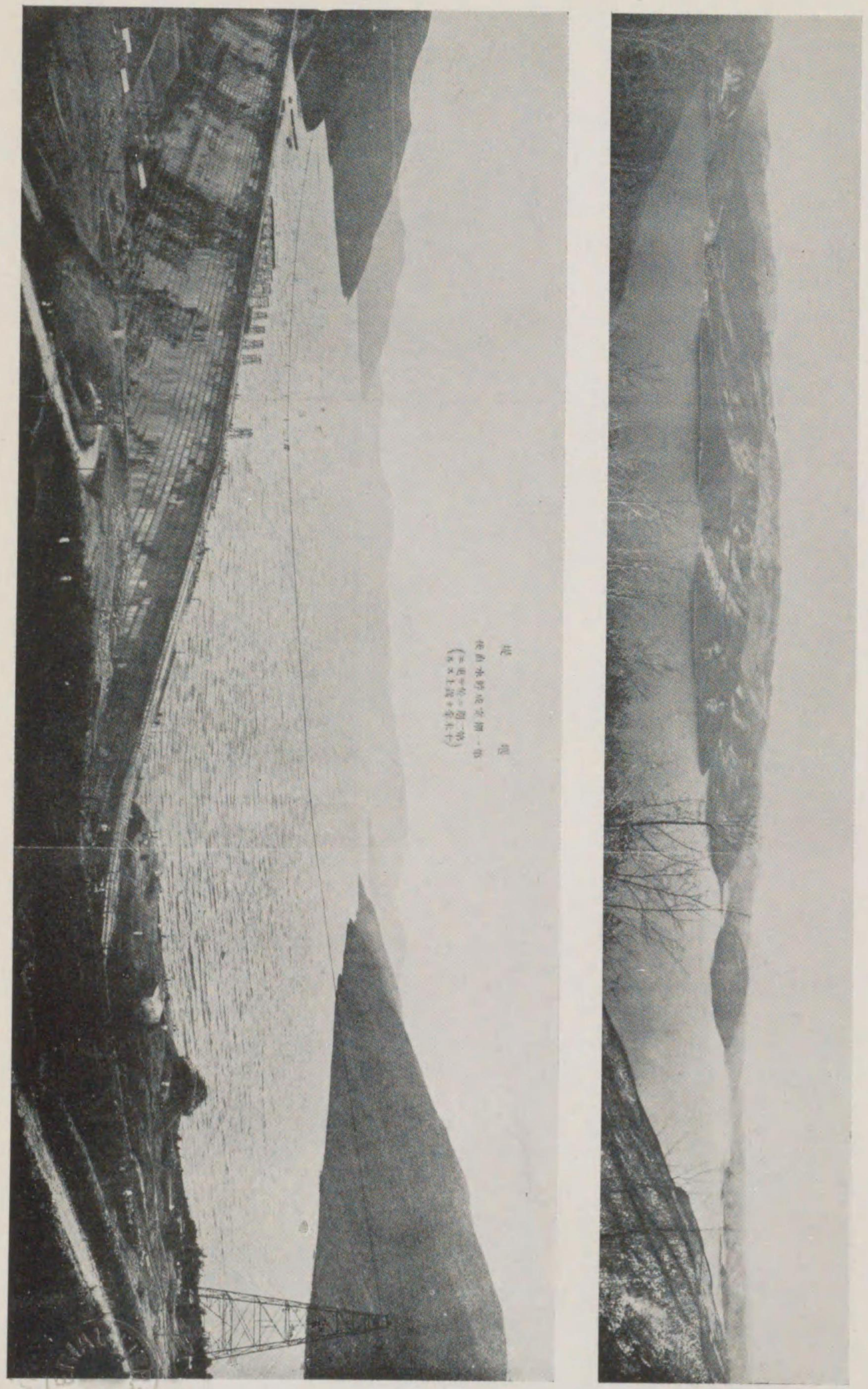
然るに時代は急テンポに轉換して來た炭山と云ひ鑛山と云ひ、走馬燈のやうに變化して來た。鑛山の中には金鑛鐵鑛も段々成績を擧げるやうに成つた。砂金も試驗の時代は已に去つて最早實收の時代と成つた。土地の開發で朝鮮の富を增す如き悠長な事は時代が待つて居られなくなつて來た。

此時代の急變轉に拍車をかけて來たものが產業の開發であり、電力計畫の大發展であつた。

私は久し振りに事業視察の爲め北鮮に旅行した。咸興に於て湯村知事の勸誘で、興南の朝鮮窒素會社を見た。また黃草嶺を越えて長津江の水電會社の發電工事も見た。そして其の事業が如何にも大規模で雄壯であつて、豪快なるに一驚を喫したのであつた。

日窒コンツエルンの概略

今茲に少しく日窒コンツエルンの一部朝鮮に關する視察記を草して讀者と共に事業の概要を檢討せんとするものである。



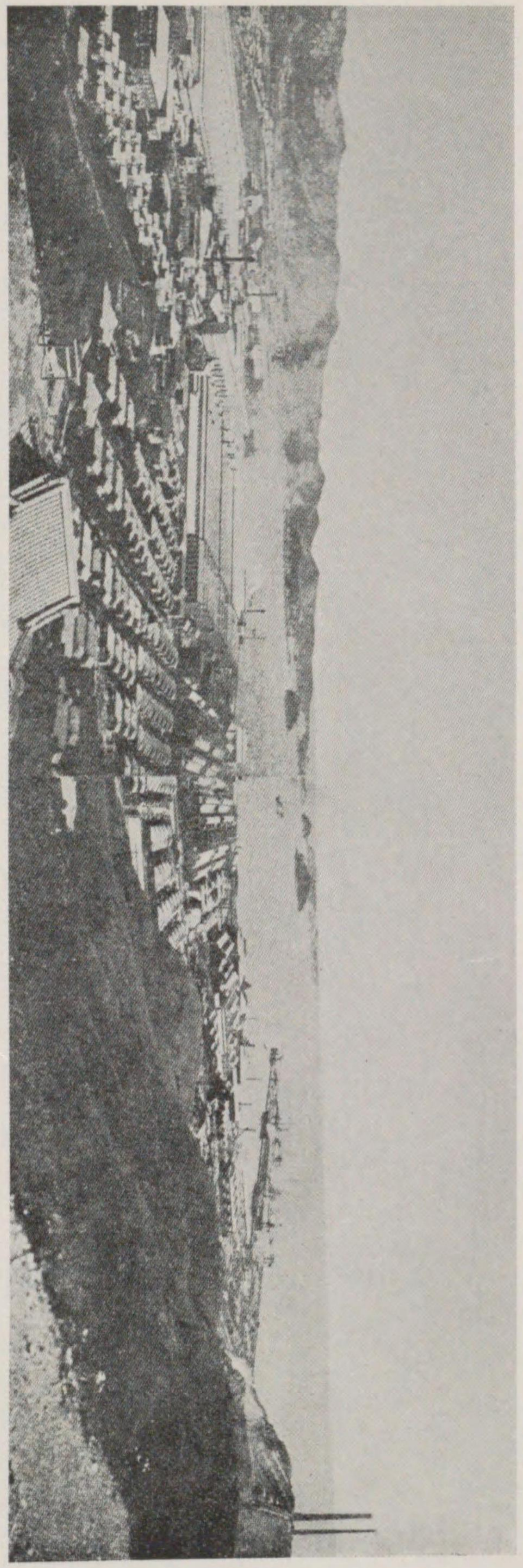
長津江發電所人造湖

興南の朝鮮窒素肥料會社

此の會社は九州で生聲（ウブゴエ）を擧げた日窒會社の子會社であつて資本金は六千萬圓である。最初約五千萬圓を投じて興南に窒素肥料工場を創設し、年産五十萬噸の硫安肥料を産出する計畫を立てゝ居つたのであるが、其の所用電力の必要から、赴戰江の發電所建設の計畫を建てたのである。赴戰江發電計畫は、大正十五年一月に朝鮮水電を創設して赴戰江發電所を建設し、工事の完了を待つて昭和五年一月之れを合併して朝鮮窒素肥料會社としたのである。

此の赴戰江發電所に於て十九萬キロの發電の豫定が少しく違つて十四萬キロを興南工場に送り、硫安四十五萬噸計畫の一部に供給して居るのである。

次に其の電力の不足を補給せんとして計畫せられたものが長津江水電會社である。長津江水電會社の第一期計畫は十四萬キロ昭和十一年初めて完成し、第二期第三期を完成すれば、三十二萬キロとなつて世界第一を誇る露西亞の「ドニエプル」發電所に劣らぬ發電力となる譯である。現在長津江發電所の建設費は三千五百萬圓であつて日窒會社の出資である。親會社日窒會社は朝鮮窒素會社が昭和五年から收益期に入るのを待つて長津江の發電所の計畫を立てたのである。



朝鮮窒素興南工場全景

琵琶湖大の山上貯水池

長津江發電所は黄草嶺連山の高原地域に鴨綠江に向つて北流する長津江の水勢を堰止め膨大な貯水池を造り、發電工事を施したのである。私は其の貯水池を汽艇で五十分間費して大堰堤の増築工事を見た。百六十尺の大堰堤は見るから物凄い感じがした。赴戰江のは二百六十尺と云ふから夫れは又大變なものだと思つた。周圍四十里もある貯水池の池底に延長七里の大トンネルを穿ち之れを逆に南流せしめて城川江に落し、日本海に入らしむるのである。其の落差は三千三百尺であると云ふ。此の七里の水道工事を若しも丹那式にて掘鑿する時は二十五年間を要すると云ふ其の大工事を二ケ年半で仕上げたるは、先づ〳〵事業家として滿點を與へてよからうと思ふ。慢々的の官營事業であつたら、其結果はどうであつたかと、想像せざるを得なかつた。

朝鮮窒素肥料と原價計算

此處で朝鮮窒素の計算はどうなるかと云へば、原價の原動力である電力がいくらになるかと云ふことを聞く必要がある。赴戰江は二十五年償却として一キロ時四厘四毛、長津江のキロ時は二厘九

毛四、而して硫安の原價は噸當り四十二三圓となる。此の四十二三圓の硫安が昭和六、七年頃は噸六十圓から九十圓位の賣値であつたが、昭和八年よりは目立つて昇騰を續け、十年には百五圓より百二十圓以上になつた。併し原價の四十二三圓たることには變りはなかつた。而して其年産額が二十萬噸から十年には三十八萬噸に達したのだから、利益率の好かつた事は勿論であつた。昭和五、六年頃は年額三百萬圓位の收益に過ぎなかつたものが、十年頃には千六七百萬圓の利益を計算する樣になつたからたまらない。長津江發電工事の三千萬圓や三千五百萬圓などは何んでもない譯である。

野口閥即ち日窒コンツエルンの發展力と云ふものは素晴しいものである。今此の日窒會社コンツエルンが其の系統の事業に投下して居る資本金を見ると現在貳億八千貳百萬圓である。

其の中各工業の原動力をなす電氣供給の設備費に壹億五百二十四萬八千圓を投下して居る。而して其最大發電力は長津江の第一期計畫を加へて水力四十二萬六千七百キロ、火力四萬五千キロとなる。其の出力當りの建設費は水力二百七十九圓で火力は百三十六圓である。彼の五大電力平均の水力四百七十四圓、火力二百三十二圓に比して非常に安いことになる。

更に長津江の第二期第三期の出力計畫を加ふれば六十五萬千七百キロとなるから是れが完成すれば建設費が今少し安くなる譯である。此の安價の電力を以て硫安事業界に進出するのだからなんと

云つても天下無敵と云ふ可きである。而して又肥料工業としての投下資本は一億三千四百二十九萬四千圓である。

日滿兩國の硫安總產額

今日本及び滿洲國に於ける硫安生產能力を示せば（東洋經濟雜誌昭和十年十月調査）（單位瓲）

朝鮮窒素肥料	五〇〇	昭和肥料	二七〇
日本窒素肥料	八〇	滿洲化學	一八〇
旭ベンベルグ	七〇	東洋高壓	一五〇
日窒系計	六四〇	住友化學	一三〇
宇部窒素	一〇〇	矢作工業	四〇
電氣化學	一〇〇	合成工業	五
三池窒素	八〇	東邦副產	五〇
大日本人肥	六〇	滿洲副產	二四
合計	一、八二九千瓲		

之れに依つて見れば日窒系の硫安生產能力は日滿全產額の三割五分即ち三分の一强の重要なる役割を以つて居るのである。

野口遵の正體

此の三億と云ふ尨大な資本を擁して事業界に遽に飛出した大化ケ物野口遵の正體を見屆けて、何時何處に事業家として生れ出したかと云へば、明治三十九年僅かに金二十萬圓の資本を以て鹿兒島縣伊佐郡に曾木電氣會社を創立したのが振出しで、電氣事業を中心に芋蔓式に直系傍系十五會社に手を延ばして猶ほ餘勢を振つて活躍を續けて居るのである。

宇垣總督は朝鮮に於て此の如き事業家の顯れ出た事を朝鮮の誇りとして居るが、赤手空拳を以て事業界の人となり最近十數年間の日子に於て斯の如き天井知らずに延び行く事業を主宰する人間野口遵は世界の事業界に於て、日本の誇りとしても誰れも異議を云ふものはあるまいと思ふ。

黄草嶺の遠望

亂峯矗矗接穹窿。下瞰千尋澗壑濛。
黄艸嶺頭吟興壯。何來孤鶻截秋風。

亂峯矗々として穹窿に接す。下瞰す千尋澗壑の濛きを。黄草嶺頭吟興壯んなり。何來の孤鶻秋風を截る。

香塘曰。筆力豪壯。與黄艸嶺爭勢矣。

咸興で朝鮮ドレッヂ會社の專務、田島常三、成歡鑛業會社常務大越四郎氏等と一緒に湯村縣知事に面會を求めた。それは一週間ばかり前、知事が宇垣總督に隨つて范浦驛の朝鮮ドレッヂ會社建設中のドレッヂ船を視察に訪問せられた光榮に對し、私は社長として御禮に罷出たのであつた。知事はこの時何か會議の開催中で非常に多忙の時であつたが、應接室にすぐ現はれ、先づ朝鮮產業開發に就いての縣の方針を說明せられ、南綿、北羊と共に砂金と水力電氣に適する地勢に及び、特に長津江に於ける野口遵氏の水電事業の經營に就いて詳細に涉つて說明を與へられ、內地の實業家として是非此の異境を巡視される樣勸誘せられ、そして知事は自ら電話で長津江水電會社に私を紹介すると共に朝鮮鐵道會社からもバスを貰つて吳れられたので、私達は行程一日を繰り延べ、長津江水電工事の視察をすることにした。

溫陽溫泉に宿す

蹈遍山河滿與韓。忽忙無處駐吟鞍。
溫陽偶遇靈泉地。洗去征塵獨倚欄。

蹈み遍ねし山河滿と韓と。忽忙として吟鞍を駐むるに處なし。溫陽偶ま靈泉の地に遇ふ。征塵を洗ひ去つて獨り欄に倚る。

晝禪曰。佳作。

香塘曰。穩秀可喜。

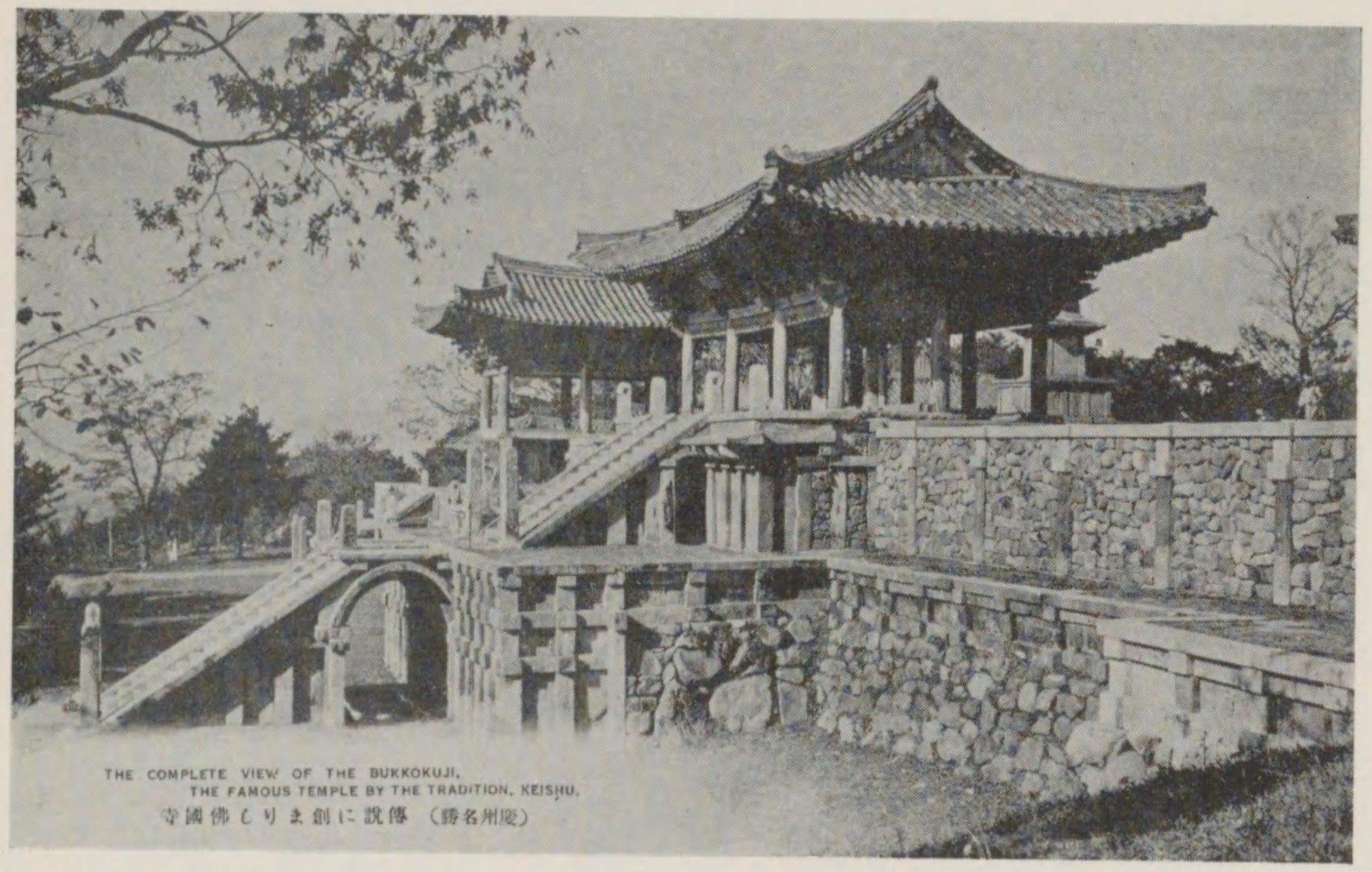
私は成歡驛に至り私の社長である成歡鑛業會社を視察して溫陽溫泉に旅情を慰める事とした。同行者は大越四郎、北村東一、二男角之助等の會社關係者と共に溫泉に浴しつゝ事業計畫の協議を遂げたのであつた。

此處で少しくドレッヂ（浚渫船）で砂金採收事業に對する說明を加へる事とする。

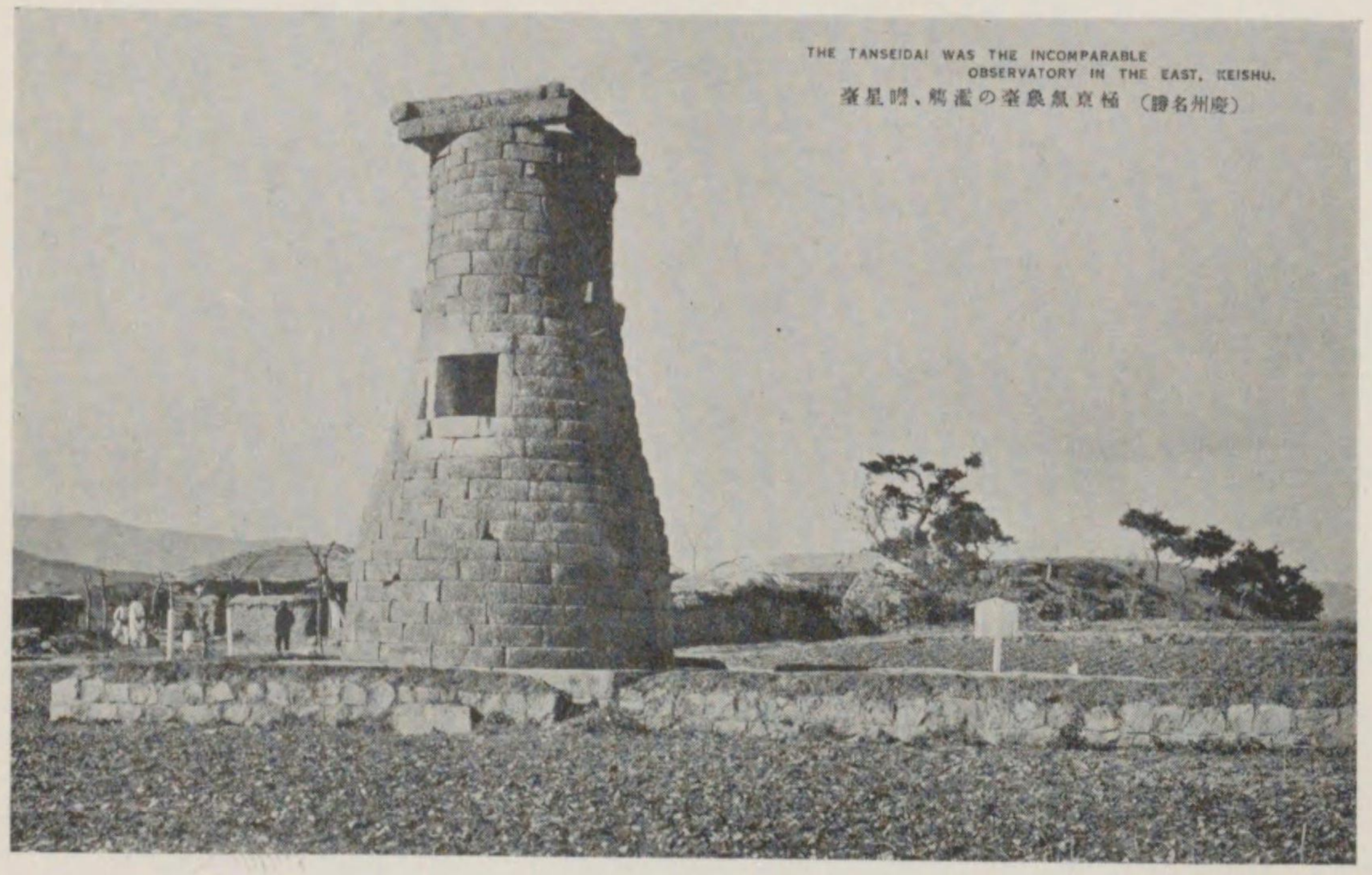
砂金採收事業は昔し朝鮮では手掘として田や畑の地面を掘り返して地下に深く埋沒してゐる砂金を取る事としたが、ドレッヂ船で砂金を採收する事は最近の歷史である。それは米國で始めてドレッヂ採金が應用せられ「アラスカ」「カリホルニヤ」其他各州に於て黃金の洪水と共に黃金時代を實現せしめた有名な事業である。朝鮮では十數年前米國の採金業者ゲーリー氏と云ふ人が十年計畫を立てゝ五十萬弗を投じて千五百トン級のドレッヂ船を造り、米國採金法を應用して經營した朝鮮最初の砂金事業であつた。ゲーリー氏は豫定通り事業の目的を達し、非常の成功を收め歸國の際不用に歸した事業船を其當時ゲーリー氏の許に働いて居た前井太次郎氏に讓り渡し前井氏は缺乏の資力を以て苦心經營其の跡を繼ぎ、それを今の成歡鑛業會社が讓受け事業化したものである。

山に船を浮べると云へば一寸分らぬ樣ではあるが、砂金地帶の田、畑、丘陵を豫め試錐で金塊の埋藏量を測定し便宜の河川から水を誘導して一大沼池を造り、それにドレッヂ船を浮べ、動力で地下二十尺、又は三四十尺の地下に潜在せる砂金を採掘するのである。此の成歡鑛業會社は始めは稷山鑛業と云つたもので、資本系統の變ると共に、今の會社名に改めたのである。此の成歡鑛業會社は百萬圓の資本で同僚重役副社長の三觜舜太郎氏が中心となつて事業に專念せられ三年前から創業以來每期壹割五分の配當を繼續し、近く論山鑛區の參百萬坪に新たに船を入れて事業を發展せしめ、採金報國の實を擧げんとするものである。

其論山鑛區へドレッヂ船を入れるには相當な資金を要すると共に、更に當會社の寶庫とも云ふ可き硫化鐵の鑛區を四國今出に經營しつゝあつたものが豫期以上の優良礦脈に逢着し、每月二千五百噸宛を採掘する事となり、更に進んで五千噸を掘出して別子銅山の賣礦契約に應ずる準備の必要上、玆に現在資本金百萬圓の外に貳百萬圓を增資して參百萬圓の會社としたのである。其增資新株の一部を開放して市場に提供したら、會社の實情の理解を得て四分の一拂込の株が二十八九圓から三十圓の高値を往來する事となり、採金界の爲め祝福して居る次第である。



THE COMPLETE VIEW OF THE BUKKOKUJI, THE FAMOUS TEMPLE BY THE TRADITION, KEISHU.
（慶州名勝）傳說に創まりし佛國寺



THE TANSEIDAI WAS THE INCOMPARABLE OBSERVATORY IN THE EAST, KEISHU.
（慶州名勝）極東氣象臺の無類、瞻星臺

天安より慶州に赴く途上にて

車窓盡日對林巒。　一樣風光既飽看。
困困欲眠眠未得。　奇峰如倒鑑晴瀾。

車窓盡日林巒に對す。一樣の風光既に看るに飽く。困々眠らんと欲して眠り得ず。奇峰倒るゝが如く晴瀾に鑑す。

畫禪曰。未敢求工。却成佳構。是爲眞詩。

香塘曰。巧寫長途倦怠之情。出語警拔。見作者才筆不凡。

每日の汽車旅行は殆んど倦怠に堪へなかつた。時に睡氣を催し居眠をしようとすれば、目の醒める様な奇巖怪石の風景が出でくるので眠るにも眠られず自然と詩興に耽ける事に成つた。

夜古都慶州に入る。偶ま二首を得たり

夜入慶州千古城。城頭纖月不ㇾ堪ㇾ情。
一聲烏鵲知何處。今日猶爲二往日鳴一。

夜入る慶州千古の城。城頭の纖月情に堪へず。一聲烏鵲知んぬ何れの處ぞ。今日猶ほ往日の鳴を爲す。

晝禪曰。構想有二古意一。居然唐調。

千年舊蹟一天秋。夜靜蟲聲惹二暗愁一。
倚二盡欄干一人未ㇾ去。古城新月掛二蒼邱一。

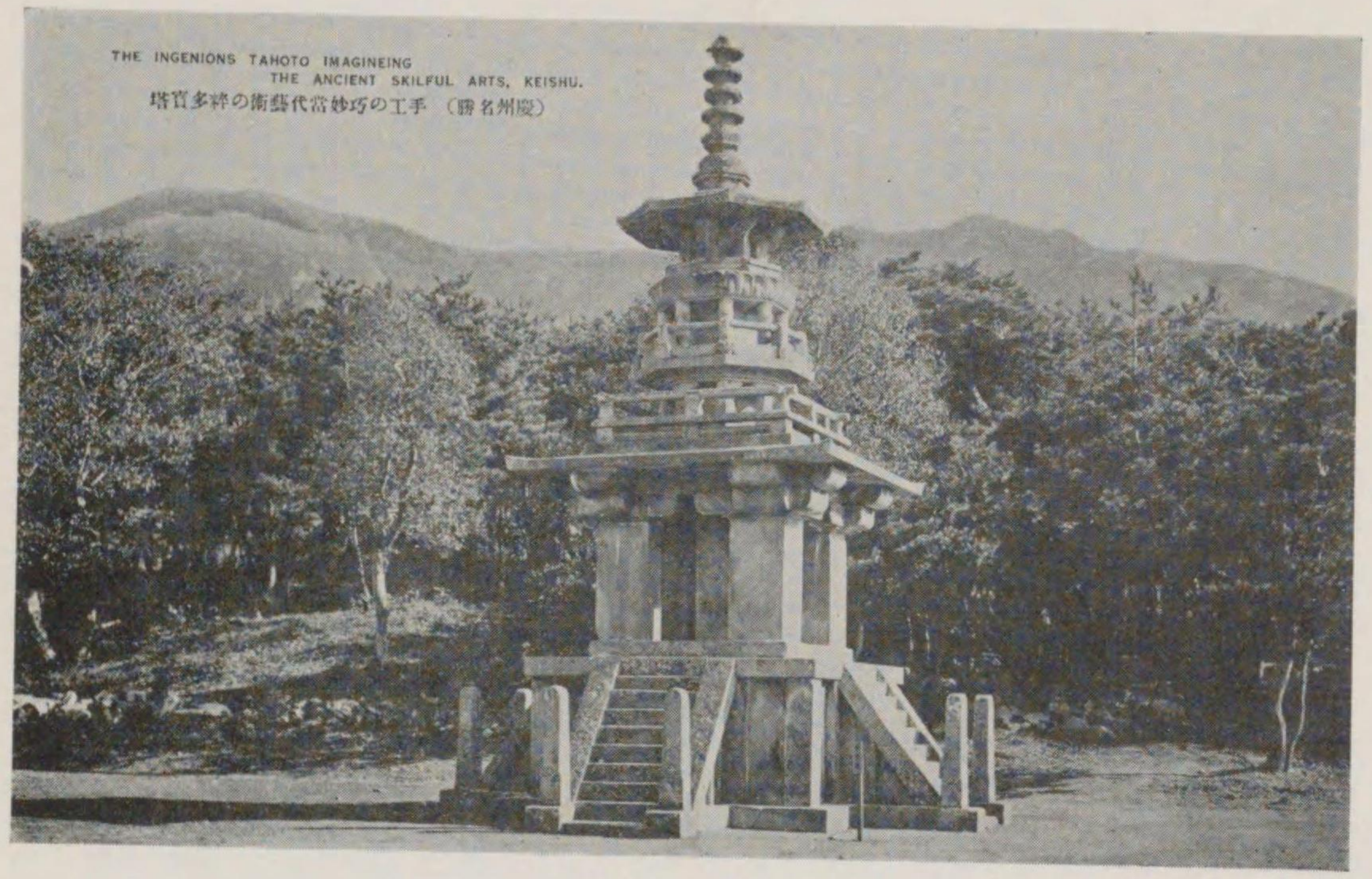
千年の舊蹟一天の秋。夜は靜かに蟲聲暗愁を惹く。欄干に倚り盡して人未だ去らず。古城の新月蒼邱に掛る。

夜古都慶州に入る。偶ま二首を得たり

畫禪曰。眞ニ寫實景ヲ。感懷無レ限シ。佳作。
香塘曰。二首情趣哀惋。善ク寫シ古都荒寂ノ夜景ヲ。使ム人ヲシテ懷古ノ情深カラ。

私は京城で宇垣總督に面會の光榮を得た。此時總督は朝鮮施政二十五周年の祝日の前日で、非常に多忙の時であつたにも拘らず數十分の時間を與へられた事を喜んだ。其時宇垣氏は朝鮮を見んとするものは長津江の水電工事と、歷史上の慶州を見ざれば朝鮮を見ざると同じだと話された。私達は已に長津江は視察したれば、慶州を見んものと行程一日を延長して慶州に向つたのである。

慶州に行つたら、其の先きの佛國寺の旅館に宿を取る可きであると聞いて直行したのであつた。處が粗末な輕便汽車で夜八時頃慶州に着いた。驛で佛國寺迄自動車を賴まんとしたが、此日は宮殿下が陸軍の小機動演習の爲め來臨せられ、佛國寺旅館は全部提供されたことを知り、大越四郎二男角之助と私達の一行三人は慶州に宿する事になつた。幸ひに千年の古都慶州の夜景を獨占するの機會を得た譯であつた。薄曇の新月で、薄暗い山を眺めては廢墟にでも入つたやうな淋しい感じがした。時々鵲の侶を呼ぶ聲を聞くにつけても此聲が千年前の昔もこうであつたかと思ふ。慶州に就いて特に心を牽くものは今から千九百年前新羅征伐に神后皇后が御親征の古蹟であるからである。今は細流と成つて居るが、舊都城の蹟と稱せらるゝ田畑の中心を流るゝ「ありなれ川」とは皇后の名


THE INGENIONS TAHOTO IMAGINEING THE ANCIENT SKILFUL ARTS, KEISHU.
（慶州名勝）手工の巧妙當代藝術の粹多寶塔

NOTED IMPERIAL TOMBS OF THE FIRST EMPEROR TELLING THE ARORE AGES OF SHIRAGI SUDDENLY, KEISHU.
（慶州名勝）新羅勃興の古を偲ぶ始祖王の陵

付け賜ひたる所であると聞いて一層身が太古の人となつた感を覺えしめた。慶州の歷史を調べて玆に其の一節を紹介する。

慶州は新羅建都の地で（我が崇神天皇卽位四十一年、西曆紀元前五十七年、前漢宣帝五鳳元年）、新羅の始祖朴赫居世初めて六部を糾合して國を建てゝから五十四世、九百九十二年間王都を置いた處である。初期の頃は明主賢相が相繼いで早くから漢土の文化を輸入し、國運頗る發展した。其の奈勿王の時代に我が神功皇后の征討を受くると、日韓の連鎖が斷つことが出來なくなり、其の間治亂定まらず、太宗武烈王の時代に、金春秋なるもの不世出の英資を以て大國唐に結び、日本の勢力を韓半島から排除すべき大謀を定めた。我が齊明天皇の時、大纛を筑紫朝倉殿に進ませられ我が百七十艘の舟師は舳艫相啣みて白村江（卽ち今の錦江）に到り玆に唐、新羅の同盟軍と日本、百濟の聯合軍と大衝突を見るに至つた。一朝我が舟師が敗退すると、延いて百濟は滅亡の不幸を見た。それから新羅は戰勝の氣運に乘じて北進し、遂に高麗を滅ぼし、玆に始めて韓半島統一の基を開き、文武、神文兩王の治世にはおの〳〵內政整理に意を注ぎ支那南北朝の文化と、初唐の制度とを輸入し文物隆昌の極に達した。爾來幾多の治亂變遷を經て敬順王の時に至り、高麗に降り滅亡するに至つたのである。

夜古都慶州に入る。偶ま二首を得たり

佛國寺

古寺蕭條翠岳巔。洞中石像古千年。
羅朝文物尋無レ迹。老木秋寒鎖二夕煙一。

古寺蕭條たり翠岳の巓。洞中の石像古千年。羅朝の文物尋ぬるに迹なし。老木秋寒くして夕煙を鎖ざす。

畫禪曰。亦是唐調。可レ謂二佳作一。

佛國寺

宮殿下には朝七時佛國寺を御出發大邱に向はせらるゝので、私達は入違ひに佛國寺を尋ねることにした。一行は例に依て三人である。此日小雨で雲は山を鎖し綠の樹木は皆な煙に迷ひ詩情は却つて動き、雅致掬す可きものがあつた。千年の舊蹟を雨中に尋ねるのは其處に何かの緣があるやうにも思はれた。

佛國寺を見物した後旅館に立寄り、中食を命じ、欄干から双眸を放てば一望千里で、もし晴天でもあれば富士山まで見ゆるかと思つた位であつた。併し詩情は湧いたが殘念な事には一首も出來なかつた。

佛國寺は慶州を距る四里吐含山の山中にある。此寺の建立は新羅法興王の時代で、我が朝では紀元一千百八九十年繼體天皇の時代に當る。今を距ること一千四百年前である。そして新羅景德王の時金大成といふ人によつて重剏せられたるものだ。石塔石橋の類は皆な此の時に築造せられたのである。當時の規模は頗る壯大で善美を盡したものであつたが、幾回か改築せられ、今日殘存せる一二の殿閣は遙か後世の建築であると云ふ事である。

朝鮮施政二十五年祭二首

昔時神后親征後。已是一千九百年。

今日佳辰祝皇化。　不憂冦盗冐天民。

昔時神后親征の後。已に是れ一千九百年。今日佳辰皇化を祝す。憂へず冦盗の天民を冐すを。

簇簇炊煙上下歡。　江山不是舊時觀。

治安二十五年績。　仰見天恩與海寛。

簇々たる炊煙上下歡ぶ。江山是れ舊時の觀にあらず。治安二十五年の績。仰ぎ見る天恩の海と寛きを。

朝鮮施政二十五年祭

九月二十九日朝、咸興から夜行で京城に着いた。朝鮮殖產會社專務世良一二氏へ電報でゴルフ準備を依賴して置いた爲め、同氏は驛に出迎へられ、私は請せられて氏の自宅で朝餐の馳走を受けた。直ちに古河鑛業の林俊夫氏とゴルフ場に赴いた。併し世良氏は後藤一郎氏が同行しなかつた事が非常に失望のやうに見へて氣の毒千萬であつた。併し又一面には後藤氏が居なかつた爲め後藤氏獨特の舌難に遇はずに助かつたと小さな聲で云つて居つた。

翌日は施政二十五年祭で、內地から朝鮮關係の大官實業者等多數の來賓御入來で京城の天地は大騷であつた。東拓の高山長幸氏を訪問したが、式場へ出掛けた跡で遇ふ事は出來なかつた。總督府へ宇垣氏を訪問したら多忙中の樣子だつたが、特に面會して朝鮮產業獎勵政策の狀況を承はつた。

歸途馬關を過ぐ

南到朝鮮北滿洲。　壯心未已且周遊。

行程萬里三旬後。　穲稏還看日本秋。

南は朝鮮に到り北は滿洲。壯心未だ已まず且つ周遊す。行程萬里三旬の後。穲稏還た看る日本の秋。

香塘曰。以意運詞。即有此佳篇。

滿洲を旅行して平原萬里山もなく木もなく又水もなく見渡す限り原始時代の茫漠たる野趣を呈せる有樣を見て、朝鮮に入れば鴨綠江を境界として綠山碧水美田沃野を連ねて其變化の著しきものを

見る。翻つて日本に歸つて見れば更に其の狀況の異なるを見る。卽ち山川草木皆な是れ詩的で蓬萊島の稱亦偶然ならざる事を知つた。

歸途東海道道中作

東海風煙畫裏秋。　青山紅樹散羈愁。
天邊仰見芙峯雪。　萬里歸程忽駿州。

東海の風煙畫裏の秋。青山紅樹羈愁を散ず。天邊仰ぎ見る芙峯の雪。萬里の歸程は忽ち駿州。

香塘曰。意境清曠。與馬頭初見米囊花異曲同巧。

附録

在滿將士慰問旅行雜錄

在滿將士慰問旅行に就いて

十月二十九日であつた。東京商工會議所の木村理事から電話で、此度滿洲出征軍人各部隊の慰問使として私に會議所を代表して滿洲へ出懸けて呉れる樣にと、役員會の希望として傳へられた。其時私は成歡會社の增資問題を始とし、關係深き東京製鐵、大阪造船所等其の他の關係セメント會社の懸案も相當輻湊して居るのと、且つ滿洲は昨年今頃特產協會の團長として北滿全部を一ケ月間旅行した直後でもあつたので、少しく躊躇したが、考へて見れば夫れは會社關係とは云ふものゝ私的事情たるに外ならない。然るに出征軍人諸氏は親に離れ妻子と別かれ一意國家の爲め身を挺して滿蒙に出征し、酷熱と闘ひ烈寒を凌ぎ、或は匪賊の討伐に、或は國境守備に、乏に堪へ、飢に甘じ、常に生死を超越して國民たるの義務に精進せられつゝある事を思ふに當つて、私情に依つて公務を回避す可き場合でないと氣付いたのであつた。

そこで出立は何日であるかと訊いたら、十月三日即ち中三日間の餘日を有するに過ぎない程急迫してをつた。殘務整理は非常に忙はしくなつた。併し夫れが爲めに仕事は急塡補に進行した。成歡

の增資も株の賣出しも卽座に解決した。他の爲す可き事も非常招集と出張解決等で概要を片付け、殘務は歸宅迄延ばす事にして出立準備を濟ましたのであつた。處が府と市の代表者の都合で二日間遲れて十月五日に出發したのであつた。以下慰問旅行に於て感想を絶句に寄せたものゝ一部を摘載して本稿を追加する事とした。代表旅行者の一行は左の人々でつた。

在滿將士東京慰問使

東京府

社寺兵事課長　廣橋眞光
府會議長　岡　蓉
町村長會長　岩浪光二郎
屬　稻垣富治

東京市

社會教育課長　間宮龍眞
日本橋區長　川口寛三
本郷區長　井上桂
書記　山口勤

東京商工會議所

議員（前副會頭）　岩崎清七
總務課長　白井寛彌

在滿の將士を慰問して

南征北伐豈期名。爲國干城竭至誠。
慰問諸君傳一語。豐年日本滿歡聲。

南征北伐豈に名を期せんや。國の干城と爲つて至誠を竭す。諸君を慰問して一語を傳ふ。豐年の日本歡聲に滿つ。

以百當千事已難。冬嚴不是瘃皸（チヨクウン）寒。

皇軍士氣君知否。　妖彈何曾敵鐵肝。

百を以て千に當る事既に難き。冬嚴是れ瘃皸（手と足の凍傷）の寒きのみあらず。皇軍の士氣君知るや否や。妖彈何ぞ曾つて鐵肝に敵せん。

湯湯王道絕偏私。　樂土謳歌德在斯。
誰識皇軍將士苦。　築成天下泰平基。

湯湯たる王道偏私を絕つ。樂土の謳歌は德斯に在り。誰か識らん皇軍將士の苦。築き成す天下泰平の基。

畫禪曰。皇軍將士氣慨今猶幸若此可欽哉。

香塘曰。或激勵。或慰籍。言言痛切。無復餘蘊。此篇深關士道須翫味。

神戸埠頭にて新婦の新郎を送るを見て

底事無情携我郎。　怕牽締布別愁長。
閨中携手復何日。　紅淚絲絲流作行。

底事の無情ぞ我郎を携ふ。牽くことを怕る締布別愁の長きを。閨中手を携ふ復た何れの日ぞ。紅淚絲々として流れて行を作す。

畫禪曰。纏綿之情若目睹。構想亦佳、而締布入詩蓋爲詞兒嚆矢乎。

香塘曰。詩亦有情緒纏綿之致。

大連に赴くの船中

夜深拍枕怒潮鳴。　暗黑洋中船自行。
不說人間行路險。　波間無路路縱橫。

夜深枕を拍つて怒潮鳴る。暗黑洋中に船自ら行く。說かず人間行路の險なるを。波間路なきも路縱橫。

香塘曰。東海翁居富不傲。處困不憂。常抱光霽之襟懷。故百難不屈。千艱不撓。能成就大事業。時托興吐悟道語。是全從經驗來者。吾輩豈得不服膺乎。

畫禪曰。胸襟落々。無所礙滯也。

大連招宴の席上戯れに友人山本君に贈る

千里行程水與レ雲。　名花異境放ニ奇芬一。
定情今夜簾櫳底。　折ニ得一枝一分ニ剩薫一。

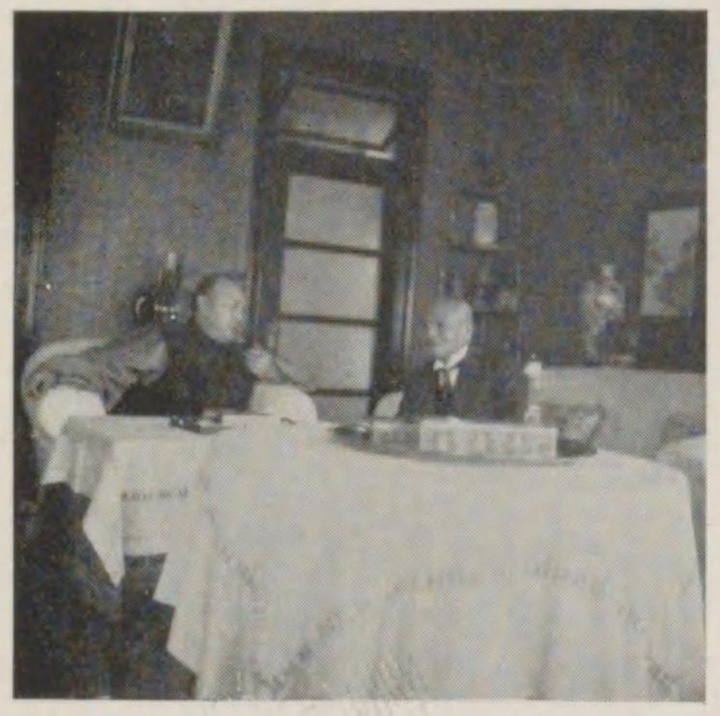
千里の行程水と雲と。名花異境に奇芬を放つ。定情今夜簾櫳の底。一枝を折り得て剩薫を分たん。

香塘曰。戯謔一番。東坡先生亦應レ避ニ三舍一。予曰。殘香剩馥奈レ君何。不レ知山本君首肯否。呵呵。

道中は順調な氣候に惠まれ、秋天一碧の海洋と紅樹山野を飾るの大陸を旅行し、旅順の戰蹟は素より各部隊及び衞戍病院等を慰問し、新京で植田軍司令官にも面會各地の要務を果した。ハルビンに着いた時、偶々輕微乍ら風邪に襲はれ少しく苦痛を覺えた。その時同行者から老齢を以て零度以下の北滿奧地の旅行はたとひ健全無比と雖も愼む可きであるとて固く注意せられたから、會議所側としては白井寛治君に代表を依頼し、私は稍や溫暖地帶と云はるゝ北支地帶に行程を變更したのであつた。事實各代表が北安に着いたときは零度以下十四五度であつた事が新聞で解つて中止した爲

新京宮内府前に於ける慰問使一行（中央は著者）

滿洲國實業部大臣丁鑑修氏訪問の著者



丁鑑修閣下と對話中の著者

右より晃二郎・丁鑑修閣下・著者・西村都得人

め、多數の人に心配を掛けずに濟んだ事と思つて喜んだ。併し七十三歳の老軀を以て冬期の北滿旅行は無理であると口々に云はれるので、老氣秋に横はるといふ豪雄も聊か閉口垂れ氣味となつた。
新京より奉天に歸り遼陽のセメント工場それは最近私が社長に選任せられた責任上、視察せんとせしも同地も亦寒波に遭遇し、激しき風雪に襲はれた爲め遼陽行を歸途に讓り、夜行にて天津に直行する事とした。奉天からは東亞煙草會社專務松尾晴見氏が同行せられ同氏の爲めに非常の便宜を得た。

丁鑑修大人に寄す

曾自賡酬友情熟。　常思別後再逢速。
善隣親誼豈須論。　五族由來元一族。

曾つて賡酬より友情熟す。常に思ふ別後再逢の速なるを。善隣の親誼豈に論ずるを須ひんや。五族由來元と一族。

香塘曰。前半叙二其情誼一。後半論二其懷抱一。情義共全。作者之識見可下以窺上見也。

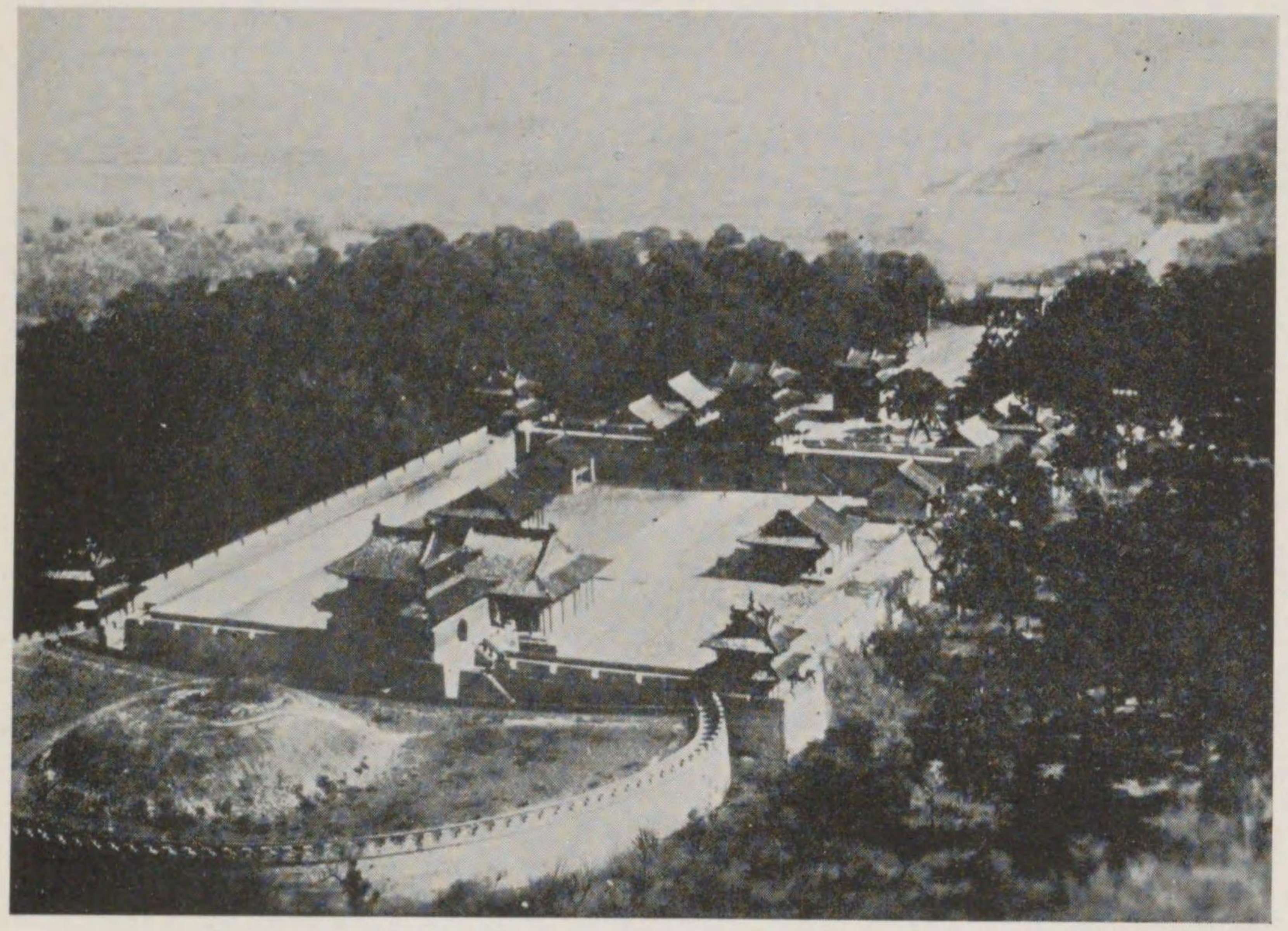
畫禪曰。結句亦是有道之言。

實業部大臣丁鑑修氏を訪問

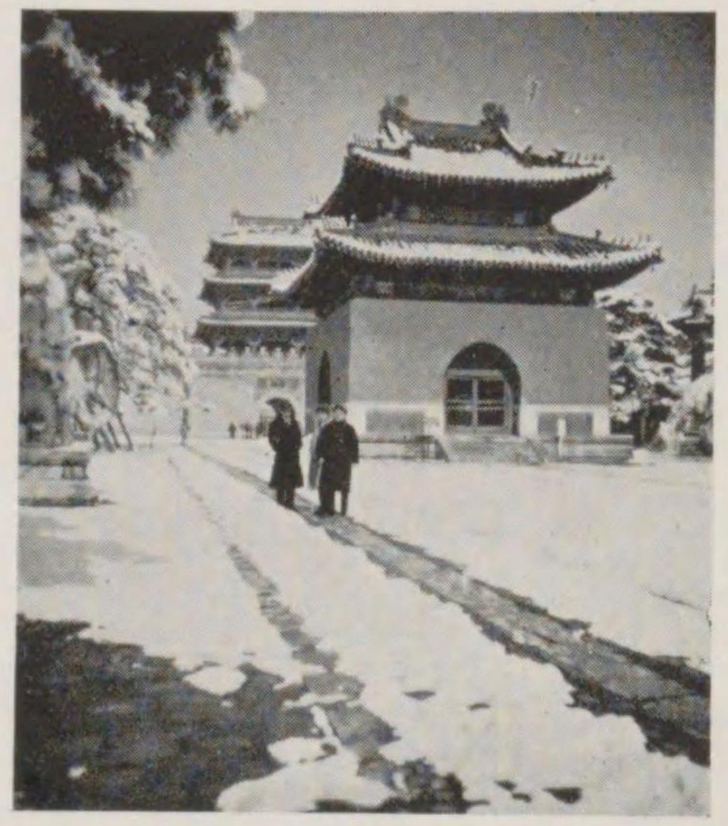
昨年特產協會旅行團の團長として面會したのが緣となり、詩作の應酬による面識を機會に今回も亦出征兵士慰問旅行に際し、敬意を表せんものと氏の私邸を訪問した。日曜の休養中にて揮毫に親しみ居られたにも拘はらず、面會せられ、談笑に時の移るのも忘れた事は旅行中の一快事であつた。前記の一首は翌日旅行先から氏に御禮として繪葉書に認めたものである。

開原の途上

曠原輝日照二嚴霜一。　收二盡嘉禾一滿二廩倉一。
穀價昂騰民自富。　炊煙畫出太平鄉。



北陵の全景



北陵の雪景

隆恩門前に雪中觀光の著者

曠原の輝日嚴霜を照し。嘉禾を收め盡して廩倉に滿つ。穀價は昂騰して民自ら富む。炊煙靄き出す太平の鄕。

香塘曰。王道樂土是滿洲建國之理想也。今將結其美果。豈得不祝賀乎哉。

耋禪曰。若不接其境地。夢想不得焉。

滿洲に於て砂金鑛業を起さんとす

千里曠原開宿霧。金銀鑛氣自流露。
壯心未已老逾雄。欲拓遐荒大寶庫。

千里の曠原宿霧を開く。金銀の鑛氣自ら流露す。壯心未だ已まず老いて逾雄なり。拓らかんと欲す遐荒の大寶庫。

香塘曰。筆力雄勁。直據實業家大抱負。實有據鞍顧眄之槩。予最喜見東海翁面目躍動於楮墨之間。

満洲奉天に在つて家郷を思ふ

去年此地數歸程。　雁信幾回傳客情。
人逝家園秋意寂。　任教修竹倚陰晴。

去年此地に歸程を數ふ。雁信幾回か客情を傳ふ。人逝いて家園秋意寂。さもあらばあれ修竹の陰晴に倚るを。

香塘曰。言自肺腑中出。眞情流露。自然動人。不忍多讀。

畫禪曰。豈不憶家鄉焉。鸞鏡影寒。噫矣。

天津より北京に至る

前朝戰蹟那邊求。　唯剩柳楊兼水流。
風物如看滿洲景。　群鴉空噪夕陽秋。

前朝の戰蹟那邊にか求めん。唯だ剩す柳楊と水流と。風物は滿洲の景を看るが如し。群鴉空く噪ぐ夕陽の秋。

香塘曰。託意深微。頗見蘊蓄之妙。昧者不能解。

天津が北支の中心市場たる事は夙に聞く所なりしが、豫想以上の大市街であつて、人口百五十萬と稱し各租界の商店、銀行、會社等の堂々たる建築には一驚を喫せざるを得なかつた。

三菱商事會社支店長田中淳一氏の來訪により長時間に亘り冀東、冀察兩政權の成立と我が帝國と協商及び其經過等を說明せられ北支政權と其の中心人物の概念を把握する事を得たる事は北支視察の好指針として深く感謝する次第である。

北支視察より歸國の途にある建川中將にも逢つて長時間談話の光榮に浴した。又軍司令部を訪問して井土垣主計正の話を聞く事を得た。

要するに北支と經濟提携の協定により北支の治安が確保されて居る今日に於て、關稅の障壁によつて遮斷され居る日支の貿易を回復する事は北支政權內に工業を起して關稅の抗束を脫するの外な

いのである。鐘紡會社の工場買收と其の增設計畫等は機宜の處置として敬服に價するものたるを思はしめた。

清水安三先生に贈る

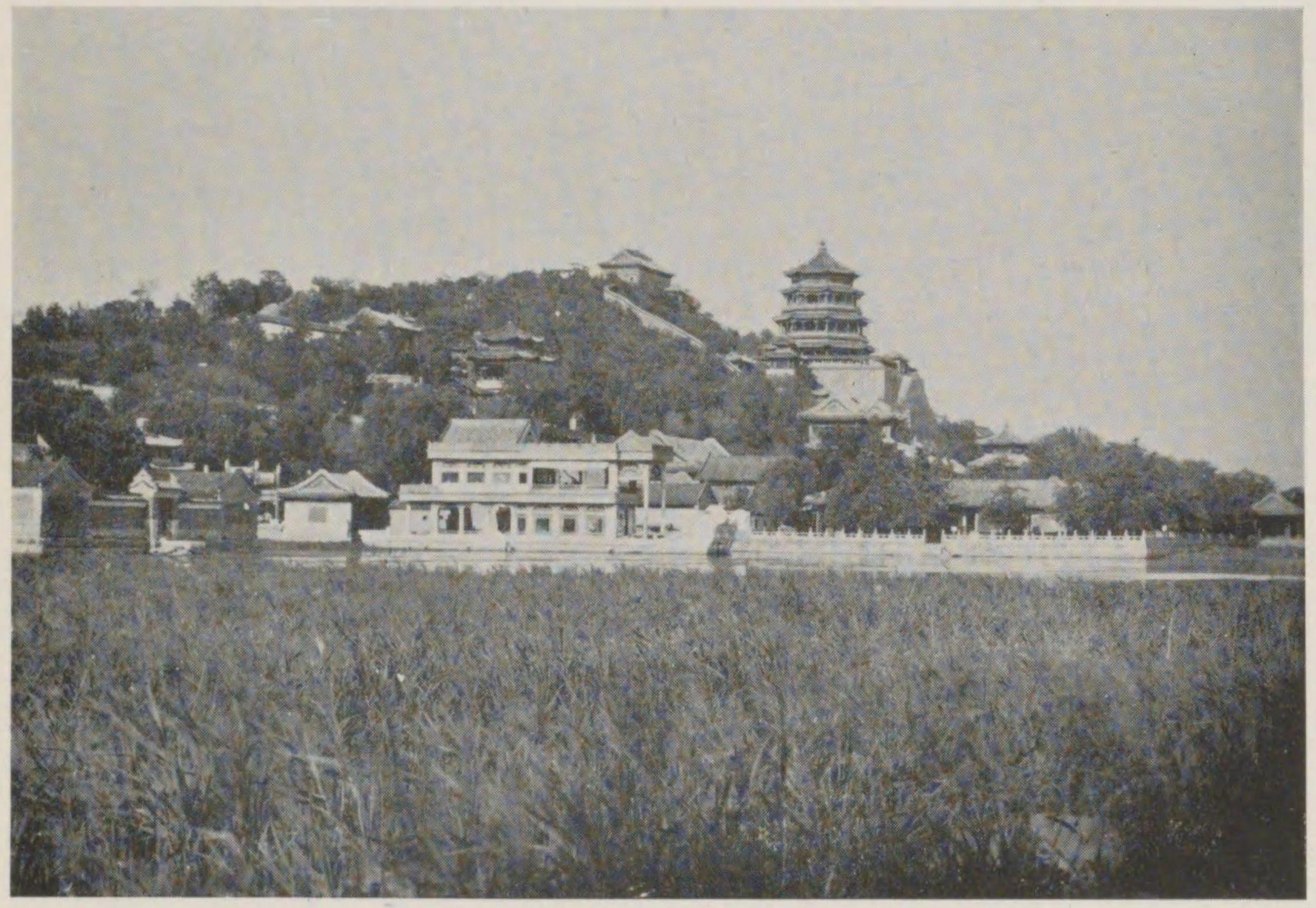
不厭燕京陋巷塵。孜孜傳道愛隣人。
殺身誰是爲仁者。今有安三古鑑眞。

厭はず燕京陋巷の塵。孜々として道を傳ふて隣人を愛す。身を殺して誰れか是れ仁を爲す者。今は安三あり古は鑑眞。

香塘曰。贈言得體。結末使清水先生重於鼎呂。

畫禪曰。道之人也、道之人也。

清水安三氏經營の崇貞學園



萬壽山遠望

清水安三氏夫妻經營の崇貞學園

崇貞學園に於て學徒に講演中の著者

今より十七年前に二十七才の青年であつた清水安三氏は、支那に渡り、北京の貧民窟に入り、一生涯を捧げて支那民衆の敎化に盡さんと決心したとの事であるが、今私は玆に面會を得た動機と氏の直話とを記する事とする。

十月二十一日冀東政權の長官殷汝耕氏の饗宴に招待せられ、伊丹中將、大山博士の兩氏と共に通州の殷氏の邸宅を訪問し長時間談話を交したのであつた。其時伊丹氏の云はるゝには今日偶然に淸水安三氏と云ふ不思議の篤志家の事を聞いた爲め、明日其人の經營せる學校を訪問せんと思ふが、君も同行したらどうかとの事であつた。そこで翌日十一時を約して校舍に會合する事とした。伊丹氏は公務に差支を生じ私丈け見學した。淸水安三夫妻は非常な喜びを以て私を迎へて吳れた。そして氏は氏の決心と經過とを話して吳れた。

德富先生の筆力と鑑眞和尙

氏が一生を支那人敎育の爲めに犧牲にならんと決心せられた動機は、德富蘇峯先生の筆力の影響であつた事を知つた。前年蘇峯先生が支那旅行の記事に於て、世界各國より一生を捧げて支那の文化に貢献せし幾多の人々を數へ來て、更に筆を强め古今を打通して唯の一人の日本人が、支那人の

爲めに犠牲的に精進した人あるを聞かざるを遺憾とするとあつた。此記事を氏は同志社の學窓に於て見た時、氏は日本人の其の一人たらん事を心に期したと云ふ事であつた。更に修學旅行に於て奈良の唐招提寺に至り鑑眞和尙の故事を聞いて、鑑眞和尙が日本の爲め一身を捧げて文化指導の任に當たつて呉れた其の御禮として、一千二百年後の今日に於て自分が其の責を負ふ可きであるとの決心を固め、之れを實行に移したのであると云つた。

長陽門外の貧民窟と清水氏

氏は北平の長陽門外の貧民窟に居を占め、單身子女の敎化を始めたのであつた。此の貧民窟は其の當時住民四萬人と稱せられ、其の生活は子女は淫賣、男は苦力と車夫で實に見るに忍びざる生計狀態であつた。

氏は民衆自活の道を立てるには仕事を敎へるの外ないと考へ、先づ子女の敎育と共に生活に資する仕事を與へる事とした。其の仕事は資本を要せざる手繡を清水氏妻女の繊手によつて始める事としたのであつた。然るに最初は中々賣品として幾多の難點があり、金に換る事は容易ではなかつたが夫妻渾身の努力によつて、或は輕井澤避暑地の外人に、或は三越に、或は友人に托して米國各デパート等に賣出す事にした。それが爲め頗る認められて今では米國のワナメーカー、デパート始め三越等よりも註文を受ける樣になり、朝陽門外の貧民窟は今は一轉して手繡工業の生産地として幾千人の小家族が日夜其手工業に精進する事となり、淫賣などする子女は絕無とは云はざるも、極めて稀である情況だと云ふ事であつた。氏は更に子女敎育も已に目鼻が付いたので、今後男子の敎育として夜業を始める事を計畫して今年十一月より開始する運びとなつたとの事である。其の資金として或る氏の知人に依賴したら快く承諾して呉れたので夫れが存外早く實現したとて喜んで居つた。

森村男爵美擧

此清水氏の成功に對して見逃し難き隱れたる恩人がある。夫れは男爵森村市左衞門氏である。其の經過を清水氏の談話を借りて玆に記すれば左の如きものである。

清水氏が同志社を出て此の敎育事業を始めるに當つて、無一物では成功の見込がないので、其當時頭に浮んだ第一人者が森村男の聲望であつた。

そこで大膽にも品川驛に下車して森村邸を訪問した。素より一介の貧書生であつて權勢堂々たる男爵に一度で面會出來るなどとは考へてはゐなかつたが、心に神を念じつゝ面會を申し込んだ。併

し門衛が容易に取次いで吳れなかつた。けれども此方は一生懸命であつた。其時門衛は警官と將棋を指して居つたから自分も氣長に構へて將棋の仲間入をして一二番指して其間に諄々と面會の要を說いた。處が門衛も他意なきものと認めたか、兎に角男爵に名刺を取次ぐと共に說明をして吳れた。男爵は一寸過つてやると云ふ事となり數分間面會したら、其話なら名刺をやるから山脇正吉と遇つて話せとの事であつた。其の一片の名刺が非常の功をなして、森村豐明會から驚く勿れ金五千圓の支出を得たのであつた。夫れが今日日支親善の基礎事業たらんとする清水氏經營の崇貞學園の基礎資金となつたのであつた。而して曰つた。清水が若しも不良漢であつたら森村さんは五千圓を詐僞された事になつたのであると。

森村男爵へ私の公開報告

清水氏が事業を始めてから玆に十七年の歲月は過ぎたが、未だ一回も森村さんに面會した事はないから、現實の此の有樣を森村氏に傳へて吳れとの事であつた。そこで玆に報告文を草して森村さんへ公開報告をなす事としたのである。

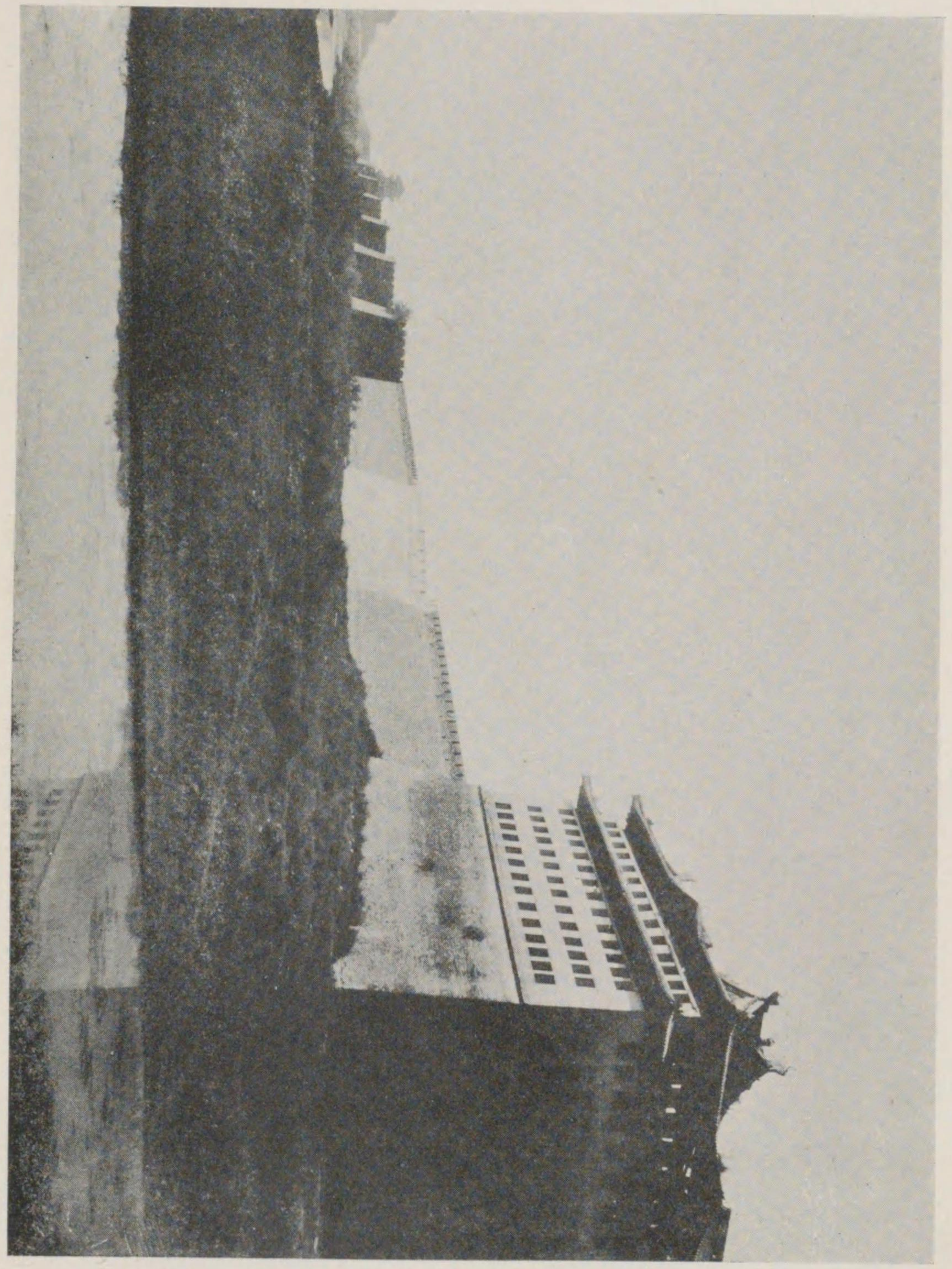
私の北平に滯在中の十月二十一日が創業十七年目に當つたので祝賀會をしたとの事であつた。其時は各國の大公使、支那大官宋哲元氏、市長秦德純氏等より代理者を以て出席して吳れ、日本大使館では一等書記官加藤氏が出席して吳れたとの事であつた。

此の隱れたる清水氏の德行が始めて世に曝されたるに驚いた北京各支那新聞は一齊に其の美擧を賞讃し、其の記事を連載しつゝあつた。

此の稿を起草中汽車中で偶然にも山脇正吉と面會した。清水氏の話をしたら、夫れは十七年も前の事で確かと記憶はないが、森村一人ではない筈であるから一應調べてやるとの事であつた。翌日書面を以て左の如き是正が來た。卽ち神戶の田村新吉氏と東京の森村男爵の兩人より各五千圓宛、外に敷地として大阪の高木貞衛氏より千八百坪を購入して寄附せられたのであるとの事であつた。玆に記して私の粗漏と山脇氏の厚意を謝する事とした。此の記事を草するに當り、最も哀悼の情に堪へざる事は友人田村新吉氏が去る十一月九日逝去せられた事である。清水氏も定めて痛恨した事と思ふが、記して田村氏の遺靈に報告せんとするものである。

清水夫妻の抱負

前項の如く清水氏は鑑眞和尙が日本思想界に貢献して吳れた御禮ではあるが、清水氏一族は日支



北京城壁　今より五百余年前明の永樂年間の建造で、内外二城に別れ堅固なる城壁を繞らし内城は周圍四十華里高さ三丈五尺の莊大なものである。

親善の人柱となつて眞情による日支親善の楔子となる積りであると云つて居た。現に先妻淸水美穗子女史は死に臨み遺言して曰く「吾が長子が二十五才になつたら崇貞學園に入つて、終身を支那民衆敎育に奉仕する事と、吾が遺骨は崇貞學園の校庭に埋葬する事」其他を遺言して其旨趣を愛弟子の支那子女の手によりて墓石に書かしめ、永久に此の校舍の發展と其の將來の擁護を誓つたと云ふ事であつた。氏は今日に至るまで、德富先生と綱島佳吉先生に非常な聲援を受けて居る事を感謝して居た。私は兩先生を知つて居る事と、特に綱島氏の私との關係を氏が知つて居る爲めに、綱島氏に對する感謝を私に向けられ、在平中は每日ホテルへ訪問せられ、各地の案內と北支問題の如き支那側の見る意見等も十分聞く事を得て、對支問題の新知識として旅行中の一大收穫であつた。

過去二千年來誰れが支那の爲めに犧牲になつたか

日本が二千年來支那の文化を輸入し之れを咀嚼して日本文化に偉大な感化を與へた事は歷史の證する所であり、又近代文化の進展より貿易により支那に物貨の輸出として年々何億圓と云ふ好顧客たるにも拘はらず日本が支那に對して何程の慈善的行爲をなせしか、支那文化協會の施設と同仁會の奉仕とは其の當局者の勞苦を多とするに足ると雖も之れを英、米、獨、佛、露等が宣敎師又は學

校等の文化事業によつて年々幾百萬圓又は幾千萬圓の奉仕行爲をなして居るに對して、日本たるものの顧みて耻じざるもの無しと言ふ事を得らるゝや、大いに考ふべきである。此の時に於て眇たる一介の貧書生淸水安三氏がなしつゝある奉仕生活は日本の爲めに世界の思想界に對して氣を吐くに足ると思ふのである。

北京紫禁城を觀て三首を得たり

聞言禹域皇居壯。　不見其眞誰解壯。
緬想盛時感慨多。　秋天落日照雄壯。

聞くならく禹域皇居壯ありと。其の眞を見ずんば誰れか壯を解せん。緬かに盛時を想ふて感慨多し。秋天の落日雄壯を照す。

天子面南嚴上壇。　百官成列整衣冠。
只今惟有夕陽冷。　秋艸離離覆玉欄。

天子南に面して嚴として壇に上る。百官列を成して衣冠を整ふ。只今惟だ夕陽の冷かなるあり。秋艸離々として玉欄を覆ふ。

宮殿凌レ空勢壯哉。　銅缸寶鼎列二瑤臺一。
小春天氣宸園裏。　花木向レ誰深淺開。

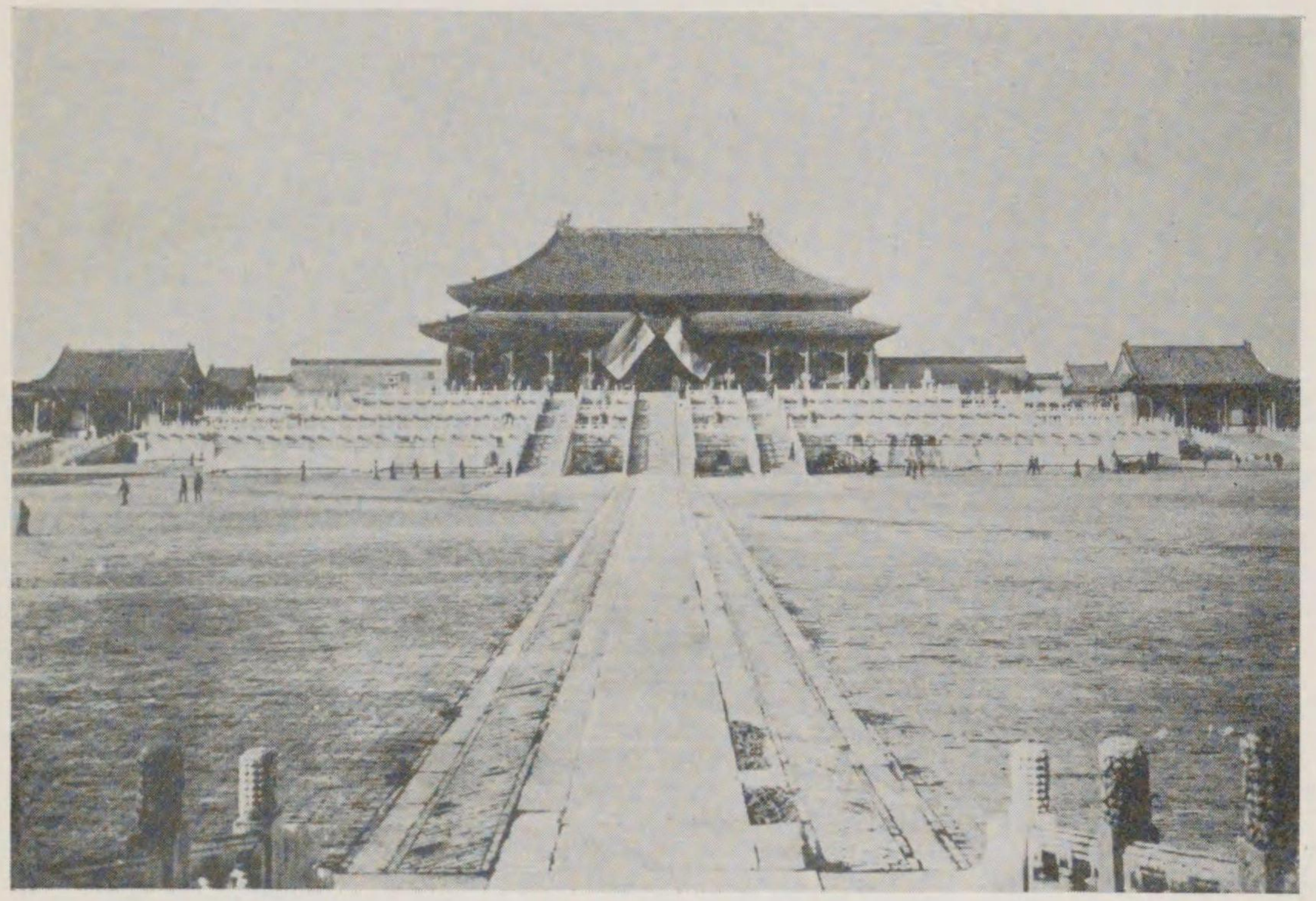
宮殿空を凌いで勢壯なるかな。銅缸寶鼎瑤臺に列す。小春の天氣宸園の裏。花木誰れに向つて深淺開く。

香塘曰。前首描二宮殿雄麗之壯觀一。其中已寓二無レ限感慨之意一。中首敍下想二清朝盛時之衣冠文物一。以傷中今日落寞之夕陽秋艸上。末首述下低二徊宸園一獨觀二無心花木及レ時而開一。一倍增中感レ舊情上。筆筆變化自然入レ妙。使三人尋二言外之意一。

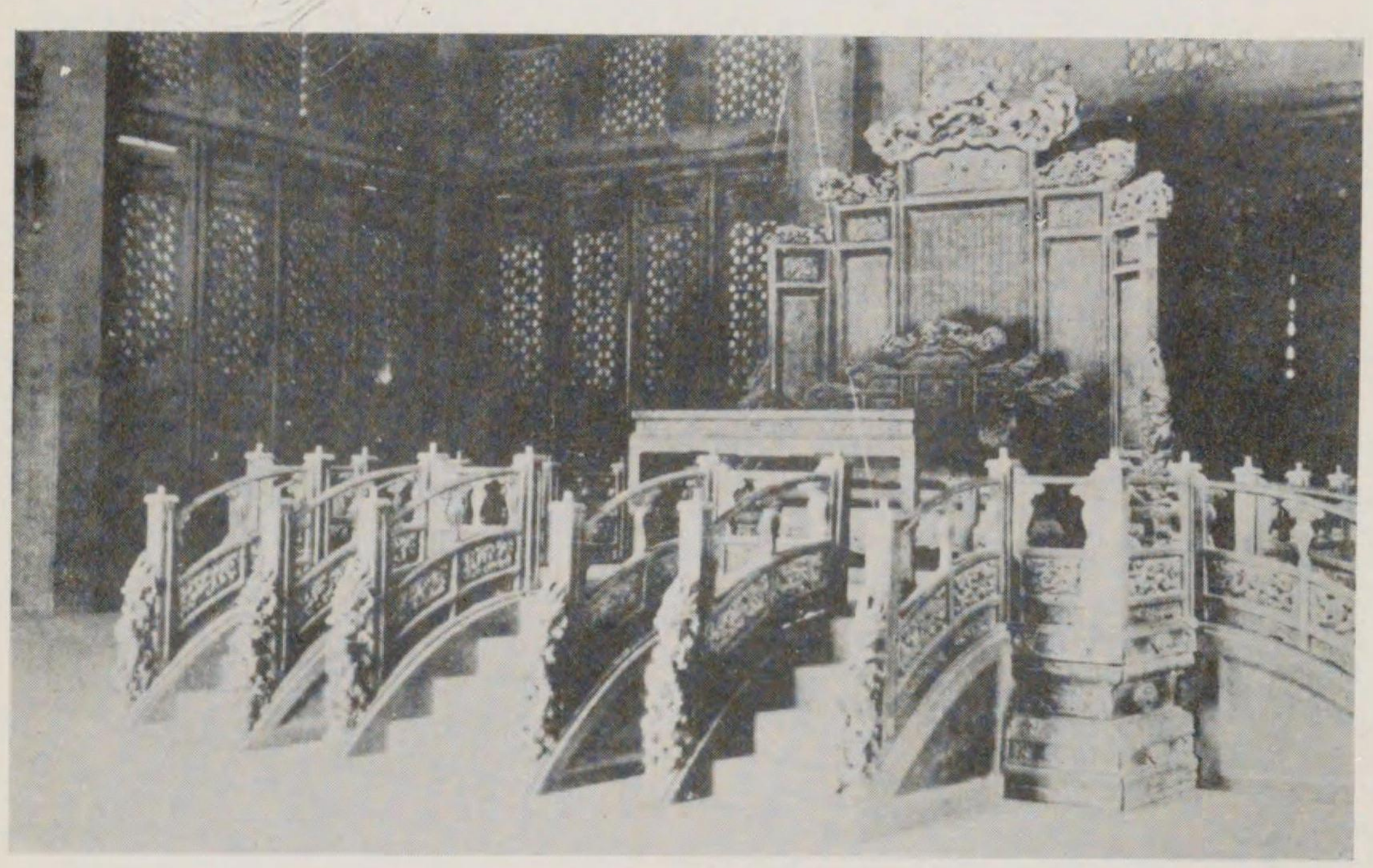
畫禪曰。豪壯偉麗之極。其衰也能使三凄慘二人之心緒一。固雖レ非レ若二陋巷商賈朝興暮廢一。人情感懷之變亦可レ奇。三首齊得而痛烈、能悵レ人者、佳什爲レ可レ欽、

北平

十月十九日夜六時半北平に着した。三井物產會社の北川氏の出迎には、支那語不案內の初旅行者としては非常に嬉しく思つた。特に思ひ設けざりし友人笹川喜三郎氏が立派な自動車を以て迎ひに



北京宮城太和殿



北京宮城太和殿の玉座

來て居られた事は意想外と共に夢かと斗り喜びに堪へなかつた。誰れにも面倒を掛けぬ樣考へて、旅程は行當り主義にて北平に入つた私等一行の北平に着するのを、何が故に笹川氏が知つたか不思議に堪へなかつた。夫れは偶々友人丹澤善利氏が岩崎が北平に行くから賴むと云ふ電報が、冀東政府事務局を通じて、笹川氏宛にて來た其時は六時過ぎであつたと云ふ。笹川氏は六時半の着車迄に二十分の餘地があるとみて驛へ馳け付けたら汽車が着いた。そこに私が居たと云つた工合で誠に奇遇だつた。

そこで北平ホテルに投宿した。笹川氏が冀東政府長官に紹介して吳れた爲め同政府より意外の歡待を受け、玆に千年の古都北平の見學に非常の便宜を得たのであつた。

萬壽山途上

柳楊夾道道低平。　風靜時聞鷄犬聲。
底事營兵頻練武。　劍光帽影閃秋晴。

柳楊道を夾んで道底平。風靜かにして時に聞く鷄犬の聲。底事ぞ營兵頻りに武を練る。劍光帽影秋晴に閃く。

香塘曰。通篇穩勻。結末忽入時事。點景甚妙。

萬壽山口占

萬壽山高氣鬱蒼。　一湖水色入微茫。

珊珊玉步知何處。　女傑當年西太皇。

萬壽山高くして氣鬱蒼。一湖の水色微茫に入る。珊々たる玉步知る何の處ぞ。女傑當年の西太皇。

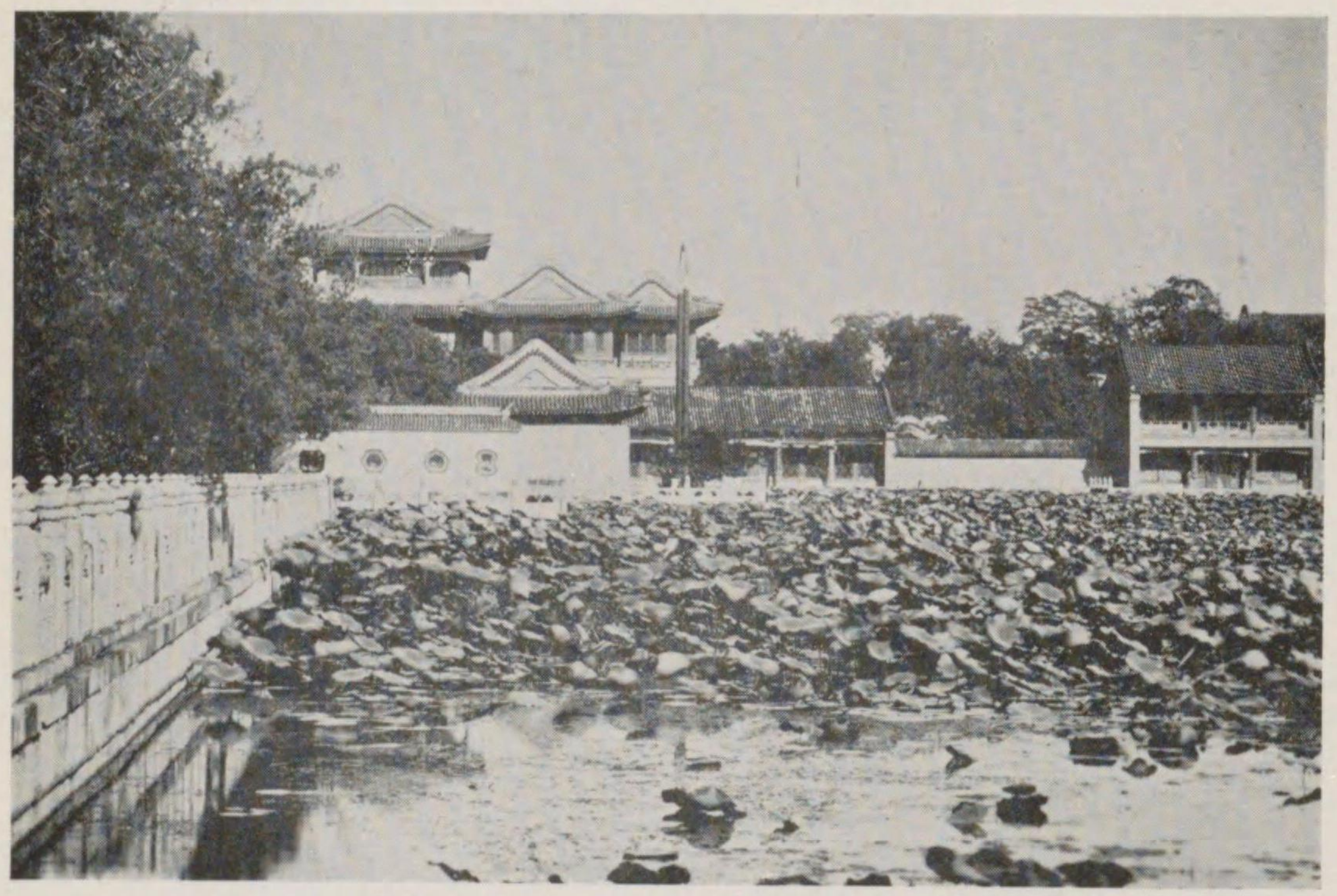
香塘曰。淸朝末路出此巾幗英雄。作者感慨可想見。

畫禪曰。四百餘州暮靄蒼。

北平の紫禁殿と萬壽山

支那人の語に皇后の壯を見ざれば誰れか天子の尊きを知らんと云ふ事を聞て居たが、今度北平卽

北平市長秦德純氏と著者（左は岩崎晃二郎）



萬壽山舞曲殿の遠望

ち之の北京に來て始めて其の壯と云ふ意味を解釋する事が出來た。實の處世界誰れの國の宮殿に於ても斯の如く雄大にして豪壯なるものはないと思つた。ポツタム宮殿と云ひヴイルサユ宮殿と云ひ迚も其壯と大とに於て比較になるものではないと思つた。萬壽山と云ひ天壇と云ひ支那四百餘洲に君臨せる天子の尊嚴と其の偉大さを思はしむるに足るものである。之れを思へば秦始皇の阿房宮なるものは迚も近代人として想像など出來るものでないと思はしめた。

天壇

天壇高築九重場。　天子親臨祈歳穣。
世變依然存玉座。　不看鑾輅響鏗鎗。

天壇高く築く九重の場。天子親く臨んで歳穣を祈る。世變じて依然玉座を存す。看ず鑾輅の響鏗鎗たるを。

香塘曰。天壇愁寂。鳴鑾全絕。觸景生悲。便有無限興亡之感。

孔子廟

古廟千年老栢秋。聖園岑寂思悠悠。
偉哉禮樂傳名教。長與星辰照九州。

古廟千年老栢の秋。聖園岑寂思ひ悠々。偉なるかな禮樂名教を傳ふ。長く星辰と九州を照す。

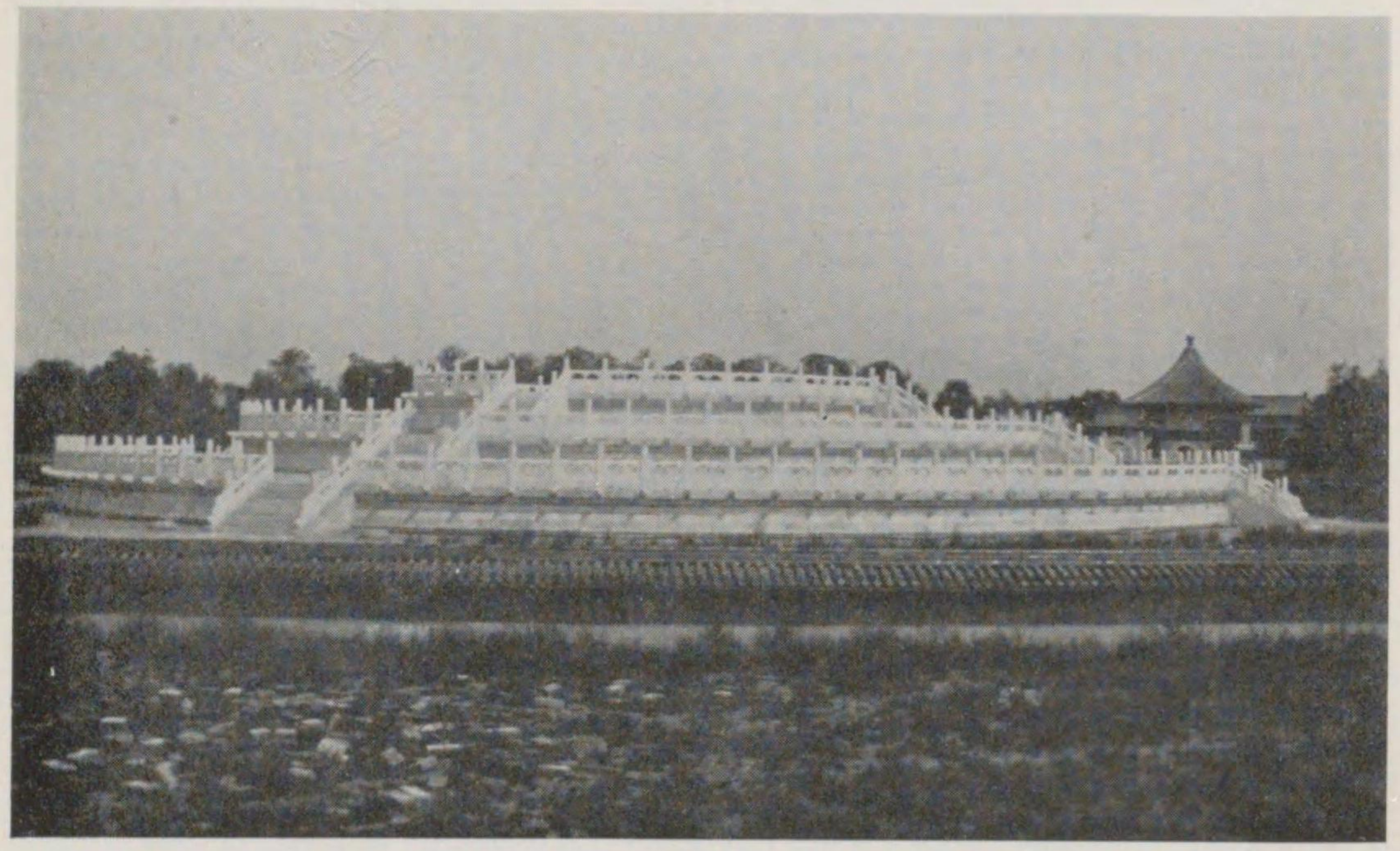
香塘曰。二十八字。典則雅建。頌得善。景仰之意自見。

北平重陽に逢ふ

士女登高佳興長。茱萸菊酒恰重陽。
天壇廓落罩秋色。轉使遊人思故鄕。

士女高きに登つて佳興長し。茱萸菊酒恰も重陽。天壇廓落秋色を罩む。轉た遊人をして故鄕を思はしむ。

天壇（玉座の在る所）



天壇（天子の豐穰を天に祈る所）

北京孔子廟大成殿

香塘曰、辭旨淒涼。更有二風韵一。

殷汝耕氏令夫人の招宴席上

內助多年捧二一身一。　夫君功業有二眞因一。
笑尋二馬齒一言何警。　鶴髮童顏知命人。

內助多年一身を捧ぐ。夫君の功業眞因あり。笑つて馬齒を尋ぬ言何ぞ警。鶴髮童顏知命の人。

香塘曰、佳謔入レ詩。可レ見二洒落之心胸一。

殷汝耕令夫人の招宴

殷夫人は日本人であるが爲め、冀東政權成立後は全く殷長官の股肱である。南京政府は懸賞を以て殷汝耕氏の首を狙つて居る關係上、氏は容易に通州を離れる樣なことは出來ないのである。それで外部に對する種々の御使役には令夫人が相當重要なる役割を演じて居られる。

私等一行を伊丹中將、大山博士と共に北平の旗亭に招待せられたときに、夫人が私に向つて私の健康らしい容貌を見て、「あなたは五十臺位と思はれますが如何です」との問に對して私は卽座に「其通りです」と答へたら一同吹出して仕舞つた。私は此日一日だけは二十才若返つたと思つたので、一首を得て夫人の一覽に供した。

冀東政權と殷汝耕氏

十月二十一日冀東政權の長官殷汝耕氏の招宴に應じて通州の自邸を訪問して長時間の談話を交換した。氏は日本依存主義者である關係上、南京政府の政策の不完備の點を指摘して痛烈なる批評を試みられた。而して氏自身の統治下の冀東地、卽ち非武裝地帶の政治は、全く王道樂土を理想として其の實現に努力して居られた。

茲に冀東政府成立の概要を記述する事とする。

冀東の語源

冀東の「冀」は昔の支那に於ける一つの國名であつた。冀東とは冀州の東と云ふ意味で、冀州は昔の禹の九州の一つで、今の河北、河南、山西、滿洲に跨る地域を指したのである。

古い文献に「伯樂冀北の野を過ぎて名馬遂に空し」と云ふ語が有る、しかし現代の「冀」とは河北省を指して云ふので、從つて冀東とは河北省東部地方のことである。

冀東政府成立の經過

茲に謂ふ冀東政府とは、昭和九年五月卅一日の塘沽協定に依つて決められた支那軍非駐屯區域、卽ち滿洲國隣接の河北省東部二十二縣一萬五千方里、人口約六百萬を算する地域の政治組織の謂ひである。

昭和十年十月香河縣に起つた農民運動に端を發し、同年十一月三日の南京政府の幣制改革案の發表は北支一般民衆の反南京熱を煽るに到り、當時平津衛戍司令たりし宋哲元は、自治運動の第一聲を擧げたのである。引續き山東省政府主席韓復渠の中央政府に對する自治要求あり、之れに次ぎ各地には自治要求の農民の運動が勃發した。

斯くて十一月十五日には戰區行政督察專員殷汝耕を中心として、自治政權樹立要請の通電が發せられた。一方南京政府の妨害術策に韓復渠、宋哲元の北支自治運動は一應挫折したるも、殷汝耕一

派は十一月廿四日戰區自治促進會の名を以て宣言し、廿五日冀東防共自治委員會が成立したのである。而して殷汝耕を委員長として十一月廿六日には戰區の財政獨立を宣言し、河北省政府からの獨立的意思をも表示し、併せてその施政方針をも宣布した。

越えて十二月廿五日には冀東防共自治委員會は改組して、冀東防共自治政府として新生し、殷汝耕を長官に財政、民政、教育、建設の四廳の組織が成り、玆に完全に南京政府の覊絆を脫した政府組織が完成したのであつた。

日本が滿洲國に對する不可分關係を支持する以上は 冀東政權の擁護は絕對でなければならない。然し領土的野心のない事も誤解されてはならない。

冀察政權

冀東政府の樹立に刺戟されて、十二月十一日には冀察政務委員會が成立し、宋哲元が委員長として國民政府治下の新なる北支那の政治組織が成つた。而して經濟、外交、交通、建設の四廳を設け自治政を布くに至つた。

其の地域は冀東地區を除く河北省と察哈爾省との廣範な區域で有る。兩省の人口は一億以上と稱せらる。此の冀察政權に對して相當調査を進めて居ることもあるが、今南京政府と交涉中に屬するを以て、玆に誤れる觀察を記する事を恐れ、是れ以上記する事を止める事にした。

萬里長城

四海似風驅艸萍。　秦皇威武奮雷霆。
人間興廢君休說。　萬里長城亦晝屛。

四海風の艸萍を驅るに似たり。秦皇の威武雷霆奮ふ。人間の興廢君說くを休めよ。萬里の長城も亦晝屛。

香塘曰。格力勁健。辭氣雄壯。作者本色。誰敢抗衡。

耋禪曰。晝屛一句。籠絡人之心意。豈止長城萬里。

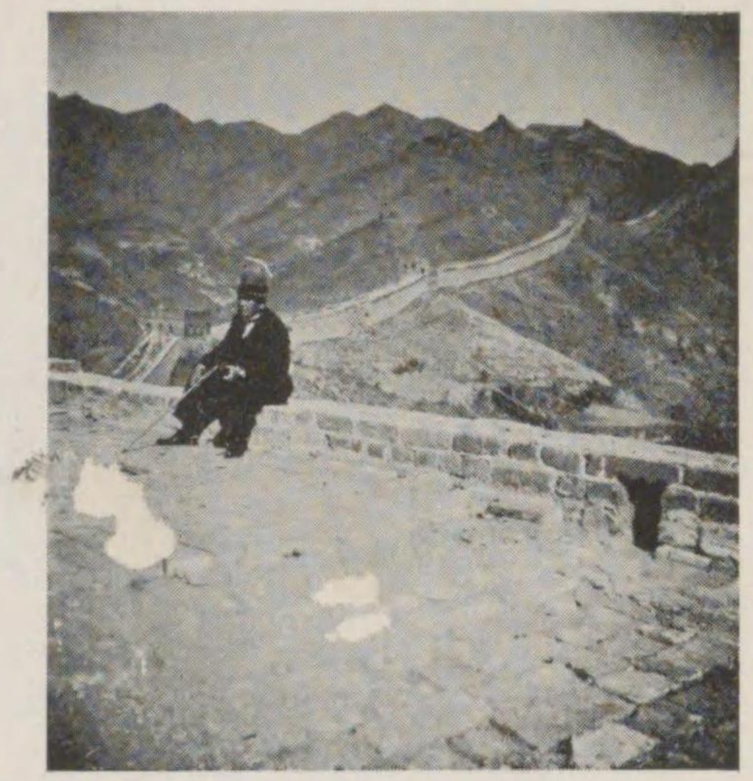
萬里長城

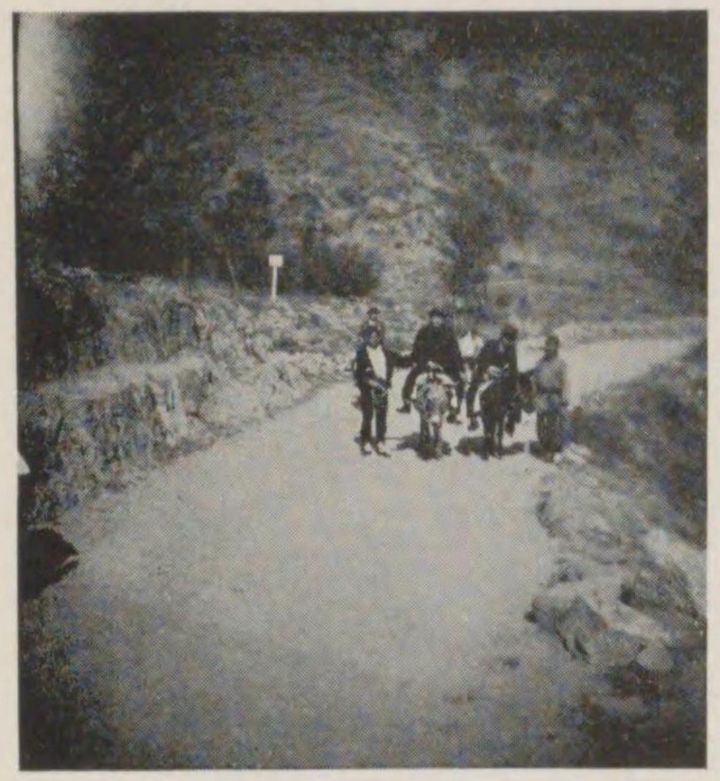
淸水安三氏に案內せられ八達嶺に至て、萬里長城の見物に一日を送つた。行程約三時間で驛から

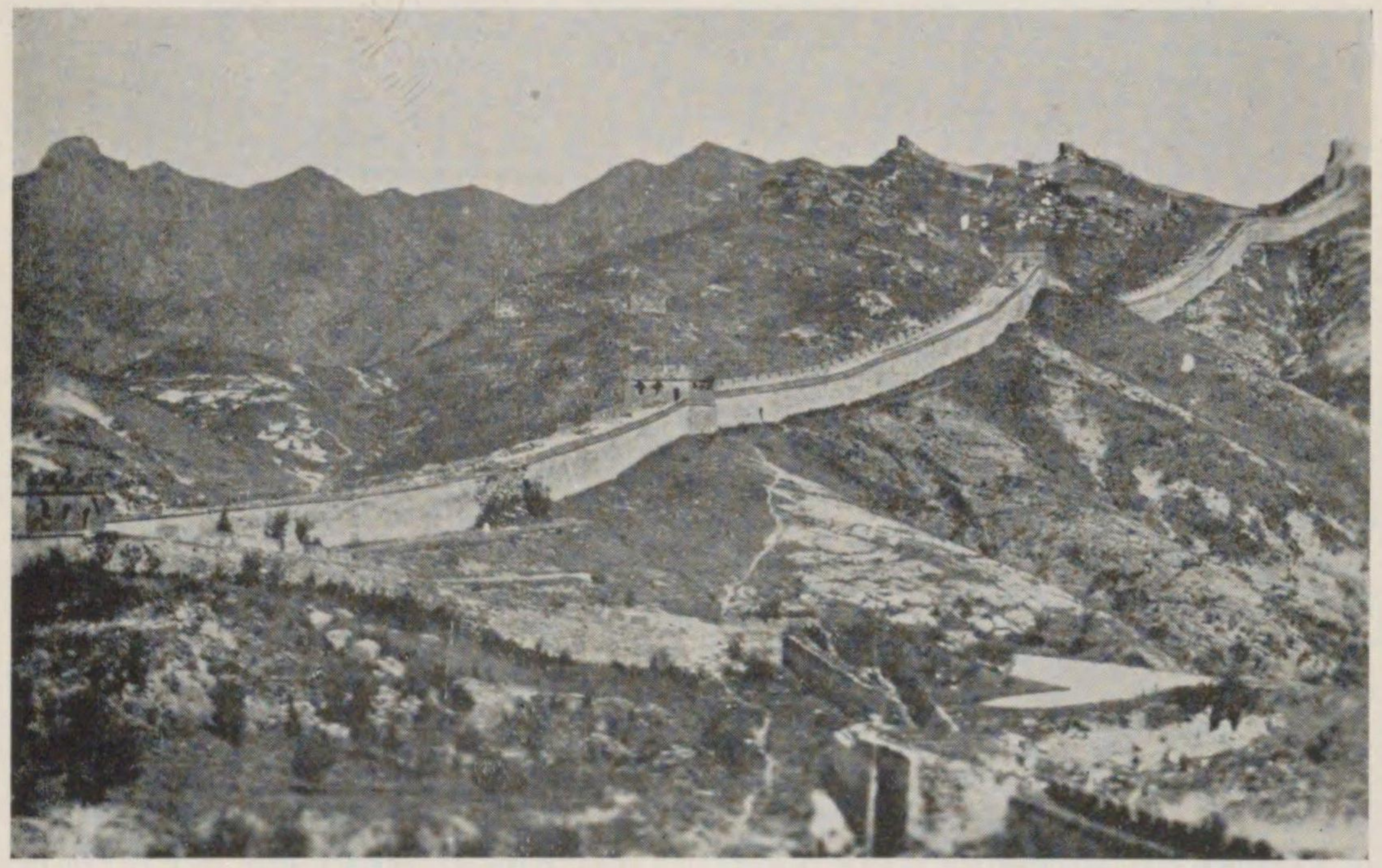
驢馬又徒歩で約一哩の八達嶺に着した。一見其の規模の高壯雄大なるに驚かされた。

私は歴代の朝廷が如何に蒙古軍を恐れたかを想像したと共に、古代文化が如何に進歩して居つたかを思はずには居られなかつた。秦の始皇が萬里の長城を築いたとの歴史からみれば、二千年前の築造であるが、其の餘程以前から匈奴の來襲に備へ、處々に築城したものを始皇に至つて完成したものだと云ふ事である。年代から見ると二千年のものもあれば、四千年のものもあるのである。然るに幾千年後の今日其の基礎と云ひ、其の城壁と云ひ、微塵も損傷を見ずして築城當時の威容を存し、而して今後猶幾千年も其儘風雨に曝されても破壞する樣子もないと云ふに至つては、其の當時の文化の發達が想像し得らるゝのである。

併し斯の如き要碍の城を以てしても、興敗存亡の數理には打勝ち得ざるものたるを思へば、人間たるものどうしたらよいのであるか。此の難問を掲げて其解決を讀者の宿題として答案を求めんとするものである。


萬里長城と著者


驢馬上の著者


萬里長城全景

満鮮雑錄

昭和十一年十二月十五日印刷
昭和十一年十二月二十日發行

定價三圓八十錢

著者　岩崎清七
東京市神田區小川町一ノ六

發行者　小野貞
東京市神田區神保町一ノ三四

印刷者　尾藤光之介

發行所　秋豐園出版部
東京市神田區小川町一ノ六
電話神田三五四四番
振替東京二五六六九番

(開明堂印刷)

詩體の研究 と唐朝の詩壇

交詢社講師 細貝香塘著

著者獨特の平易流暢な文章で、複雜極まる多種多樣のあらゆる詩體を豐富な實例で面白く解說してある。讀んだゞけでよく味はへるから、恐らくこれほど親切な、興味深い漢詩講義は他に無いであらう。（四六判六百五十餘頁。本文上等コットン紙使用、極上布裝函入美本 （價四・五〇 〒一四）

細貝香塘著

漢詩讀本

四六判上製函入口繪入和紙裝美本 價二・〇〇 〒一二

箒のあと 廉價普及版

箒庵 高橋義雄著

本書は著者が七十餘年の複雜多端なその生活と今までに交際した周邊の人物と、そして遭遇した多くの面白い事件の逸話などを約一ケ年の永きに亘つて、東京の都新聞に連載發表した不朽の名隨筆。（上下二卷、千二百頁函入、貴重寫眞六十餘頁入 上卷價一・八〇 下卷價一・九〇 〒各一四）

高橋義雄著

上布裝特製版 箒のあと

上卷價二・五〇 〒一四 下卷價三・〇〇 〒一四

茶道讀本 改訂版

箒庵 高橋義雄著

茶道のあらゆる知識と心得は悉く收めて此の一卷にある。茶道の根本から具體的に說き起し、茶室・庭園・器具・裝飾・坐作・進退・手前に至るまでの一切を、凡ゆる階級の紳士淑女の爲に廣く深く而も簡明に書綴られた茶道講義の決定版（上製和紙裝函入、口繪寫眞多數入 價一・五〇 〒一〇）

箒庵 高橋義雄著

隨筆 趣味ぶくろ

上製絹裝函入の美本 價二・五〇 〒一四

天正昭和 北野大茶湯

箒庵 高橋義雄著

豐公北野大茶湯三百五十年記念大獻茶會の完全な記錄を、その主催者の委囑によつて編纂されたものである。併し唯著者の單なる實見茶會記と云ふだけでなく、天正大茶湯の懷古錄であり、又天正・昭和大茶會の興味深き比較研究論文でもあるから面白い（極上和紙裝函入 價二・五〇 〒一二）

松山米太郎校註

註解 茶道四祖傳書

和裝美濃判袋綴帙入 價八・五〇 〒二三

十二ヶ月 **茶の湯** 放送講話

箒庵 高橋義雄著

一年間のラヂオ放送でおなじみの茶の湯講話。現存する名器數百種を例に採り、十二ヶ月に亘つて四季折々の時節と環境にふさはしい茶會を仕組んであるので、茶の趣向とか茶室・道具・掛物・花等の取合せが實例によつて總てよく理解出來る（上製紙装函入、寫眞多數入 價一・五〇 〒〇八）

魚谷常吉著

精進料理

四六判上製三〇〇頁 和紙装函入の美本 價 二・〇〇 〒一〇

放送 **懐石料理** 十二ヶ月

築地 八百善主人著

【八百善主人談】接客料理の御參考となり且つ一般御家庭の御臺所にも廣く應用される様にと苦心編纂致しました。拙筆の盡し難い個處もなか〳〵多いけれども、當家傳統の趣向とか板前のコツとかを出來るだけ公開した點を御諒承願ひ度う存じます（上製函入、寫眞多數 價一・三〇 〒〇八）

赤堀旺宏著

即席一品 **支那料理** の作り方

上製和紙装函入美本 價二・〇〇 〒一〇

料理隨筆 **味覺法樂**

魚谷常吉著

【主要目次】皮の味・料理の地方色・料理と酒・食ひ合せの話・料理の値段・東西料理の比較・河豚・食味と年齢・活と野締の辯・屋臺店・人間の餌・關東鮨と關西鮨・日本畫と日本料理・雜物の味・臍を食ふ話・雌雄何れが美味いか・その他數十篇（上製和紙装函入美本 價一・五〇 〒一〇）

魚谷常吉著

名物料理たべある記 **滋味風土記**

上製和紙装函入美本 價一・五〇 〒〇八

魚料理

魚谷常吉著

魚料理は名に負ふ著者の最も得意とする所だ。料理法三百餘種のうち例へば河豚の絶對安全調理法のたつた一項だけを見ても、十分購讀の價値があると云へよう。食通達に嬉ばれる讀物として、又料理專門家の座右の參考書として、此の上もない面白いものだ（上製布装函入 價一・五〇 〒一〇）

魚谷常吉著

野鳥料理

四六判上製函入 上等布装の美本 價一・五〇 〒一〇

人工/E-18